
拙き者へ ルーフェイア・シリーズ15

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拙き者へ ルーフエイア・シリーズ15

【Nコード】

N34580

【作者名】

こっこ

【あらすじ】

反王道、安易なご都合展開ゼロ。「無情という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ 神の力を手にした者たち。そして棄てられた者たち。その瞳は何を見るのか……。心優しい美少女が織り成す、異色の学園ファンタジー第15弾。ちよつと珍しい、ルーフエイアとタシユアの話です。けっこうシビアかな…… “夜8時過ぎ” 毎日更新です。携帯版は1行毎の改行or空行です

Episode : 01

R u f e i r

「ああグレイス、ちょうどよかった」

「——その呼び方、ここではやめて」

頭が痛くなる。

さつきまで寮に居ただけだけど……「人が尋ねて来ている」と連絡があつて、あたしは慌てて玄関まで行つた。そして待っていたのが、よりによってファールゾンだったのだ。

シユマーの技術集団の、事実上のトップ。専門は医療だけど、ずば抜けた頭脳で他の分野もこなす。

ただ、かなり性格に難在りだ。

「君を名前で呼んでいいのか？ おかしな感じだな」

「じゃなくて、“グレイス”をやめて」

彼はけして悪い人間じゃないけど、時と場所を一切わきまえない。だから何とか早く追い返さないと、どんなトラブルが起こるか分かんかった。実際前に来たときも、見事にトラブルを起こしている。

「それでいったい何の用？ わざわざここまで、採血でもしに？」

「それもあるんだが……この学院に、タシユア「リユウローン」という青年がいるだろう？」

「……え？」

思つてもみなかつた言葉がファールゾンの口から飛び出して、一瞬思考停止する。

ただ当の本人はそれに気づかず、お構いなしに話を進めた。

「彼に会わせてもらえないか？ 組織サンプルが欲しいんだ」

「—— なっ、なにをいきなり、言い出すのよ！」

彼の非常識は今に始まったことじゃないけど、これはあまりにも度が外れている。

けど当のファールゾンは、あたしが絶句していることにさえ気づかないみたいだった。

「いや、前にほら、問い合わせをしてきたろう？ その時の結果を思い出してね。確か彼は、かのジェイル博士の作品だったと思うんだが」

「作品、じゃないでしょう！」

ファールゾンと話していると、何もかも一つ一つが疲れる。

「そうか？ とにかくあのジェイル博士の研究は、どれも素晴らしいんだ。だからタシユアの生体情報を……」

「だめよ！」

思わず声が荒くなる。

「なぜだい？ 別になにかしようってわけじゃない。採血させてもらっただけだ。別に、たいしたことじゃないだろう？」

「そっという問題じゃないわ！」

用もないのに組織のサンプルを取られた上に、生体情報を解析されるなんて、普通の人間だったら許せないに決まっている。

それになにより、こういった話をタシユア先輩にはしたくなかった。

Episode : 02

「ともかくダメなものはダメ！ あたしの採血だけしてさっさと帰ってくれる？」

「髪の毛の1本でも構わないんだが」

「ダメだって言ってるでしょう！」

研究熱心なのはいいけれど、こうなると頭に「バカ」の字がつくともかくどうにかして、ここから引き離さないといけない。
と。

「こんなところで何をしていますか。他人の迷惑を考えなさい」

「あ、タシユア先輩……」

言ってしまったてからはつとする。最悪のタイミングだ。

「ああタシユア、いいところに。すまないが少し、採血させてもらえないか」

「ファールゾン、やめなさいっ！！」

とつさに怒鳴りつけたけど、それでやめるようなら苦労しない。けど先輩が口にした言葉は、予想とはまったく違うものだった。

「ルーフェイア、イマドが探していましたよ」

「イマドが……？」

何の用だろう。

考え込むあたしに、シルファ先輩も声をかけてきた。

「これから町へ買い出しに出るんだが……何か食べたいケーキはあるか？」

「えっと……」

何かと訊かれても、よく分からないのだけど……。

そもそもあたしじゃなくて、問題はここにいるファールゾンの気が。

「おい、聞いているのか？」

ファールゾンの声がいくぶんか荒くなる。珍しく自分が無視されてることに気づいたらしい。

ただそれ以上はぜんぜん駄目そうだ。何で無視されてるかが分かってない。

さすがに呆れて、あたしが口を出そうとしたとき。

「先ほどから猿がうるさいですね」

しばらくの沈黙のあと、ようやくファールゾンが口を開く。

「猿……とは、僕のことか？」

「他に誰がいます」

ここにきて、ようやくタシユア先輩がファールゾンの方を向いた。いつも以上に冷たい声。

——先輩、怒ってる。

もっとも肝心のファールゾンは、いつもどおりで気づいていない。

「うーん、今までいろいろ言われたが、『猿』は初めてだな。でも僕に似た種類の猿は居なかったと思うな……」

冗談も皮肉もどうも通じないファールゾン、的外れな事を言っている。

Episode : 03

「それで、組織サンプルをもらいたいんだが」
性懲りもなくまた彼が繰り返した。

ただ、相手はタシユア先輩だ。ここまで話をこじれさせたら、交渉がまとまるわけが無い。

「お願いですから、人間の言葉を話していただけませんか。あいにく、猿の言葉まではマスターしていませんので」

「あれ？ シエラは多国語を教えてると聞いたが、違ったのか？」
見ているこっちははらはらする。

「……シルファ、行きますよ。時間はありますが、猿の相手をしてられるほど暇ではありませんから」

「あ、だからちょっと待ってくれ」
さっさと行こうとするタシユア先輩の肩を、ファールゾンがつかみかける。

けどその手が触れるか触れないかといったところで、先輩が動いた。すつとよけて、そのままファールゾンの顎をつかむ。

——うそ。

爪先が浮いていた。
タシユア先輩に比べればやや低いけど、それでもファールゾンは平均的な成人男性の体格をしている。

その彼を片手で……。

「先ほどから雑音を発するのは、この口ですか？」
苦しいのだろう、ファールゾンが必死に先輩の腕を掴んで振りほ

どうとしたけど、びくともしなかった。

「なんのつもりか知りませんが口クに挨拶もしないうえ、組織を分けてくれないか、ですって？　どういう教育を受けてくればそんなことが言えるようになるのか、知りたいですね」

そこでファールゾンが放り出され、尻餅をついた。先輩が力を抜いたんだろう。

咳き込みながら彼が言う。

「噂には、聞いていたが……シエラというのは、しゅ、シユマー以上に乱暴だな。グレイス、やっぱりここはやめた方がいいんじゃないか？　キミまできつと、ガラが悪くなる」

「それとこれとは関係ないでしょう！」

いきなり無関係の話を振られて、あたしは思わず怒鳴った。

Episode : 04

「ともかくいい加減にして。用がないなら帰ってちょうだい!」

「でもその、彼の組織サンプルをもらわないことには……」
性懲りもなくファールゾンが、またその話を口にする。

——それにしてもしつこい。

普段ならさすがに引き下がってるはずだ。良いか悪いかは別にして、シュマーはあたしの言葉にはまず逆らわない。

「だから、それはダメだって言ってるのがわからないの?!」

「ダメって言われても、必要なものは必要なんだが……」

「いったい何に必要だって言うのよ!」

何度言ったら分かるんだろう?

研究を進めたい気持ちは分からないでもないけれど、だからって赤の他人まで使うなんて非常識、許されるわけもないのに。

「なにに必要って……そりゃ、グレイシアの治療だよ。彼の生態情報とつきあわせれば、あの子の欠損部分を補完できるんじゃないかと思うんだ」

「——! なんでそれを先に言わないの?!」

これはもう、常識外れって域じゃない。バカさえ通り越してる。なんでこんな大事なことを、訊かれるまで黙ってるんだろう?

「え? だから言っただじゃないか。彼の生態情報を解析したいって「そういう話じゃなくて!」

「——2人とも、漫才はそのくらいにしてください。聞いてる方が馬鹿らしくなってます」

タシユア先輩の呆れ果てた声が間に入って、ようやくファールゾンのバカが止まった。

「そんなに馬鹿らしいかな？ まあいい、それで悪いがサンプルを……」

ファールゾン、まだめげずに同じセリフを言うし……。

「死にたくないのなら、まずきちんと挨拶してお願いしなさい」

「ん？ あ、今からでもいいのか？」

「いいから！」

どつと疲れてくる。あたしも世間一般にはけて詳しいわけではないけれど、ファールゾンときたらその数倍という感じだ。

ただこの妙なやりとりとは裏に潜んでいるのは、おぞましい事実だった。

ことの発端は、3週間ほど前に遡る……。

Episode: 05

——やっぱり、ダメかな。

ため息をつきながらあたしは顔を上げた。

机の上には何冊もの本が積み上げてある。今学期末のレポート用だ。でもどれも、資料としてはいまひとつだった。

課題は単なる歴史のまとめだ。ただローム文明——だいぶ前に滅びた南大陸の文明——まで遡ってまとめようとしたせいで、資料集めの段階で引っかけたてしまっている。

学院の図書館は、けして蔵書数は少ない。ただ使う生徒の数も多いし予算も限られているから、何でもというわけにはいかなかった。

これ以上となると、ケンディクの中央図書館まで行かないとダメだろう。

ただそうになると、何かと面倒だ。

いっそのこと、ファクトリー——シュマーの本拠地——から取り寄せようかなどと思ってしまふ。

なにしろああいふ家だ。資料庫や辺りを漁れば、うまくすると2千年以上前のものが出てくる。事実この間は、「ネゴリ記の解釈」の初版本が出てきた。

けどそれをやるわけにはいかないのが、辛いところだった。

というのも殆どが未公開の極秘扱いだし、なによりこれを使うと他生徒とのギャップが開きすぎて、反則としか言いようがなくなってしまう。

結局、「普通に」入手できる資料を片っ端から当たるしかなかった。

だけど図書館の資料は殆ど当たり尽くしてしまったし……。
と、人の気配がした。

明らかにあたしに用事があるような動きだったから、誰だろうと思つて振り向く。

「あ、タシユア先輩」

ふだん気配をさせない人だけど、気を遣つて分かるようにしてくれたんだろう。

ちようど良かったと思いながら口を開く。タシユア先輩なら、この図書館のことは隅々まで知ってるはずだ。

「先輩、あの、お訊きたいことがあるんですけど……」

「そうですか。私もあなたに訊きたいことがあります」

「——え？」

考えられない話だった。だいいち今までこんなふうに、「訊きたいことがある」なんて言われたことが無い。

「ええと……聞きたいことつて、なんですか？」

「ルーフェイアからどうぞ」

言われて思い出す。

タシユア先輩、意外にも順序とか礼儀を重んじる。今は偶然あたしが先に訊いたから、先に言えというんだろう。

「えつと、あの、大したことじゃないんですけど……ローム時代の資料つて、これ以外にこの図書館にありますか？」

本の山を指差しながら訊く。

「ふむ……」

先輩が机の上を覗き込んで、タイトルを確認した。

「そうですね、これでほぼ全部です。もともとローマ文明に関する資料自体が少ないですね。——おや、『ネゴリ記の解釈』の原語版が入っていませんね。と言っても改訂版ですが」

「え、あるんですか?!」

Episode : 06

『ネゴリ記』はローマ文明時代に書かれた歴史書で、現存する数が極めて少ない。しかもどれも傷みが激しくて、今世界中に残ったものを集めて復刻の最中だ。そのせいで五百年ほど前に書かれた解釈本『ネゴリ記の解釈』が、今ではまるで本家のような扱いになっていた。

けどこの解釈本の原語版も希少だ。だから学院に在るなんて思わなかった。

「1冊ですがありますよ。以前、読みましたから」
タシユア先輩がさらりと言う。

けどあの原語版、ローマ語だから読むだけでも大変だ。大人だって相当てこずるだろう。なのにそれをもう読み終わってるなんて、さすがとしか言いようがない。

けどそういうことなら、実家から取り寄せられると思った。図書館にある本だったら、自分で持っけていても反則にはならないだろう。ともかくあの本を資料に使っていいなら、殆どの部分が片付く。

「ありがとうございます。……それあの、先輩の話って……」
あたしは軽い気持ちだった。
けど、先輩の雰囲気さがらりと変わる。

「ルーフェア、この大陸にあるシュマーの廃棄ファクトリーのこととは、知っていますね？」
「え……」

背筋が冷たくなる。

確かにそういうものは、このユリアス大陸にある。でも当たり前だけに極秘で、シュマーの間でも今はあまり知る人が居ない。なのに部外者の先輩がどうして……。

「ルーフェイア、質問に答えなさい」

いつもに増して冷たい声に、意識が引き戻される。そしてなぜか同時に、この先輩はシュマーの通信網に潜り込めることを思い出した。本来なら内部の者しか知らないはずの情報の出所は、そこだ。

——うちの連中、なにやってるんだろう？

たった一人の侵入者も食いとめられないなんて、話にならない。かといってこの先輩に、「入らないで」と言ったところで無意味だろうし……。

「ユリアスの廃棄ファクトリーは……聞いたことは、あります……」
声が震えるのを押さえて答えた。

「なるほど……『聞いたことがある』ですか。それ以上のことは何も知らない、と？」

感情の見えない声が、淡々と事実を指摘する。

確かにこのユリアス大陸の東側にあるエル二群島には、かつてメインファクトリー——要はシュマーの本拠地——があった。

ただ、ずいぶん昔の話だ。今は本拠地は南大陸に移っていて、ユリアスのは使われていない。

Episode : 07

本拠地を移したのは、もう何百年か前だ。魔獣雨にやられた南大陸に巨きな地下空洞が見つかって、そこへ移った。

とはいえアヴァンはじめ主要国のある西大陸に近いユリアスは、何かと便利だ。それで主力として使われなくなった後も、医療施設として残され、療養地として使われていた。

ただ100年ほど前から、群島から程近いタルカインの町が発展し始めて人口が増えたこと。それに施設の老朽化の問題があつて、今は廃棄されている。

けど先輩の口調は、明らかにそれ以上のものを知っているようだった。

「あの…… 廃棄されたファクトリーで、なにか……？」

先輩は答えず、かわりにただ、じつとあたしを見つめる。

——怖い。

視線だけであたしを殺せるんじゃないか、そんな気がしてくる。身体がまるで麻痺したように動かなかった。

「…… 本当になにも知らないのですね。大した管理体制ですこと」
声と同じで、何の感情もない表情。

間違いない。その廃棄された施設で何かあつたのだ。それもとんでもないことが。

これ以上は時間の無駄だとばかりに踵を返した背に、慌てて声をかける。

「何があつたんですか？ 教えてください！」

知らなければならぬ、それだけが頭の中にあつた。

この先輩が怒りを覚えるようなことから、並大抵の話じゃない。だつたら尚更、あたしが知らなきゃいけないはずだ。

「先輩、お願いです！」

「話をするよりも、実際に見た方が早いでしょうね」

言われてぞっとする。まさかそれほど話とは、思わなかった。

「すぐにでも、そこへ向かいます。行けますか？」

「わかりました。すぐに連絡して、船を用意させます」

ケンディクの港には、シュマーの高速艇が常に何隻か停泊している。今連絡しておけば、あたしたちが連絡船で着くころには準備が出来るだろう。

「では、船着場で。準備が終わつたら来てください」

言つて先輩が図書館を出て行く。

あたしも急いで部屋へ戻つて、まずシュマーのほうへ船の事を連絡した。

それから物入れや何かを開けて、要りそうなものを引っ張り出す。戦闘用の服、魔法薬、携行食料……。

必要最低限の装備だけ用意して船着場で向かうと、もう先輩が待っていた。

二人で連絡船に乗り込む。先に乗っていた生徒たちが不思議そうな顔であたしたちを見たけど、気にする余裕はなかった。

Episode : 08

—— いったい、なにがあっただろう？

そればかりが頭の中をめぐる。

シュマーとロシュマーの情報は、あたしもそれなりにチェックしている。それに何かあれば、必ず母さんか姉さんから連絡があるはずだ。

それなのに知らないことがあつたなんて……。

どこかが何か、情報を隠していたとしか思えなかった。でもそれを認めてしまったら、身内を片っ端から疑うしかなくなる。

それとも、疑わないあたしがおかしいんだろうか？

嫌な気分だった。

いつもはただ綺麗に見える海が、ひどく悲しく見える。けど逃げるわけにはいかなかった。

—— あたしは、シュマーに責任がある。

あたしや母さんの知らないところで誰が何をしでかしたかは知らないけれど、始末はつけなきゃならないだろう。

やがて連絡船が止まる。

無言でさっさと降りていくタシユア先輩のあとを、あたしも慌てて追った。まっすぐ船まで行くとっておいたので、迎えの者はない。

夕闇に沈もうとする大好きな街が、涙の色に見える。

「どこの埠頭です？」

「あ、こっちです……」

今度はあたしが先輩を案内する格好になった。

少し歩いて、目的の埠頭に付く。無言のタシユア先輩と並んで、停泊している船を見上げた。

どちらかと言えば小型の実用船。ただ無駄がないためか船影は滑らかで、もう準備の出来た高速船が停泊していた。さっそく乗りこむ。

「グレイス様、迎えも出さずに申し訳ありません」

現れたのは、ケンディクに駐在しているドワルディだった。迎えは要らないと言ったから、こっちへ来たらしい。

「ううん、いいの。こっちこそこんなに急で……ごめんなさい」

「我々相手に、気を遣ってくださいさなくてもよろしいですよ」

彼の言葉は優しい。

ただこれが本心からかは、少しだけ疑問だった。シュマーの面々は普通の人と違って、あたしには逆らえない。

その血に刷り込まれた本能が言わせているのか、それとも純粹な思いからかは、あたしにはよく分からなかった。

Episode : 09

「エル二群島と伺いましたが」

「……うん。えつと、どのくらい……かかるの？」

そういえば所要時間を聞いていなかった。とりあえず「いちばん早く行ける船を用意してほしい」とだけ、伝えたのだ。

「そうですね。巡航速度で行って……明後日の夜明け頃でしょうか」
「けっこう……かかるんだ」

でも仕方ない。このユリアス大陸、案外広いのだ。

「もう出せる？」

「はい、15分ほど時間をいただければ」

「じゃあ、お願い」

言ってから気が付く。

「ドワルデイも……行くの？」

「はい。もつとも、船の上だけになりそうですが」

しれつと彼は答えたけど、あたしは内心ほつとしてた。何しろ何が起こっているのかさえ分からない場所だ。そんなときに例え船の上でも、臨機応変に対応してくれるドワルデイが居てくれるのは、かなり助かる。

「船が出る前に、部屋へご案内いたします」

「あ、うん」

ドワルデイを先頭に歩いていく。

船の中は狭かった。

優美だけど平凡な見かけとは裏腹に、この船はがっちり武装し

ている。だからそれにスペースを取られてしまつて、人間のための空間はギリギリしかない。

「狭くて申し訳ありませんが……」

「ううん、気にしないで」

案内された部屋は確かに狭かつた。でも上段がベッドで下段にテーブルなんか置かれてる、ちゃんとした居住スペースだ。往復乗るだけなのを思えば十分だろう。

「お連れ様は、隣の部屋をお使いください」

「ありがとうございます」

それだけ言う就先輩はさつさと部屋へ入つて、それきり出てくる気配はなかつた。

あたしも案内された部屋の中、僅かな荷物を放り出して座り込む。

—— いったい何が、待つてゐるっていうんだらう？

どれほど考えても、見当さえつかかなかつた。

何しろ廃棄された場所、それも殆どが地下の施設だ。動力もない状態じゃ、まともに暮らす事さえ出来ない。

そんなところで、何が出来るのか……。

あたしの不安を乗せたまま、船が動き出した。

Episode:10

Tasha side

それは、偶然だった。

夜になるとタシユアは、魔視鏡を介して通信網へ入り込む。

画面の向こうに広がる情報の海は、タシユアにとって格好の遊び場だった。何しろ腕一つで、極秘情報をも手に入れられるのだ。

もつともタシユアの場合手に入れたからと言って、何をするわけでもない。「知る」ことと「防壁を突破する」ことに対しての欲求だけが強いために、知ったところで満足してしまい、また次の関連情報を探しに行くのが常だ。

中でもよくタシユアが潜り込みに行くのが、シュマーの通信網だった。

理由は単純で、面白いからだ。

シュマーは戦闘集団と言われるだけあってリスク管理が徹底しており、通信網の防護もきちんとしている。とはいえ、人間のやる事だ。必ず穴はあった。

それを見つけて、潜り込む。難易度が高いだけにこちらも知恵を絞らねばならず、しかも同じ方法は二度と通用しないため、純粋に面白い。

シュマーの通信網に潜り込んでいるのがタシユアということとは、実は向こうも把握済みだ。事実以前サリアー——シュマーの事実上の？——は会った時にそれとなく口にしていたし、カレアナに至っては直接苦情を言ってきたこともある。

ただその苦情は「潜り込むな」ではなく、「映像を作った子供たちが泣くから、この魔視鏡の内容は消すな」だったのだが。

その場合は「消されるような場所に置くのが悪い」と返したタシユアだが、その後そこだけは記録を破壊していない。子供たちの力作と分かっているのは、さすがに大人気ないだろう。

ともかくタシユアはそんな半黙認状態で、シュマーの通信網に裏から出入りしていた。

——体よく使われている気はするが。

潜り込むたびに向こうの防御が進化している辺りから考えるに、これ幸いとカレアナ辺りが指示をして、セキュリティーチェックに利用しているのだろう。だがタシユアのほうもそれを乗り越えるのが楽しいのだから、お互い様だ。

そうやってその晩もタシユアは、シュマーの通信網に潜り込んでいた。

なにやら防壁が変わっていたが、新人にでもやらせたのか細かい穴があちこちにあり、割合簡単に進入できたのを覚えている。それで予想より時間に余裕が出来、タシユアはその晩、いつもより細かく通信網を観察していた。

異変に気づいたのも、偶然のようなものだ。

たまたまそうやって観察していたところへ、誰かが通信を送ってきた。ただそれが正規のルートではなかったために目に留まった。

興味を惹かれてこっそり追跡したのは、この発信者が自分と同じように、外から不正にアクセスしようとしていると踏んだからだ。それならば十分、正規ルートを避ける動機になる。

だが逆探知した先は、どことも知れぬ魔視鏡の中だった。てつきりどこかの企業が組織だろうと思っていたのだが、読みが外れたようだ。

場所を精査してみると、ユリアス国内だった。

Episode : 11

(エル二群島……?)

そう名づけられている場所があるのは知っている。このシエラがある群島と似たような所で、確か大陸の東側、東大洋に面したところだ。ユリアス大陸西南にある学院やケンディクとは、大陸を挟んでおおよそ反対側になる。

ただ、無人島だったはずだ。たしかそんな話を昔聞いたことがある。

(とはいえ、現実には人が居るようですね)

無人島とはいったものの、もしかしたら漁師が誰かが住み着いているのかもしれない。

(どれ……)

潜り込んだ先を細かく見ていく。が、その手が止まった。

状況から見て魔視鏡1台だけと思っていたが、全く違う。かなりの数の魔視鏡が通話石で結ばれた、意外な規模のシステムだ。

さすがに警戒の度合いを強めながら、タシユアは探索に入った。痕跡を残さないよう注意しながら、防護の甘そうな魔視鏡から見ていく。

(――?)

思わず魔視鏡を注視したのは、その中にあった記録のひとつが予想外の言葉で綴られていたためだ。

――シュマー語。

いつも忍び込んでいるシュマーの本拠地と、同じ言葉だった。一族以外使うわけのない言葉で、記録が記されている。「誰が」は分からないが、この連中の所属はこれだけで知れた。

自分の魔視鏡へこっそり転記し、内容を読み始める。

シュマー語は元は古代ローム語だ。ただそれが長年内輪で使っているうちに、文法や語彙が変化している。

（相変わらず読みづらいですね……）

全体的な特徴を挙げるなら、割合シンプルという事だろう。戦闘集団のせいかな、婉曲な言い回等があまり無い。基本的に直球で同音異義語も少なく、端的に伝わる仕様だ。

ただ語彙はやたらと豊富だった。戦地での確に伝えるためののか、形はもちろん、状況を表す言葉がかなり多い。他国語から取り込んだと思われる言葉もかなり見受けられる。

もうひとつの特徴が隠語だ。戦場で聞かれてもいいようになるのか、それとも単に内輪の言葉のせいなのか、ともかく隠語が多い。しかもそれが短期間で変わったたり増えたりする上、一語に含まれる意味が複数なので更に難解だ。

結果として、シンプルなのに部外者には伝わらないという、暗号じみた言語になっている。

ただこの言葉、シュマーの全員が使っわけではないらしい。タシユアが忍び込んだ本拠地では、公式と思われる文章はだいたい数ヶ国語で書かれていた。

どれも内容は同じだった事から考えるに、公用語として数ヶ国語が採用されているようだ。

おそらくシュマーの構成員は血縁だけではなく、後から加わる者も居るのだらう。

Episode : 12

それを裏付けるかのように、本拠地では個人のもと思われる記録は、色々な言葉で記されていた。シュマー語はもちろん、アヴァン語、ロデステイオ語、ワサール語、ユリアス語、加えて見たことも無いようなものまでだ。

が、どちらにしてもシュマー語を母国語として使うのは、血を受け継いだ生粋の一族だけだ。そこから考えると、この潜り込んだ先がシュマーに関係あるのは明らかだった。

(……後になりますか)

子供のように一語一語追っていたタシユアだが、途中で打ち切る。どうも内容が専門分野らしく、見たことの無い単語が多かったためだ。これをきちんと読もうと思ったら、まずシュマー語の辞書を探さないとダメだろう。

別の記録へと矛先を移す。

同じようにシュマー語だったが、こちらは訳語が着いていた。何か回覧のようなものらしい。

目を通してみる。

(これは……)

ゆらゆらと怒りが立ち昇ってくるのが分かった。

赤子、あるいは子供。実験。人為的な発生。合成獣。成果。能力。処分。所々を拾い読みするだけで、ここの連中が何をしているのかおおよそのことは分かる。

それでも怒りを押し殺して、タシユアは冷静に全文を見ていった。

何が起きているのか正確に知らなくては、対処が出来ない。
だが読み進めれば読み進めるほど、怒りが高まるだけだった。

自然の摂理、人ならざるものの領域。そういうところへ、この連中は手を出している。

冷たい怒りを抱えたまま、タシユアは潜り込む先を元のシユマーの本拠地へと変えた。

先ほどまで居たあの連中の場所が、まだ正確に分からない。

つぶさに魔視鏡群の記録を見ていけば分かるかもしれないが、リスクが高すぎた。今見つかったら、この連中は痕跡を消して逃げる可能性がある。出入り自由に近いシユマーの本拠地で記録を当たった方が、誰にも気づかれずに場所を特定できるだろう。

その先どうするかは決めていなかった。場所を知り、内容を知り、それからどうするか決めればいい。

場合によっては、ルーフェイアに確認してもいいだろう。

あの子は戦闘時の能力や対応は群を抜いているが、普段は人を疑わない。それにシユマーの割に、倫理観は一般に近い。ならば情報を引き出せる可能性もある。

もっとも、何も知らない可能性もあるのだが……。

（つと、これですかね）

魔視鏡網を動き回って探すうち、シユマーの歴史書のようなものが見つかった。

といっても、年号と事実が記載されただけのシンプルなものだ。各国や各家の歴史書にありがちな神話めいた話や逸話は、最初の部分に少し見られるだけだった。

Episode:13

シュマー語を辿るようにして読んでみる。

曰く、グレイスはルーフェイアを入れて7人。2代目と3代目が殆ど同時期だが、それを除けばほぼ800年おきだ。そして誰もがシュマーの平均よりはるかに早く亡くなっている。中には年齢不詳なもの、およそ10歳前後というものまであった。

偶然の一致にしては出来すぎていると思いつつ、さらに読み進める。なかなか記録が見つからずしばらく探したが、どうにか「移住」という単語を手がかりに見つけ出した。

この文献によるとシュマーの一族は、当初は滅びた南大陸に居を構えて居たらしい。もっとも現文明の殆どがその起こりを南大陸に求めるので、取り立てておかしい話ではなかった。

面白いのは、意外なくらい前から居住地を地下に求めているところだ。どうも2000年までは行かないがかなり昔に、地下で暮らす技術を手にしたらしい。以後は何度か場所を変えながら、ずっと地下に本拠地を構えているようだ。

ただ「シュマー」という一族の性格からすると、当然といえば当然かもしれない。

またこれなら、一般に知られずに済んでいるのも納得が行く。人目につかない場所を選んで、しかも地下にもぐっているのでは、部外者が目にする機会はまずないだろう。結果、口の端に上るものの実態は分からないという、今の状態が作られたに違いない。

もっとも今は「企業」というものに隠れて、堂々と島を別荘として所有していたりするようだが……。

資料からエル二群島の施設とやらは、割合最近まで使われていた事が分かった。ただ老朽化もあつて南大陸へと本拠地を移し、その後は規模を縮小して使われていたようだ。

が、それも100年ほど前に、近隣の町が発展し始めたのもあつて完全に廃棄したとある。

（どう考えてもここでしょうね……）

他に位置情報が一致するものは、記録には無い。つまり廃棄されたはずの場所が、今も密かに使われているということだ。

そんな場所で行われている、口にするのも憚られるような実験の数々。

ただそれでも、公認ということだけはなさそうだった。もし公認というのなら、あんなふうに裏口から通信しようとしたりせず、もっと堂々で行うだろう。

果たしてカレアナたちは知っていて黙認なのか、それともまったく知らないのか。

（……知らないのかもしれないね）

証拠はないが、そんな気がする。あのお節介な彼女が、ああいう非人道的なことを黙認するとはどうも思えない。シュマーの研究者たち、それも一部が勝手にやっている可能性が高かった。

だとしても、カレアナと総領家はシュマーの責任者だ。管理が行き届いていない事には変わりない。

Episode : 14

例え廃棄したとはいえ、元はシュマーの施設なのだ。完全に埋めたとでもいわない限り、定期的に調査なりをすべきだろう。実際それをしているならば、あの連中がやっていたことはある程度防げているはずだ。

純粹に腹が立つ。

やられた側に見れば、理由など無意味だ。ただただ「返せ」の一言のはずだ。元に戻せ時間を返せ以外に、望みが在るわけもない。

だが本拠地の中をあちこち調べたが、例のエル二群島で行われている“何か”に関する記録は見つからなかった。あるのは全て、廃棄される前のものばかりだ。

やはりこれは、完全に秘密裏に行われているのだろう。

(……もう一度よく、調べてみますか)

もぐりこむ先をシュマーの本拠地から、何か良からぬことが行われているらしき施設へと戻す。

施設の連中が、潜り込まれたことに気づいた様子はなかった。だいいち先ほども思ったが、本拠地と違って防御がかなりおざなりだ。

推測だが……完全に隠れているとやっている上、今のところどこにも気づかれていないので、油断しきっているようだ。

あまりの無防備さに呆れ果てながら、慎重に見て回る。

ただここで見つかる記録は、殆どがシュマー語だった。そのため意味がよく分からない。

（やはりまず辞書ですかね？）

が、この施設にはなさそうだ。シュマー語を使う者が殆どのようなから、誰も困っていないのだろう。

先ほどまでいた本拠地で盗んでくるべきだったと思いつつ、記録だけでもと集めて回る。

位置はほぼ把握できた。あとは、何が行われているかだ。

読むだけならあとでも出来るのだから、まずは記録だけでも集めておくべきだ。

万が一進入された事にこの連中が気づいたら、全てを消してしまいかねない。そうになったら証拠が消えてしまう。

逃げ得など、タシユアはさせる気はなかった。

拾い読みした単語から察するに、ここで行われているのはおそらく、人の領域を踏み越えたものだ。

——許す気は全くなかった。

それがどういうことで何を壊すのか、自分がいちばんよく知っている。そういう嫌な自信がタシユアにはあった。

脳裏を、弟たちの姿がよぎる。

生きたかったはずなのに生きられず、タシユアに向かって「生きて」と言いながら、彼らは死んでいったのだ。

だから、許す気はない。

ひとつため息をつく、タシユアはまた詳細を調べ始めた。

Episode:15

R u f f e i r

遠慮がちなノックの音で、あたしは目を覚ました。

「……なに？」

扉の向こうに声をかける。

「その……グレイス様、目的地へ到着しました。まだ接岸はしていませんが、ご覧になりますか？」

「すぐ行くわ」

いつ起こされてもいいように戦闘服のまま眠ってしまったから、身支度は殆どない。髪だけヘアバンドで手早く止めると、あたしはすぐに外へ出た。

もう辺りは明るくなり始めている。

「どこ？」

「こちらではありません。左舷前方です」

ドワルデイに先導されながら、甲板を移動する。

空気が冷たかった。

「あれが……」

差しはじめた朝日の中に、エル二群島が浮かび上がっていた。

かつて本拠地として使用されていた頃は、エル二群島全体が訓練等に使われていたそうだ。けど100年の歳月は、その痕跡を完全に覆い隠してる。

廃棄されたファクトリーがあるのは、この中心部近くにある小さ

めの島だった。

朝もやを通して、荒れ果てた港がかすかに見える。

「接岸、できそう？」

「はい」

「じゃあお願い」

あたしの言葉が船長に伝えられて、再び船が動き出す。

——いよいよ、来た。

早く上陸したい反面、このまま船に留まっていたい気もしていた。たぶん、怖いんだろう。この先にあるものが。けどここまで来て引き返すわけにはいかない。それ以前に、そのまま放っておくわけにいかない。

あたしはタシユア先輩を呼びに、客室へと向かった。

ここまで来る間先輩は、用がない限り部屋から出ようとはしなかった。時折廊下ですれ違っても、いつも無言だった。

部屋の前で立ち止まり、気持ちを落ちつける。

呼びに來ただけなのに、ひどく緊張してる自分。

手を上げて、ノックしかける——と、さきにドアが開いた。

「着きましたか」

「はい」

すでに先輩は身支度を終えていた。接岸したらずぐ、廃棄ファクトリーの中へと入るつもりなんだろう。

Episode : 16

「いま、接岸中です」

答えはなかった。

先輩が無言で甲板へと歩き出し、あたしも後ろへ続く。

声をかけたいのに言葉が出てこない。

船が波をかき分ける音だけが、いやに大きく聞こえた。

潮風が、あたしの長い髪を舞い上がらせる。

所々崩れた、小さな港。

向こうの建物もやはり廃屋になっている。

どこをどう見ても、昔使われていたただの別荘地が何かの理由で放棄されて、荒れ放題になったようにしか見えない。

でもこれが見かけだけなのは、あたしはよく知っていた。

ファクトリーは殆どがこういった島に建設されていて、どれもきちんと偽装されている。ドール近郊のファクトリーは小さな島を誰かが別荘地に使っているようにしか見えないし、現在のメインファクトリー「END」にいたっては、地上部はまるでただの漁村だ。

シユマーの本拠地であるファクトリーは、かなり昔からユポネ族の技術を輸入して、地下に建設されている。

ここもそうで、たしか地下で幾つもの島が連結され、かなり大規模な造りになっていたはずだ。

ただ幸いにも、最近まで使われていたのはこの中心部の島の地下だけだった。もしかつてのファクトリー全部を搜索するとなったら、はつきり言って1週間あっても足りないだろう。

そのここで、いったい何があったのか……。

やがて船の速度が徐々に落ち、完全に停止した。

「お嬢様、こちらを」

一緒に居たドワルディが、通話石を出す。

「万が一内部で通話妨害がされていても、これならば通じます。お連れ様も」

「……あらぬところへ通話が回されていそうですがね」

そう言いながら、先輩も受け取った。でもこれで、万一のときも連絡だけは取れるだろう。

——要らない気もするけど。

あたしはまだともかく、先輩じゃ何があっても切り抜けそうだ。

「あと、この見取り図を。昨日お渡ししたものより、詳しく描かれております」

「ありがとう」

タベドワルディが「とりあえず」と言って地図をくれたのだけど、今一部ずつ手渡されたものは、比べ物にならないほど詳細だった。きつとあたしがタベ「もつと詳しいのは？」とうっかり言ったから、慌てて用意してくれたんだろう。

ただ使われてたのがずいぶん前なのを思うと、いろいろ変えられる可能性はある。鵜呑みには出来ない。

「それからお嬢様」

少し声のトーンを落として、ドワルディが言う。

Episode : 17

「何？」

「この廃棄ファクトリーですが……やはり動力炉が動いています」
彼はそれしか言わなかったけど、意味するところは分かった。そんなものが動いているのなら、かなりの人数でここを使っているか、かなり大規模に実験か何かをしているかだ。

——隠れて、何を。

何かとても納得が行かない、自分が置き去りにされたような感覚。けど、間違いじゃないんだろう。

あたしの緊張を他所にひらりと手摺りを飛び越えて、タシユア先輩が埠頭へと飛び降りる。

「沖で停泊してていいわ。丸一日経ったら、迎えに来て」
あたしもそう言うのと、先輩の後を追って手摺りを飛び越えた。

足の裏に硬い地面の感触が伝わる。
さっきの地図で大体の場所を把握してるんだろう、先輩がさっさと島の奥へと歩いていく。
あたしも慌てて後に続いた。けど。

「え……これって……」

最初こそ茂みをかき分けたけど、少し行ったら先で木の枝や下草が取り払われた、綺麗な通り道が現れた。

「ここを使っている誰かの仕業でしょうね」
「ですよ……」

記録の通りなら、ここは長い間放って置かれたはずだ。だったら下草や灌木が好き放題に生い茂って、奥へは進むだけでも大変な状態で当たり前だ。

なのに道が車両が何とか通れそうなほどの広さで、きちんと整備されている。

——嫌な、予感。

予想以上に大掛かりなことが、この地下で行われているのかもしれない。

そのまま道なりに進むと崖に突き当たって、近くに廃屋が建っていた。

「まったく。ずいぶんと分かりやすい偽装ですこと。使っている人間の程度が知れますね」

先輩の言葉に内心頷く。

こんな綺麗な道の横に廃屋なんてあからさますぎて、「調べてください」というようなものだ。敵を引き込むための罠なら合格だけど、隠してるとは言わないだろう。

でもそのおかげで、ここを使ってる人たちの素性が読めてきた。シューマーなら、こういった偽装のことを知らない人はほとんど居ない。居るとすればまだ子供か、訓練さえ受けることのない人だけだ。

そのうちの、誰なのか。

考えながら小屋に近づいて、慎重に調べる。ドア、壁、窓、地面……。

一通り調べたところで、あたしはタシユア先輩のほうに向き直った。

Episode : 18

「あの、先輩、たぶん何もないと思うんですけど……一応見ていた
だいて、いいですか？」

こういう罫の発見と解除は、先輩のほうが上手い。
「分かりました。そこを退いてください」

言われて場所を空ける。

ただあたしを感じたとおり、これといって罫はなかったらしい。
先輩が戸をあけた。

朽ちて傾いたテーブル。ひっくり返って壊れた椅子。外れかけた
棚。

——でも。

「やっぱり誰か、手を入れてますよね……」
「ええ」

廃棄されたのはずいぶん前の話だ。それを考えると小屋が無事な
ほうがおかしいし、中ももっとダメになっていて当然だ。

なのに、手を入れれば使える程度の痛み方だった。つまり少なく
ともこの小屋が廃棄された時期は、シユマーの施設よりもつと後な
わけで……しかも足元の埃がそんなに積もってなかったりと、ずい
ぶんちぐはぐだ。

ただぱつと見た限り、どこかへ続く通路が在るようには見えない。
ドウルディにもらった地図を広げる。

地下への入り口は幾つかあるけど、港からいちばん近いのがここ
だ。

先輩の言うことが正しければ——でもタシユア先輩は絶対に嘘は言わない——廃棄されたはずのここは、今も出入りがあるはずだ。そして出入りするのに、いちばん便利なここを、潰すとは思えない。加えて、不自然な廃屋。

こういったことを考え合わせると、この廃屋のどこかに必ず、入り口が隠されているはずだ。

と、先輩が奥のクローゼットへ歩み寄った。
あたしも近寄ってみる。

蝶番のところが痛んでしまったのだろう、片方の戸が外れかけて、開けなくても中が見える。でも中は、これといって何もなかった。けれど先輩は構わず、壊れていないほうの扉も開けて、中へ手を入れた。

奥の背板が押される。

「こんなところに……」

「このクローゼットの扉だけ手垢がついていたのに、気づかなかつたのですか？　ずいぶんと注意力散漫ですこと」

ずばりと言われて返せない。

背板は、手を離すと自然と元の位置に戻る仕組みになっていた。確かにこれならば、見つけかりづらだろう。

最初の印象と違って案外考えて偽装してあるな、と思った。いかにも怪しげな場所を調べてみて何も見つからなければ、そこはたいていは二度と調べない。そういう点からは壊れかけたクローゼットのさらに奥、押さなければ分からない扉というのは、悪くない選択肢だ。

Episode : 19

とはいえタシユア先輩はあつという間に見つけてしまったし、クローゼット自体を破壊されれば分かってしまう。

もう少しこういう偽装を勉強しようなどと思ってる間に、タシユア先輩が身を屈めてクローゼットへと入っていった。

あたしも慌てて後を追う。

扉代わりの背板の向こうは、当然ながら真っ暗だった。本当なら通路には魔光灯が備えられてるはずだけど、魔力節約のために切つてあるんだろう。

光石を出して発動させる。自分の居場所を敵に知らせるだけだから本当は使いたくないけど、ここまで完全な真っ暗闇だとさすがに危険だ。

足元も壁も岩肌のままの通路。たぶん地下洞へ続く洞窟を、そのまま使っているんだろう。ただ足元はきちんと均されているから、つまづくことはなさそうだ。

通路は意外と広くて、幅は大人が三人手を広げたくらい。天井は大人の背丈の倍はあった。

その中を先輩と進む。

「——ルーフエイア、ここの地図は覚えていますか？」

「え、あ、詳しいのはさっき一度、見ただけなので……でも、だいたいなら」

タベ見たほうだけでも、大雑把な造りは把握できた。

「そうですか。では動力炉へ向かいます」

「あ、はい」

それだけ言つてすたすた歩いてく先輩のあとを、小走りでまた追いかける。

先輩が動力炉にまず行こうとしてるのは、そこに人も物も集中してる考えたからだろう。

施設の一部だけを使うのに、広範囲に散らばると何かと面倒だ。魔力炉の効率やお互いの連絡を考えるなら、なるべくまとまっているほうがいい。

そしてまとまるなら、魔力炉の近くが減衰が少ないのもあって、いちばん便利なはずだった。だから、そこに全てがあるはずだ。真っ直ぐ続く通路を歩いていく。

「階段で……降りますよね？」

シュマーの本拠地——何故か昔からファクトリーと呼ばれる——は地下だから、何かの方法で降りないとたどり着けない。距離が長いから出来たら昇降台を使いたいけど、見つかる可能性を考えると使えそうになかった。

「当然です」

予想したとおりの答えが返ってきて、ほっとする。絶対に無いと思うけど、「昇降台を使う」なんて言われたら、あたしじゃ説得できなかつただろう。

それからすぐ、豎穴の前へと着いた。

——どうやって掘ったんだろう？

今の本拠地もそうだけど、シュマーの地下施設は謎が多すぎる。豎穴は小さいほうが昇降台で、大きいほうには階段が設置されていた。その階段のほうへ足を踏み入れる。

Episode : 20

延々と続く階段を降りながら、まだあたしたちが侵入したのは、気づかれてないだろうと思った。もし見つかったら、こんなふうに階段をとことこ降りてなどいられないはずだ。

ただあたしもタシユア先輩も、足音をさせない。だから2人もで歩いてる割には、何の音もしなかった。

他の生き物の気配も感じない。小さい虫なんかは居るみたいだけど、少なくとも敵意のある相手はいなかった。

そんなのんびりした状況だから、自然考えが「誰が」と「何が」に向く。

ここを使っているのが「誰か」は、シュマーの一員で間違いないだろう。ただ、少人数のはずだ。規模が大きかったら、絶対に隠せない。

シュマーは長い間一族でまとまって暮らしてきたせいなのか、イマドみたいな念話ができる人の割合が物凄く高い。そして彼らは、独自のネットワークを構築してた。

あたしは出来ないから、それがどんなものかよく分からない。けど分かる人が言うには、常に「何となく繋がってる」状態とかで、お互いがどこで何をしてるのかも何となく分かるそうだ。

もちろん、能力の強弱はある。けど周りの大多数が出来る場合は、殆ど問題にならないらしい。お互いに上手く補い合って、全体としてひとまとまりになるっていう話だった。

けどこの状態だと、隠し事なんて出来ない。だからもしタシユア先輩が言うようなことをしていたら、速攻で誰かに知られてしまう

はずだ。

なのに、誰も知らない。

つまりシュマーのネットワークには、全く引つかかってないという事だ。だからこの辺から考えて、「引つかからない人たちの小集団」に絞られる。

——ドウルディに、頼んでくるんだった。

ここまで絞り込まれてれば彼ならたちまちのうちに、可能性のある人たちを割り出せる。

せめて戻ったら頼もう、と思った。もしかしたら彼の事だから、さつさと察して用意してるかもしれないけど……きちんと言うに越した事はないだろう。

「何を」というのは、まだ見当がつかなかった。

タシユア先輩があれほど怒るんだから、とんでもない「何か」なんだっていうのは分かる。ただ実際にそれが何かと訊かれると、やっぱり思いつかない。

ただタシユア先輩はもちろん、母さんさえも許さないような事なんだろうとは思った。

総領の母さんは、性格自体がいい加減だ。だからいつだって周りを振り回してて、細かい事は気にしない。

そのせいなのか母さんは、周りが止めるような一見無謀な話でも、けっこう許可を出す。まずはやってみろ、と言うのだ。

Episode : 21

——その理由が問題だけど。

シユマーのみんなが気づいてるかは知らないけど、許可する理由、いつだって「面白そうだから」だ。成功しそうだとか売れそうだとか、そんな考えは一切入ってない。

しかもそんないい加減な理由で、何故か上手く行ってしまうし……。

ただその母さんでも、「理不尽」なものは許さなかった。傭兵として前線へは嬉々として出て行つて敵を倒すけど、非戦闘員には手を出さない。そういう類の区別には、むしろ厳しいくらいだ。

だからたぶんここでされている「何か」は、母さんが知ったら逆鱗に触れるようなことだろう。そうじゃなかったら、もっと堂々と言つて、母さんに面白がられてるはずだ。

気持ちが鬱々としてくる。けど、このまま放置しておくことは、絶対に出来ないわけで……。

そうしてるうち、いよいよ階段の最後へとたどり着いて、先輩が足を止めた。

階段の終わりを告げるドア。この向こうに、答えがある。

近づいて向こう側の気配を探ったけど、何も感じなかった。

ドアノブに手をかけて——開ける。

「……あれ」

扉の向こうは、拍子抜けするくらいのがらんどった。機材や何かが少しはあって、明かりがついてるだろうと思つてたのに、そ

れさえもない。

先輩と2人、廊下へ足を踏み入れる。

「動力炉、奥ですよね？」

「シユマーの施設ですよ。そのくらいも分からないのですか？」

怒っている先輩の言葉は、いつもに増して鋭い。

「すみません……」

「あなたが謝ったからと言って、ここで行われていた事が消えるわけではありませんよ」

事実その通りで、何も返せなかった。

足は止めないままため息をつく。ただ、不思議と涙は出なかった。たぶん、臨戦態勢だからだろう。いつ襲われるか分からない状態で泣いてたら、命が幾つあっても足りない。

一応警戒だけはしながら、でも階段と同じような感じで奥へ進んだ。

と、先輩が足を止める。もちろんあたしも、ほぼ同時に足を止めた。

——何かの、気配。

右側にある扉の奥だ。

殺気は感じない。だから全くこちらに気づいてないんだろう。

ただ、人間のものとはちょっと違う感じだった。どちらかというと、何かの動物に近い。

先輩と視線を交わして壁に張り付いて、扉の向こうの気配を探る。

Episode : 22

間違いなく、あたしたちには気づいてない。ただよく探ると、大きな何かの気配に隠れるようにして、まだ他に居た。囁き声で訊く。

（先輩、かなり大型の獣と……人ですよ）

（おそらく）

意見が一致した。なら、間違いはない。

壁の陰に張り付いたまま、手だけドアノブに伸ばしてそっと開ける。

大型獣の呼吸音と、靴音とが耳に飛び込んできた。

踏み込む。同時に気づいた獣から咆哮。

予想通り、かなり大きい。四つ足なのに、あたしの身長より上に獣の頭が、しかも三つもある。

その獣が一気に跳躍して、ナイフのようなツメの付いた前足を片方振り上げて——どさりと音を立てて床に落ちた。

耳をつんざくような獣の声。さすがに痛いんだろう。

タシユア先輩を何とか倒そうと、獣が滅茶苦茶に暴れた。けど先輩はそのツメの下をかいぐって肉薄し、あっさりと頭の一つを切り落とした。

「……おや」

先輩のちよつと意外そうな声は、まだ獣が倒れないのを見たからだろう。

ふつうだったら頭を切り落とせば、少しは動いても勝負は決まり

だ。けどさすがに3つもあると、1つ無くなってもなんとかならしい。

ただ暴れる度合いは余計に酷くなったから、困るといえば困るのだけど……。

そんなことを思うあたしの視界の隅で、白いものがちらりと動いた。

とつさに動いて、太刀を振り上げる。

けど。

「動かないで」

顔に見覚えがあつて、口頭に切り替える。シュマーの人間なら、これで動けないはずだ。

みんなあたしが知らないと思つてみたいけど、分かつていた。シュマーの血を引く人間は何故か、あたしの命令には絶対服従だ。何でそうなのかは分からない。けどあたしが小さい頃から、逆らう人は居なかった。

「ぐ、グレイス様……？」

「黙りなさい。それから動かないで」

ただそれだけで、中年の白衣の男の人はその場に立ちすくんだ。これならあたしが「もういい」というまで、ずっとこうしてるだろう。

ため息をつきたくなる。こんな滅茶苦茶なことが通るなんて、シュマーはホントにどうかしてる。

タシユア先輩のほうは、暴れてるのを何とも思つてなさそうだった。楽々とツメを避けて、次々と頭を切り落とす。

Episode : 23

「やれやれ、無駄にタフですこと」

言いながら先輩が大剣を、頭を全部落とした獣の胸に突き刺すと、ようやく動かなくなった。

足元をあふれた血が赤く染めていく中、あたしは白衣の男の人に向き直った。

「——説明しなさい」

他に何も要らない。あたしがこう命令すれば、シュマーの人間は全て話すしかない。

もちろん、これが効かない人も居る。シュマーの血が薄かったり、なんか性格がヘンに捻じ曲がっていると、ダメだ。でも血に拘束されてるわけじゃないのに、個人的な信条であたしの言う通りにする人もいるから、何とも分からなかった。

「あの、説明といわれましても、どこから……」

「幼児ではあるまいし、そんなことまで一々指示されないと分からないのですか？ シュマーの研究者が聞いて呆れたものですね。まあだからこそ、こんなことを仕出かすのでしょうか」

タシユア先輩が辛辣な言葉を浴びせる。

ただ先輩がどう言っても従うわけじゃないから、あたしは少し考えて言った。

「……ここで、何をしてるの？」

「け、研究です」

さすがにそのくらいは、あたしでも見れば分かる。先輩のほうは

もう呆れて言葉もないみたいで、その辺の資料を勝手にめくってる有様だ。

何だか疲れを覚えながら、再度訊ねる。

「何の研究？」

「ええとその、僕はご覧の通り、戦闘力の高い合成獣を……」
それも見れば分かる。

「他には？」

この調子で、全部事細かに訊かなきゃいけないんだろうか？

「ほ、他には僕は……あ、でも、他の人はホムンクルスの研究なんかを」

瞬間、先輩が振り返った。

「ホムンクルスと言いましたね。そんなものを使って、何をしているのです」

けど白衣の人は答えない。

先輩があたしに目配せした。口を割らせると言っただろう。

「——答えなさい。ホムンクルスで、何の研究を？」

「申し訳ありません、その研究は、よく分からなくて……別エリアで、数人しか関わってないんです」

どうやら思ってたよりも、多くの人が分業していろいろやってるらしい。

けど目の前の研究者は、それ以上は知らなそうだった。
ならばと質問を変える。

Episode : 24

「ここ、どのくらいの人が居るの?」

「よ、よく分かりません。でもたぶん、全部で100人くらいは……」

やっぱりかなりの人数だ。

「全部、研究者?」

「はい…… あ、いえ、雑用係も居ます。あと、一昨日くらいから警備の人も」

思わずタシユア先輩のほうを見る。

先輩は無言で、何も表情も変えなかったけど、たぶんこの事をあたしたちと関連付けてるだろうと思った。

「警備は、どこに?」

「奥のほうです。えーとあの、ホームクルスを研究しているほうでつまりそれだけ、その研究は知られたくないんだろう。」

じやなきや警備を置く必要はない。事実この合成獣の研究は、何の警備もされていなかった。

ともかく全般的に、こういった生体を扱う研究しているのは確からしい。

地図を取り出す。

「どこで何を研究してるかとか、分かる? 分かるなら、ここへ描いて」

このまま行けば、「警備の人」とやらと遭遇するのは確実だ。だってたら少しでも、情報があるほうがいい。

「すみません、そんなに詳しくは……」

言いながら彼が、少しずつ書き込んでいく。

あたしたちが入ってきた場所は、この施設の西の端に当たる。そして動力炉があるのは、ほぼ中央だ。

地図によれば群島のそれぞれの島の下に、沢山の部屋がある大きな区画。それを1〜2本の通路が繋ぐ構造だった。

この西の端から中央へ行くには、通路は二つしかない。

「先輩、待ち伏せ……されてますよね」

「なぜ私に訊くのです。前線育ちという割には、その程度の事さえ予測できないのですか？」

答えとは違う事を返された。でも、先輩の言うとおりだ。

待ち伏せをする気は、向こうはあるはずだ。

わざわざ警備隊を入れたのは、ここが発見された事に気づいて、しかも襲撃されると予測したからだろう。じゃなきゃ、今までどおりでいいはずだ。

だから、遭遇する可能性は高い。

もっともそうは言っても、相手のほうが気づいてなきゃ、待ち伏せも何もあったもんじゃない。

だったら今のうちにさっさと行ってしまえば、警備の人たちに会わずに済むかもしれない。そう思う。

まあもちろん、とつくに気づかれていて、思いつき待ち伏せされている可能性だって、低くは無いのだけど……。

Episode : 25

「ええと、その、分かるのはこのくらいで……」

言われて、地図への書き込みを見てみる。

この辺の区画は、あまり使われていないようだった。合成獣の研究を幾つかしてるようだけど、それだけだ。細かく書き込まれている場所は、中央から東側に集中していた。

「人も警備も、ここなの？」

中央部、動力炉の辺りを指差す。

「そのはずです。ただ、僕は行くと怒られるので……」

なんだか可哀想な人だ。

ふと思いついて訊いてみる。

「どうして……あなたは、ここに？」

人は見かけで判断しちゃいけないというけど、この人あんまり、ガンガン研究して——というタイプには見えない。なのにこんなところどこっそり研究してるのが、ちょっと腑に落ちなかった。

「どうして、と言われますと？」

「えっと、だから……なぜここへ？ 志願？」

我ながら支離滅裂な訊きかただ。でも幸い、意味は通じたらしい。

「あ、その意味でしたら、師に付いて。ここで研究をするから、手伝えと言われました」

要するに、深く考えずついてきただけみたいだ。

「その研究……おかしいと、思わなかったの？」

タシユア先輩があれほど怒るのだから、真つ当な研究とはとても思えない。だったら関わった時点で、何か感じたはずだ。けど返ってきたのは予想外の答えだった。

「合成獣を兵士代わりに使うというのは、研究として普通じゃありませんか？」

何の疑問も抱いていない表情。

「合成獣なら、幾らでも作れますし。まあ時間は少しかかりますけど」

「そうじゃなくて……」

彼の言ってることは、確かにある意味正論だ。けどあたしが言い続けたこととは、方向が全く違う。

「だから、その……ホムンクルスとか、おかしいでしょう？」

「何がですか？」

全く話が通じない。言葉は通じていても、お互いに言ってることがすれ違う。

「——ルーフエア、時間の無駄です。そもそもまともな神経があれば、ここへ来ていませんよ」

タシユア先輩が冷たく言い放った。

「連れてこられたのか何なのか知りませんが、何の研究かも良く調べず手を貸す時点で、同様に悪質です」

今にもこの研究者を始末するんじゃないかっていうくらい、先輩の声は冷たかった。

Episode : 26

「相手の位置も概ね把握できましたからね。長居は無用です」

「あ、はい」

出て行こうとする先輩の後を、慌てて追いかける。

そのあたしの後ろで声がした。

「じゃあ、中央のほうにれんら——」

言葉が途中で止まる。そして何かが床に落ちる音。

振り返ると、さっきの研究者がしゃがみこんでた。肩を押さえる手を伝って、血が滴り落ちる。

彼の肩に突き立ってる短剣は、タシユア先輩の物だ。前にシルファ先輩に渡してたのを、見たことがある。

「まったく。どこまでも察しの悪い頭ですこと」

相当怒ってるらしい先輩が無造作に近づいて、床に落ちていた通話石を踏み砕いた。

「誰が連絡して欲しいと頼みましたか」

けど白衣の人のほうは、答えるどころじゃない。痛さにうめいてる。

とりあえずあたしは、いちばん先にやるべきことに取り掛かった。

「そこへ横になって、動かないで」

命じてから、短剣を抜きにかかる。

タシユア先輩は「放っておけ」という感じだったけど、口では何も言わなかった。

短剣を抜いた途端に、血があふれ出す。

「魔法で、治しておくから。あと、あたしたちのことは……内緒に」
「は、はい……」

最初からこう言えばよかったと、内心後悔する。そうすれば少なくとも、この人は怪我をせずに済んだ。

ただ幸い急所は外れてたおかげで、簡単な魔法をかけただけで血が止まる。

「あとは、誰かに診てもらった方が……」

「あ、大丈夫です。あとは自分で出来ます」

言って彼が、あたしの顔を見た。

——何か嫌な予感。

なんというか……こういうやたらとキラキラした目で見られると、大抵口くなことにならない。

「グレイス様！」

「な、なに……」

手を合わせて拝みそうな雰囲気。

「奥へ行かれるなら、お手伝いします！」

「え、あ、ちよつと……」

困ってタシユア先輩を見ただけで、完全に無視された。きっと呆れてるんだろう。

潜入するのに、手引きしてくれる人が居るのは確かに便利だ。ただこの研究者じゃ……足手まといになりかねない。

少し考えて、あたしは訊ねた。

Episode : 27

「この認証カードは……持つてる？」

シユマーの施設は、殆どこれで管理されてる。

もちろん無くても、あたしの場合は何とか通れる。次期総領の特権を使って、強引に開ければいい。

ただ、面倒だった。本来開かないものを開けさせるのだから、扉毎に毎回作業をしなければいけない。その上一旦、主になっている魔視鏡に照会するから、発見される可能性もかなり高い。

だからここに常駐している人のカードが使えれば、そのほうが便利だ。

「はい、あります。ご入り用ですか？」

座ったままの彼が、白衣のポケットから一枚のカードを出した。記録石を加工して作ったものだ。

「予備は……ある？」

これを貰っていったら、即この人が困るだろう。

「予備はありません。生体情報とセットなので」

「え……」

こうなるとかなり厄介だ。

「要するに、登録された生体以外通れない、ということですか？」
タシユア先輩に問われたけど、白衣の人は視線を逸らして黙ってる。様子からして、怖がってるみたいだ。

先輩に「何とかしろ」というような視線を向けられて、あたしは口を開いた。

「――説明して。生体情報とセットってどういうこと？」

「次の区画への扉が、カードと本人がセットでないと、開きません。もつとも1回開けばしばらく開いてるので、その間は誰でも通れませんが」

思ってたより、警備は厳重そうだった。これだとあたしの特権を使っても、出入りはけっこう大変だろう。

だとすると……この彼を連れて行くのが、たぶんいちばん早い。タシユア先輩のほうに向き直る。

「先輩、あの、この人を連れて行つて……いいですか？　そうすれば、大体の場所は通れると思うので」

「足を引つ張るようなマネを、されたくないものですね」

そうは言ったものの、先輩の口から「NO」という言葉は出なかった。これならたぶん、大丈夫だろう。

「一緒に来て、ええと……」

ここまで言つて、まだ名前を聞いてなかったことに気づく。

「名前は？」

「ラヴェルです」

聞いた瞬間、ずきりと胸の奥が痛んだ。

けして珍しい名前じゃない。もしかしたら、良くある方かもしれない。けどその名前は――死んだ兄さんと同じだ。

Episode : 28

「それでグレイス様、どこへ行かれますか？ 何かご入り用なものは？ 誰かに連絡——」

「黙って」

とりあえず命じて黙らせる。まだこの人、分かってない。

「訊かれたことに答えるだけで、いいから」

「分かりました」

あたしの命令が効く人で、良かったと思う。そうじゃなかったらもういい加減、タシユア先輩に殺されてそうだ。

思わずため息が出る。

あたしがここへ来たのは、真相を知るためだ。そしてそれは、タシユア先輩もあまり変わらないと思う。

ただあたしは早い話が関係者なのに対して、タシユア先輩は部外者で、たぶんここは「敵地」という認識だ。そのせいで、何だかすごく複雑なことになってる。

一緒に来たこと自体は間違っていないと思うし、ここで何が行われるか白日の下に晒さなきゃいけないのも確かだ。

けどその過程で、何が起るか予想も付かない。ただあたしの立ち回り次第で血が流れそうだった。

「あなたが言ってた、立ち入り禁止の場所は……どこ？」

「動力炉の辺りです」

予想通りだ。

地図を見てみると動力炉周辺までは、通路が隔壁で三つに区切られてるみたいだった。たぶん、何かのときに完全に遮断するためだ

ろう。

「この隔壁は、普段は開いてるの？」

「いいえ。逃げ出すといけなないと、閉めてました」

それはどうなんだろうと思う。逃げ出して騒ぎになるようなもの、そもそも要らないんじゃないだろうか？

「その扉、あなたなら開けられるのね？」

「はい。でないと、困りますし」

この感じだと、とりあえず中央部分まで行くことは出来そうだ。その先禁止区域は入れなそうだけど……それを今ここで考えても仕方がないだろう。

「行きますよ」

「あ、はい。——あなたも来て。あと、喋らないで」

釘を刺してから、先輩のあとに続く。また迂闊なことを言って、騒ぎになったらたまらない。

通路は静かだった。

「この警備、何人くらいかは……分らないよね……」

「すみません、人数は。でも、合成獣なら分かります。確か2頭」

だんだん呆れてきて、言う言葉が無くなってくる。これでなんでおかしいと思わないんだろう？

Episode : 29

「まったく。そんなオモチャにうつつを抜かすなど、いまどき子供でもやらないでしょうに」

「お、おも——」

何か言いかけた研究者の人を、手で制して黙らせる。

タシユア先輩から見たらここは敵地で、居るのはあたし以外全員敵のはずだ。というか、あたしでさえ「処分保留」というだけで、味方とは思われてない気がする。

そんな状態で、また騒いだら……。

静かな廊下は何も居なくて、最初の隔壁まではすんなりたどり着いた。

「あなた以外の研究者、居なかったの？」

「いえ、居ます。居るけど少し遠いので、気づかなかったのかと」

まあ確かにあんな大きな合成獣を研究してたら、部屋も相当大きくないとダメだろう。そうなったら隣の人と離れてしまうのは仕方が無い。

ただそのおかげで気づけなかったんだから、何とも言えないところだ。

目の前の隔壁はしつかり閉まってて、ちょっと叩いたくらいじゃ壊れそうに無いほど頑丈だった。

取っ手はないけど、ちょうどその辺りに魔力石が嵌め込まれてる。きっとこれで、生体情報を見分けるんだろう。

「扉、開けてくれる？」

連れてきた彼——どうも名前を呼ぶ気になれない——に言って、場所を譲る。

「はい」

まず扉脇の細い隙間に、さつき見せてくれたカード型の魔力石が差し込まれて、次に扉の石に手がかざされた。

かちりと音がして、鍵が外れる。

「開きました」

「この程度で威張れるとは、ここの研究のレベルもたかが知れてますこと」

どうだと言わんばかりの彼に、タシユア先輩が冷たく言い放つ。

研究者の彼がまた何か言い返そうとしたけど、これもあたしは手振りで押さえた。

彼は気づいてないだろうけどタシユア先輩、完全に戦闘体制だそんな状態の先輩に食って掛かったらどうなるかは、考えるまでも無い。

「そこ、どいてくれる？」

さつきとは逆に彼を下がらせて、あたしが扉のところまで出た。身体を貼り付け耳を押し当てて、向こう側を探る。

——何かの、気配。

たぶん言ってた、守るために置かれてる合成獣だろう。
一回扉から離れて、訊ねる。

「どんなのが置かれてるか、知ってる？」

「すみません、作ったの僕じゃないので……」

とても何気なく、吐きたくなくなるような答えが返ってきた。

Episode : 30

「いったい、どれだけやってるの？」

「分かりません。僕は言われたあの固体だけなので」

このまま座り込んでしまいたくなる。生命をおもちゃにするような真似をしてるのに、何でこんなに知らん顔で居られるんだろう。

この扉の向こうに居る「何か」も、元はこの研究者の誰かが作り出したものだろう。

研究そのものがダメってことはない。もしそうなら、薬の研究なんかも全部ダメになる。

けど、やっていいことといけなことがあるはずだ。その中でも生き物を好き勝手にすることは、いちばんやっちゃいけないことのはずだ。

なのにここではそれが当たり前で、隣が何をしているかさえ気にしない状態だった。

何だかもうつつむきたい気持ちで、そつとドアを開ける。けど、そのまま動けなくなった。

「なに、これ……」

さっきの三つ首の合成獣と似た、四つ足の獣だ。ただ違うのは、首にあたる部分から人間の上半身が生えていることだった。

これだけで、ここで何をしていたのかおおよそ分かる。

タシユア先輩が無言で進み出た。既に大剣が抜かれている。

次の瞬間、先輩は一気に間合いを詰めていた。

漆黒の剣が振り上げられる。

——けど。

剣が触れたと思った瞬間、合成獣の姿がかき消えて、もう少し奥へ現れた。

「……ほう」

予想外のことだけど、先輩が動じた様子はない。

あたしもこれは初めて見たけど、要するに魔法だろう。魔視鏡なんかも要は魔法で映し出した幻影だから、たぶんそれと似たような原理だ。

あとで出来たら覚えよう、そんなことを考えながら先輩の横に並ぶ。

「あの、あれ、助けるわけには……」

「相変わらず甘いですね。向こうは我々を殺すつもりですよ」

確かに先輩の言うとおりだ。殺しに来る相手は、こっちも手加減なんて出来ない。

それでも——助けたかった。

理由は、半分「人」だからだ。

いったい何をどうしたら出来るのかわからないけど、上半身が人間なんだから、誰か材料——そんなふうに言いたくない——人が居るはずだ。たぶん、シュマーの誰かなんだろう。

それを殺したくなかった。

「あの、じゃあ、少しだけ時間を」

「何をするつもりやら」

言いながら先輩があたしに場所を空けてくれる。半人半獣の“それ”が、あたしに視線を移した。

Episode : 31

——出来るだろうか？

自信はない。けど、試さないで終わりにはしたくなかった。
合成獣と目が合う。

「動かないで」

命じた瞬間、“それ”が動きを止めて頭を下げた。まだあたしの命令が効くみたいだ。

「こんな姿にされても、シユマーはシユマーと言うことですか。大した忠誠心ですこと」

先輩が軽蔑したように言う。もっともそんなふうに思われても、シユマーなら否応なしにそうなってしまふ部分だから、どうすることも出来ないのだけど……。

ともかく動きが止まったのだから、何とかするなら今だ。

「あの、今のうちに——」

「無理そうですがね」

言い終わるか終わらないかのうちに低いうなり声をあげて、合成獣が顔を上げる。ただ頭を振りながらで、すごく苦しそうだ。

「命令がぶつかりましたか」

先輩が冷静に分析する。

巨鳥や走竜もそうだけど、こういった人のために何かさせる動物には、大抵支配の魔法がかけられる。じゃないと、たちまち暴れ出したり逃げ出したりで、使い物にならないからだ。

この合成獣にはたぶん、「侵入者を排除」という命令がされてる

はずだ。けど元がシュマーの誰か——考えるだけで吐き気がする——
——だったせいで、シュマーの一族が持つ「グレイスへの服従」も持
っている。

そこへあたしが侵入者として来たから、魔法と本能とに挟まれて
しまったんだろう。

よっぽど苦しいんだろう、合成獣が腕を振り回して足を踏み鳴ら
して、それでも一歩こっちへ踏み出した。

「向こうの命令が勝ちましたかね」
先輩は言つと大剣を構えた。

柄まで入れると、あたしの背丈以上ありそうな両手剣。黒い刃は
いわゆる金属の黒光りとは違って、何も映してなかった。

ただただ黒くて——なぜか怖い。禍々しいってわけじゃないけど、
あたしとすごく相性が悪い感じた。触ったら何か吸い取られそうな
気がする。

合成獣がもう一歩踏み出した瞬間には、先輩は動いてた。そのま
ままっすぐ突っ込んでいく。

ぶつかるのも構わず突き進んで、もっと左奥、一見見当違いの位
置を薙いだ。

——絶叫。

半人半獣の“それ”の姿がまた消えて、先輩のいる位置へ現れる。

「そんな子供騙しが、何度も通用するわけがないでしょうに」

刃が獣の胴を切り裂いていた。

さらに胸へ、剣が突きたてられる。

Episode : 32

「あ、あれを、一撃で……」

後ろで研究者の人が声をあげる中、合成獣は倒れた。

「ぼ、僕の作った合成獣より、ずっと強かったのに……」

なんか一瞬殴りたくなったのは、気のせいだろうか？

こんな合成獣を何体も作るっただけでもどうかしてるのに、さらに小さい子みたいに強さ比べするなんて。

ぜったい生き物って、そんなふうに扱うものじゃないはずなのに。

「あ、あの、グレイス様？」

「今みたいなこと、二度と言わないで」

さすがにあたしも声が冷たくなる。

「わ、分かりました……」

どこか怯えたような声に、ちょっと可哀想だったかな？と思う。けどだからと言って、命をおもちゃにするようなことは許せなかった。

「いつまで遊んでいるのです、行きますよ」

トドメとばかりに合成獣の首を落とした先輩が、あたし達に言う。その死体を見ながら思った。

——誰だったんだろう？

シユマーの誰かと言うところまでは見当がつくけど、それ以上は全く分からない。実験材料——本当に嫌な言葉——にされた人の記録が残ってればいいけど、たぶん消されてしまってるだろう。

あとで遺体だけでもちゃんと回収しよう、そんなことを思いながら先輩の後に続く。

血の臭いでむせ返る、けど奇妙に冷たい通路。そこを歩きながら、あたしは先輩に訊いた。

「あの合成獣の本当の場所……やっぱり、音と気配ですか？」

「ええ」

簡潔な答えが返ってくる。けど、続きがあった。

「それと、床ですね。場所によって微妙に、見え方が違いましたよ」

「あ……」

どつりであればほど正確に、間合いが取れたわけだ。あたしはそこまで気づかなかったから、どうして先輩がきちんと剣を振るえたのか分からなかった。

「——まったく。この程度も気づかないようでは、幾つ命があっても足りませんよ」

「はい……」

先輩の言うとおりだ。こういう小さなことを知っているか居ないかが、前線じゃ生死を分けたりする。

ただちよつとだけ、教えてくれているのかな？とも思った。まあこれは、あたしの勘違いかもしれないけど……でも知らなかったじや済まないから、答えてもらえるのは本当にありがたい。

廊下は延々と続いていた。でも近いとはいえ島と島を繋いでいることを考えると、距離があるのは仕方ない。

Episode : 33

敵には遭わなかった。合成獣を1体倒してるんだから気づいてると思うのだけど、ここで対応する気はないらしい。

逆に言えば、次の隔壁の先が大変なのだろうけど……。

タシユア先輩を見上げながら、自分はどうかちょっと考える。

戦ってるのをあまり見たことがないけど、タシユア先輩は苦手な事がほとんどないと思う。魔法も普通じゃ使えないようなものまで使っていたし、剣も今まで見た限りじゃかなり使える。

——あたしがすること、あるだろうか？

この程度の狭い場所なら、全部1人で片付けてしまいそうだが、ただ何となく、あたしが前へ出ないほうがいい気はした。

あたしとタシユア先輩じゃ、白兵戦は先輩のほうが上だ。何しろ体格や武器が違いすぎる上に、あたしと同じ戦場育ちだからかなわない。けど魔法のほうは、白兵戦ほど差はないと思う。

だったらあたしが後方支援に回って先輩が前へ出るほうが、能力的に合ってるだろう。

まあタシユア先輩じゃ、支援する必要さえないさそうだけど……。

「何を見ているのです」

急に鋭く先輩に言われて、心臓が跳ね上がる。

「人の顔を見るのが失礼だと、教わってもいないのですか？」

「あの、いえ、次の戦闘、あたし……どの位置に、立とうかと思っ
て……」

我ながら言ってることが要領を得ない。

けどどうしてか、先輩は何も言わなかった。あたしが喋るのを、待っていてくれるようにも見える。

だから頑張っって言ってみた。

「えっと、その……あたし、後方でいいですか……？」

「魔法を撃つのは構いませんが、巻き込まないようにしてもらいたいものですね」

言われた意味を少し考える。

魔法を撃つのは構わなくて、でも巻き込むなっていうんだから、たぶん気をつければ撃ってもいいんだろう。

つまり、後方でいいって意味になる……はずだ。

最初感じてた罪悪感は、消えてきてた。

成り行きでタシユア先輩とここまで来てしまったけど、よく考えてみるとんでもない話だ。シュマーという自軍へ敵を連れ込んだのに近い。実際、先輩に容赦するつもりがあるようには見ええないし、案内してくれてる研究者は殺されるところだった。

でもここで何がされてたかを知って、許せない気持ちのほうが強くなっていた。

あたしは相当甘いほうだと思うけど、それでもここでニコニコと研究してたような人は、かばう気になれない。

しかも相手が謝るでもなくて、兵をけしかけてくるならなおさらだ。

Episode : 34

壁にかけられた案内板を見ると、次の隔壁まではまだ少しありそうだった。

歩きながら振り返って、後ろにいる研究者の人に尋ねる。

「警備に呼ばれた人数、やっぱり分からない？」

「詳しくは……。ただ二、三十人はいると思います。そのくらいの一団、見たので」

だとするとその二、三十人が、最定数だろう。

面倒だな、と思う。

こういう狭い場所だから、一度に相手するのは数人だ。ただその代わりに、あちこちで何度も相手をすることになる。どう考えたって楽じゃない。

まあそれを言ったら究極は、戦闘がないのがいちばんいいのだけど……。

タシユア先輩は何も言わなくて早足で、後から小走りで追いかける。後の研究者の人なんて、ふだんよほど歩いてないのか、肩で息をしてるありさまだ。

そうしてるうちに、次の隔壁が近づいてきた。壁の造りはほぼ同じで、同じようなドアと、取っ手代わりの魔力石があるのも同じだ。隔壁の向こうからは、たくさんの人の気配がする。恐らく「警備の人」とやらが、待ち構えてるんだろう。

「開けたら、総攻撃されますよね……」

「当然でしょう」

先輩に「当たり前のことを」という顔をされる。

——どうしよう。

あたし一人なら、防御魔法をかけて突っ込んでしまっただけど…
…先輩の探るうとしてる戦法が分からない。

それとも勝手に、先輩に防御魔法をかけていいんだろうか。

「何を突っ立っているのです。それしか出来ないならさっさと戻りなさい」

「あ、いえ……ドア少し開けたら、まず魔法ですよネ?」
それ以外ないだろうと思いつながら確認する。

「他にもつと良い手があるのでしたら、教えていただきたいところですね」

どうやら先輩も、この方法で行くつもりらしい。

「あの、そしたらあたしが……撃つて、いいですか?」

先輩が前へ出て剣を振るうことを考えると、分担したほうがいいはずだ。

「巻き込むのは自分と、その後ろの馬鹿者だけにしてください」
また少し考える。でも撃っちゃいけないとは言っていないから、たぶんいいんだろう。

タシユア先輩の言葉ははっきりしたイエスノーがなくて、あたしにはどうも分かりづらい。

とりあえず、あたしは後ろから例の研究者の人を呼んだ。

「これも、カギ開けて」

「はい」

彼がさっきと同じような手順で、扉のロックが外しにかかる。
その間にあたしは自分と先輩に防御魔法をかけて、さらに攻撃用

魔法の詠唱も始めた。

「遙かなる天より裁きの光、我が手に集いていかずちとなれ——」
タシユア先輩が危なくない位置から、タイミングを見計らってほんの少し、ドアを開けてくれる。

「ケラウノス・レイジっ！」

隔壁の向こう側で、魔法が炸裂した。

Episode : 35

Tasha side

入り込んだシュマーの廃棄施設は、予想通りの場所だった。

何か大型の獣とおぼしき物を改造して三つ首にしてみたり、さらには人——シュマーの者だから人というには多少語弊があるかもしれないが——と合成したりというのだから、呆れ果てるしかない。

もつともシュマーなどと言うものに、倫理観を求めること自体が間違っているのだろうが。

そのシュマーの中にありながら、どういうわけか割合まともな感性を持つているルーフェイアは、さすがにショックを受けたようだ。最初は研究者等をかばうそぶりを見せていたが、だんだんそれが無くなっている。

「これも、カギ開けて」

「はい」

ルーフェイアに命じられて、いい年をした大人が素直に従った。

先ほどと同じような手順で、この研究者がロックを解除する。

その間にルーフェイアは、隔壁の向こうに撃ち込む魔法を準備し始めた。

「遙かなる天より裁きの光、我が手に集いていかずちとなれ——」

一般的に使われる中では、最上級クラスの呪文。どうやら容赦する気はないようだ。

自分の身の安全を確保しつつ、タイミングを見計らって僅かに扉を開ける。

どういいうわけか魔法は、何かで遮られていると上手く発動しないことが多い。ただ同じように遮られていても、透明なガラスなどの向こう側なら発動させられるという者が、少なからず居る。また知っている場所なら、完全に遮られて見えなくても平気、という者も居る。

この辺を考え合わせると、要するに詠唱者の認知の問題なのだろう。

ただいずれにせよ、ドアがあるなら開けておいたほうが確実だ。

「ケラウノス・レイジっ！」

隔壁の向こう側でルーフェイアの魔法が炸裂した。雷撃になぎ払われたのだろう、悲鳴が上がる。

その声が消える前に、タシユアはドアの向こう側へ踏み込んだ。視界に映るのは、おおよそ十数名。

（狭い場所に、何をたむろしているのやら）

タシユアが中央で大剣を振れば、かなりの部分が間合いに入るような狭い通路だ。密集しては「殺してください」というようなものだった。

事実敵はルーフェイアの魔法で感電し、身体の内を奪われてしまったのもあって、あっさりと屠られていく。

僅かに狩り残した敵も時間の問題だ。身体の内を取り戻した者から隊形を立て直そうとしているが、そんなヒマを与えるつもりはない。

だがそのとき、後ろのほうで情けない悲鳴が上がった。ルーフェイアのものではない。あの馬鹿な研究者のものだ。

Episode : 36

(全く、足手まといな……)

思いながらも目の前の敵から視線は外さず、最優先で片付ける。

「あなたたち、動かないで！」

ルーフェイアの声が聞こえ、相手にしていた敵の一部がひるんだ。もっともルーフェイアは、こちら側に対して言っただけではない。後ろから来た者達がシューマーと見て、頭数を減らすために命じただけだ。

が、こちら側にも効果があった。相手にしていた敵の8割ほどが動きを止める。

(これでは戦場で、役に立たないでしょうに)

何が理由かは知らないが、シューマーの中でのルーフェイアの権力は予想以上だった。口で言うだけであんな異形とされた者までが従うなど、忠誠心どころの話ではない。常軌を逸していると言っているくらいだ。

ただ確実性には欠けるものの、こういう局面では便利だった。一部だけでも敵を無力化できれば、後の展開が全く違う。

とりあえず、ルーフェイアの命令に従っていない、危険度が高い相手を先に始末する。

容赦なく首が飛び身体が両断され、さしものシューマーの面々もひるんだようだ。が、タシユアは意に介さなかった。

これが、「戦う」ということだ。

嫌なら最初からそんなところへ出て来なければいいし、出てきた

以上は惨殺されることも許容するしかない。

ただ仲間がそうなくても尚、ルーフェイアの声に動きを止めた面々は、何もしようとしなかった。

ルーフェイアの命令と言うのはシュマーの人間にとって、かなりの拘束力を持つようだ。事実、前方を牽制しながら確認した後方では、何の動きも無かった。

タシユア相手ならまだともかく、シュマーの事実上のトップであるルーフェイアには手を出せないのだろう。

（自分の意思で動けないようでは、いつか墓穴を掘るでしょうに）自身のことは自身で決めて、責任も取る。そういう生き方をしているタシユアにしてみると、他人に従う生き方は不可解としか言いようがない。

これで仮に自分の身に何かあったとしても、命令した相手に責任を問えるわけではないのだ。

まあそこまで理解した上で従っているのなら、何も言うことはないのだが……。

と、気配を捉える。

今対峙している連中とは全く違う。強いて言うなら、先ほど倒した合成獣に近い。

「——先輩」

さすがに察したのだろう、ルーフェイアが隣へと来た。

Episode : 37

それに対して何も答えず、タシユアはまた剣を構える。

ルーフェイアのほうも無言で太刀を構えた。

しん、と静まり返った、だが張り詰めた空気。

シユマーの面々の間にも伝播したのだろう、彼らもそれぞれに武器を構える。

そして、がりがりという引つかくような音。

さらに隔壁が丸ごと動いて、徐々に下へと下がっていく。

「まったく、相変わらず悪趣味ですこと」

半分ほど下がった隔壁の向こうに居たのは、先ほどと同じような半人半獣の生き物だった。

ただ見た感じ、こちらのほうが年上のような。人の部分が、先ほどのものよりがちりしている。

まだ防御魔法が切れていないのだけ確認して、タシユアは動いた。何もわざわざのんびりと、相手の体勢が整うのを待つ理由などない。

「——サメン・アイギスっ！」

見計らったように背でルーフェイアの声が聞こえ、合成魔の顔面が軽く凍りついた。

隙を逃さず切りかかる。

「……おや」

つい声を上げたのは、この合成獣の姿もかき消えたからだ。魔法でダメージを受けたから実体ありと踏んだのだが、かなり手の込んだ虚像だったらしい。

瞬間何かの魔力を感じて、とつさに床に伏せる。

——熱波。

頭上を光の矢が、後ろから前方へと通り過ぎていった。当たっていたら黒焦げだ。

「先ほどよりは、少し骨がありそうですか」

後ろの隔壁が下がっていたのには、気づいていた。だからこそ警戒していたのだが、ここまで巧妙とは予想外だ。

とはいえ、面白くもあるのだが。

命を賭ける気などさらさらないが、それとは別に強い相手というのは、戦っていて楽しい部分はある。読める相手ばかりではつまらないというものだ。

起き上がって向き直ると、辺りは惨事になっていた。

おそらくはあの光の直撃を食らったのだろう、いくつかの死体、中には下半身しかないものも転がっている。

（不注意ですねえ）

片側ばかり見ているからそうなるのだと言ってやりたいところだが、残念ながら当人には聞こえなそうだ。

（さて、どう行きますか）

さすがに無策の状態で突っ込んで、この相手だと死に行くようなものだろう。

こういうことでは真つ当な思考パターンを取るルーフィアも、同じことを思っているのか、こちらに視線を寄越してくる。

Episode : 38

もつとも、取れる手はそう多くない。極端に言ってしまうえば、相手の攻撃を避けるか封じるかして倒すだけだ。

ルーフェイアが先ほどと違って何も命じないところを見ると、無駄だと判断しているのだろう。

（まあ、グレイスに不意打ちを食らわせていますしねえ）

もしかしたら命令が効くのかもしれないが、さっき倒した合成獣のことを考えると確実性は低い。だったらそんなものに頼らず、もっと確実な手段を取ったほうがいいだろう。

「——エターナル・ブレスっ！」

ルーフェイアが最強とも言える防御魔法を展開する。

「やれやれ。私に突っ込めと言うことですか？」

「え、あ、そういうわけじゃ……」

おろおろするルーフェイアに構わず、一步前へ出る。ああは言ったが、最終的に自分が剣を振るうことになるだろう。

ルーフェイアがかけた防御魔法は確かに効果は絶大だが、持続時間だけは長くない。

そうでなくても戦闘というのは、長引くとうるくなことが無い。力タをつけるのは早いほうがいいのだ。KBR<

右へ出ると見せかけて、全く反対の左前方へ出る。

「あなたたち、どいてっ！」

察したルーフェイアが邪魔な連中をどかしながら、逆方向へと出た。

予想と違う動きに、さぞびつくりしたのだろう。注目していた床の陰がゆらゆらと揺れた。

ルーフェイアの詠唱が聞こえる。

「実と虚の狭間、力ある鏡、虚を实と為し真理を映せ——フェ・ミロワール！」

確か、魔力を反射させるものだ。

（——なるほど）

ルーフェイアはこういうところは、やはり機転が効く。これで先ほどの光線を、無効化しようというのだろう。

案の定突っ込む自分達に対して、気を取り直したらしい合成獣が例の光弾を生み出す。

が、ルーフェイアもタシユアも全く怯まなかった。

光弾が打ち出される。

だがきいんと言う音がして、光はあらぬほうへと跳ね返された。

ルーフェイアの魔法の威力だ。

残念ながら光弾は虚像をすり抜けただけで当たらなかったが、よほど予想外だったのか動きが止まる。

その虚像へ突っ込み、さらに右奥へ剣を突き出した。

鈍い手ごたえ。そして虚空から合成獣の姿がにじみだす。

Episode : 39

タシユアの大剣は狙い通り、合成獣の胸元を深々と貫いていた。「まったく。意表を突かれたくらいでこれでは、実戦などで役に立ちませんね。まあもう、実戦に出ることはないでしょうが」

言いながら剣を引き抜き、振るう。

合成獣の人型の上半身が切り落とされ、四つ足の獣の部分も傾いて倒れた。

完全に動かなくなつたのを確認したうえで改めて、警備役だったらしい襲ってきた連中に目をやる。

（戦闘集団という割には、この程度で半減とは情けない……）
そんな思いしか浮かばなかった。

ルーフェイアに動くなと命じられたため、身動き取れなかった可能性は確かにある。だが例えそうだとしても、戦場で自分の命も守ろうとしない者はただの足手まといだ。

そんな人間がシュマーの中に存在したことに、むしろ驚く思いだった。

ざっと見渡して、襲ってきた連中のリーダーと思しき人間に尋ねる。

「他に警備は？」

だが相手は、硬く口をつぐんだままだった。

（無駄に忠誠心だけありますこと）

ある意味四角四面な態度に呆れつつ、言う。

「ルーフェイア、出来ますね」

とつとと進んで全て蹴散らしていけば済む話だが、情報が手に入るなら聞いておいた方がいい。

そしてそれが、ルーフェイアになら可能だ。

金髪の後輩が頷いて、後を引き取った。

「知ってること、教えて」

「——はい」

生粋のシュマーらしく、彼女の問いには素直に答える。

ルーフェイアのほうも普段とは少々違い、どこことなく振る舞いが尊大だ。

「……警備は？」

「他に、もう1分隊。ただ位置は分かりません。おそらく動力炉周辺を固めていると思われるが、移動した可能性もあります」

嘘をついているようには見えなかった。また先ほど研究者——本当に役に立たない——から訊いた情報とも合致する。だから真実と見て差し支えないだろう。

もちろん、現状がこの情報のままとは限らないが……。

「ありがとう。じゃあ、ここで何の研究をしているかは？」

「申し訳ありませんが、それについては聞いていません」

さもあんなん、と思う。

自分としては命令を単に鵜呑みにするなどありえないが、通常の兵ならば、このように躡けられるものだ。

（それで死んだら元も子もないのですがねえ）

死地と分かっただけで上が命令を下すのは、まあある話だ。そして

そついうことを知らずに死ぬのは、自業自得だ。

Episode : 40

もつとも「命令が納得できない」と言って逆らえば、どう考えても懲罰対象だろう。軍としては、それでは成り立たないのだから。場合によっては不名誉な除隊、国によっては処刑もあるだろうが、タシユアにしてみればそれも「自業自得」だった。

それが嫌なら、入隊しなければいいだけの話だ。

ルーフエアのほうはどう思っているのか知らないが、少し考えて別の質問をした。

「ここ、何人くらい居るの？」

「詳しくは。ですが我々を含め大体100名ほど居ると、最初の頃に聞きました」

警備とやらに來ている兵は20〜30名と言ったところだから、逆算すると50名以上の研究者がいることになる。かなり大掛かりだ。

が、現時点ではもうそれほど居ないのではないかと、タシユアは踏んでいた。もし自分がこの責任者なら、警備用とやらの人間を呼んで配置した時点で、証拠隠滅と脱出にかかる。

ここの連中がそれにも気づかないほど間抜けならいいが、さすがに都合が良すぎる考えだろう。

「そうしたら、ここの奥の部分……分かることがあったら書き足してくれる？」

ルーフエアが、先ほど研究者に書き込んでもらった地図を差し出す。

「了解です」

警備兵のリーダーがそれを受け取り、書き加え始めた。

動力炉周辺に次々と名前——部屋の使用者らしい——が書かれていき、それを見たルーフェイアがため息をつく。

「知り合いですか」

「知り合いと言うか……何度か会ったこと、あります。偽名じゃなければ、ですけど……」

「全体的にやや無用心ですからね。偽名までは思いつかないでしょう」

推測を述べる。

廃屋に偽装されていた入り口や、合成獣の配置、警備兵を呼んだこと等から、この連中が防備にある程度気を遣っているのは見て取れる。

が、所詮は素人の域を出なかった。いろいろなところで詰めが甘い。

だからここから脱出の手はずは整えていても、警備兵に偽名で名乗ってはいないだろう。

ルーフェイアの表情がますます暗くなる。

「そんなことで嘆くくらいなら、気づかなかった自分をまず嘆くですね。事が起こってから後悔するのなど、誰にでも出来ますよ」

「はい……」

律儀に少女が返事をした。

シルファ辺りが見たら可哀想だと言いそうだが、タシユアはそうは思わない。この子には現時点でこれだけの権力があり、ゆくゆくはシユマー全てを配下に置く。

ならば相応の責任があつて当たり前だ。

例えばどこかの王国で革命が起きれば、仮にその国の王が少年だったとしても、責を問われるだろう。そうなってから「知りませんでした」では済まない。

要はそれと同じことだ。

Episode : 41

「まあせいぜいその紙切れを大事にして、後で首謀者でも割り出すのですね」

最後にそう言い放つ。

もつともこのくらいは、言われなくてもルーフェイアはやるだろう。シュマーの総領家でグレイスであのカレアナの娘でサリアの従妹と言う割には、この子の感覚は戦闘関連を除けば、かなり一般人に近い。

だから気づかなかったと言う点で責はあるものの、放置することはないだろう。

——それでも、許す気にはならないが。

弄ぶ側にしてみれば、魔法で作った人形をいろいろいじってみたのと、大差ない感覚なのだろう。

だが、やられたほうはたまらない。お金や持ち物と違って、命には替えがないのだ。

(エウリス、アイシャ……)

弟妹の姿が脳裏をよぎる。

本来の姿とはかけ離れた状況で、戦うことを目的として生み出された彼らと自分。

過去に対しては、何を思っても無駄だ。出来ることがあるとすれば、未来に二度と起こらないようにすることだけだ。

だがそれでも、そこまで分かっているにしても、割り切れたとは言いがたい。かつて命を弄んだ連中は許せない。

ましてや現在進行形で行っている連中など、死体の一片も残らな

いようにしても差し支えないだろう。

ルーフェイアたちのほうは、概ね書き込みが終わったようだった。
「すみません、もう行けます」

彼女の碧い瞳は、まだまっすぐこちらを見ている。普段あれほど脆くすぐ泣く割に、こういう場合は案外気丈だ。

もっともルーフェイアの場合、戦闘状態か否かで相当変わることを思うと、単に今は戦闘状態か、それに準じた警戒態勢なだけかもしれない。

（後で泣くのですかねえ）
ふとそんなことを思う。

別にそれで問題があるわけではないが、タシユアにしてみれば無意味としか思えなかった。いくら泣いたところで、何かが解決するわけではない。

要するに、まだ甘いということだ。

ひとつ息を吐いて歩き出す。

ルーフェイアの足音は聞こえないが、付いてきているだろう。この子はこういうところではミスをしない。

ただ意外だったのは、警備とやらの連中も付いてきたことだ。自分達の主であるルーフェイアに、付き従おうと言っただろう。

（迷惑ですね……）

他の人間なら歓迎するのかもしれないが、タシユアはそうは思わない。

とかく他人というのは——シルファは別——こちらの意図を、悪気なく邪魔してくる。そしてそのたび、こちらは計画を修正せざるを得なくなるのだ。

Episode : 42

（まあ、イザとなったら囿にでも使いますか）

曲がりなりにもきちんとして訓練を受けたシユマーの一団だ。まさか即座に戦線崩壊はないだろう。

通路の残りは、もうそんなに長くなかった。向こうに終わりが見えている。

（あとはこの先がどうなっているか、ですか）

分かっているのは、主要な研究がこの先で行われていると言うくらいだ。

とはいえ少なくとも、残りの部隊は警備に充てられているだろう。そして場合によっては、残る合成獣も戦えるものは配備されている可能性が高い。

ただ部隊のほうはあまり心配なさそうだった。ルーフェアがこちらに居る以上、恐らく手出しは出来ない。

（――彼らに行ってもらいますかね）

自分が先に行って、警備隊を蹴散らしてもいいと思っていたのだが……やはり少々面倒くさい。

それにこの研究所の連中は、おそらくこちらの行動を観察している。だとするならこの研究者を裏切ってルーフェアに付いた彼らを先に行かせれば、こちらの行動はどこかに紛れてしまうだろう。好都合だ。

「ルーフェア」

「あ、はい？」

慌てたように、金髪の少女が駆け寄ってくる。

「先輩、なんですか？」

「あの警備隊とやらに、先に行かせてください。さすがに同士討ちはしないでしょうから」

なるほど、というようにルーフェアが頷く。

彼女が警備隊のリーダーを呼んで二言三言いうと、すぐに男も頷いた。

「仰せのとおり、隊を前へ出します」

命令が出され、男たちが前へ出る。

（こんな小娘の言うことを、鵜呑みにするのですからねえ）

僅か10歳ちょっとの子に判断を任せるなど、自分の人生を手放すに等しい。もう少し自分の頭で考えるべきだろう。

まあシュマーの場合、言っても無駄なようだが……。

先ほどまでとは逆、警備とやらの連中が先に立って自分が後からとなって、ほどなく。

（やはり、居ますか）

タシユアの鋭い感覚は、人の気配を捉えていた。数はおそらく十数人。先ほど聞いていた話とも一致する。

さてどうなるか。そう思って眺めていたが、警備隊のリーダーらしき人物が前へ出て、何事か話し始めた。

どうもシュマー語らしく、ところどころしかタシユアにも分らない。だがそれでも一部分かる語彙を繋ぎ合わせると、要するに「味方になるのか敵になるのか」という部分を、説得がてら問い詰めているらしい。

Episode : 43

だが議論(?)はすぐには結論が出そうになく、しびれを切らしてタシユアは歩き出した。

「……先輩？」

目ざとく気づいたルーフェイアが、声をかけてくる。

「先に行きます。いつまでも彼らの問答に付き合っではいられませ
んので」

「あ、じゃああたしも……」

言って少女がついてきた。驚いたのは警備の連中だ。

「ぐ、グレイス様?!」

「あ、えっと、みんなで適当に……この施設、確保して」

本当に適当な命令を彼女が下す。だが何故かこれで、連中は納得してしまっただった。

「了解です。この施設全体を確保します」

さっきまでの議論はどこへやら、一瞬にして全員が文句なく従ってしまっただけ。

「お願い。あと、えっと……ラヴェルさん、来て」

「はい!」

名指しされた研究者は、よほど嬉しかったのだろう。喜色満面だ。

(——やれやれ)

ここまで自分の意思がないとなると、シューマーはかなり危険だ。おそらく命じられれば、民間人の皆殺しも平然とやってのけるだろ

う。

幸いトップに居るルーフェアやカレアナが、そういう残虐さを持ち合わせていないからいいようなものの……万一暴君が王座に付いたら、目も当てられない。

もつとも、だからといって今、積極的に何かをする気はなかった。何かで鉢合わせしたなら容赦する気はないし、そもそも関わりたくもない連中だが、こちらに被害が及ばなければどうでもいい。

仮にシュマーが各国を攻撃しようとも、知ったことではなかった。そんなものは、敵意を向けられた当人達が考えればいいことだ。契約でもない限り、自分が出る理由はない。

「ルーフェア、地図を」

「あ、はい」

タシユアの言葉に、あっさりと彼女が地図を手渡す。

（まったく、無用心ですこと）

厳密に言えば自分とルーフェアは、敵対関係でもあるのだ。なにに自分の領土へ招き入れた上、一緒に行動し、果ては地図まで渡すというのだから、お人好しにもホドがある。

もちろんこの件に関しては、共同戦線を張っているとも言えるのだが……やはり少々用心が足りないだろう。

ルーフェアの地図には、名前のほかにも色々書き込まれていた。ただシュマー語で読み辛いため、無視して名前のある部分から当てることにする。

最も近い部屋へと向かい、ドアの脇にタシユアは立った。

「気配、しませんね……」

「ええ」

案の定、もう逃げ出した後らしい。

Episode : 44

罾がかかっているのかチェックしたあと、ルーフェイアが例の研究者を呼んだ。

「ここ、開けられる?」

「や、やってみます」

研究者——ラヴェルと言っただろうか——が、例によって細い隙間へカードを差し込み、さらにドアノブらしき場所の石に手をかざす。

が、何もおこらなかった。

「ダメ……ですね」

「見れば分かるでしょう」

言いながら扉を調べてみる。

かなり硬い鉄だ。それに叩いた感じ、厚みも相当ありそうだ。

（さすがに破るのは面倒ですか……）

隣で覗き込んでいたルーフェイアも、同じように思ったらしい。

「えっと……あの、破るの大変そうなので、あたし……開けてもいいですか?」

「開けられるのでしたら」

言っただけ場所を空けてやると、ルーフェイアが腰につけていたポーチを漁って、研究者の似た魔力石の板を取り出した。

色は完全な透明で、中に金のラインが一本走っている。

「それで開くのですか?」

「たぶん……」

「そんないい加減なことでは困りますが」

口ではそう言ったが、タシユアは邪魔するつもりはなかった。それで調べるまでに手間取っては、本末転倒だ。

ルーフェイアが自分のカードを隙間へ差し込み、ドアノブ代わりの石へ手をかざす。

石に柔らかい光が灯った。

「開いた、みたいです……」

「まったく、ずいぶんといい加減ですこと」

それにしてもシュマーというのは、本当にグレイスを中心にした組織なのだと思う。

何しろここが廃棄されたのは、ルーフェイアが生まれるずっと前の話だ。なのに彼女が持っているカードが有効なのだから、グレイスが居る居ないに関わらず、その特権が組み込まれているのだろう。

（やれやれ……）

あまりの忠誠ぶりに少々呆れながら、そつとドアを開けてみる。

だがやはり部屋の中は誰もおらず、資料だけが山積みになっていた。

（単なる資料室ですかね……？）

名前が書き込まれていたので、誰かがここで研究をしているのだろうと思っていたが、意外とそうでもないらしい。

奥に机があつて、そこにいちばん資料が山積みになっているところから見て、この部屋の主が研究者らしいことは分かる。

ただここで何をしていたかは、さっぱりだった。

資料を見してみる。

Episode : 45

(——分かり辛いですね)

もつとポピュラーなアヴァン語などで書いてあるときもあるのだが、この資料はどれもシュマー語だった。そのためにタシユアからしてみると、かなり読み辛い。

1行目くらいまでは読んでみたものの、辞書が手元にないため専門用語らしきものが分からず、時間をかけていられないこともあって一旦断念する。あとで辞書を探し出してから、改めて読んだ方が良さそうだ。

他言語で書かれたものは無いかと探しながら、タシユアはふと思った。

今まで通信システムに勝手にもぐりこんで見てきた感想だが、シュマーは意外と多国籍だ。特に後方支援に当たる一群では、かなりの割合にのぼる。

なのにここでは、シュマー語が圧倒的多数を占める。さつきから殆ど他の言語を見かけない。

またここに居た研究者も呼ばれた警備兵たちも、ルーフェイアの命令が良く効いた。

その辺を考え合わせると、この集団はシュマーの血縁だけで構成されている可能性が高い。

おそらくはあまりにも問題が多い研究——そう思っていること自体驚きだが——のため、口が堅い血縁だけを選んだのだろう。

ただ逆に言うなら、自分の想像をも上回る可能性さえあった。

正直もつ、何を言う気にもならない。この施設を問答無用で破壊して、焼き払った方がいらいだ。それでも何とか自制しているのは、ここに証拠があるからだ。あとでどうするかはさておき、明確な証拠を押さえておくに越したことはない。

部屋の中は中央奥に机と魔視鏡、壁はどこも書棚という造りだったが、ところどころ本が抜けていた。気になって調べてみる。

（いわゆる本はありますか……）
どうもなくなっているのはノートや研究結果等、ここで生み出されたものばかりのようだ。早い話が、証拠隠しだろう。

ここまで徹底しなくてはならない辺りからも、研究内容の非道さが分かるというものだ。

冷たい怒りを抱えたまま辺りを物色するうち、タシユアは綴った書類束を見つけた。

中を見てみると、珍しくアヴァン語で書いてある。

（これなら分かりますか）

最初のページに目を通してみると、ここで行われていたことの概要のようだ。掘り出し物かもしれない。

だが2ページ目へ来た辺りでもう、タシユア怒りはさらに増す結果となった。

（ずいぶんと大規模ですこと）

そこには現代のことだけでなく、過去のことまで大雑把にだが、遡って書かれていたのだ。

Episode : 46

目次を適当に読み流し、本文へと入る。

最初に書かれていたのは簡略化された神話だった。ただ最後のところが一般に伝わるものと違い、「初代グレイスが神を封じた」とある。

（よくある一族の美化ですかね）

神話と言うものは往々にして尾ひれが付く。ヘビを退治した話が
大蛇になり、果ては竜になるようなこともあるくらいだ。

だからこれもおそらく、その類なのだろう。

その先は歴代グレイスに關することが書かれていた。とは言え名前と生まれた年代、それに没年程度だ。

ただ不思議なことに、全員短命だった。もっとも若いと10歳程度、長くても20歳前後で没している。

健康状態の悪かった昔でも、長命だったものは居る。それを考えると、全員が若死にというのは腑に落ちなかった。

ここの研究者達も、同じ点に着目したらしい。短命なことに言及したあと、一言「力足りず」と結論付けている。

（力、ですか……）

どうも言葉が上手く繋がらない。短命なことが生命力のなさを取れば辻褄は合うが、それとは少し違う気がするのだ。

シュマーの間では当然の事柄を、タシユアが知らないせいなのか
もしれない。

とりあえず棚上げして読み進めると、よく知った名前が出てきた。

——現総領、カレアナ。

言わずと知れたルーフェイアの母親だ。

だが書いてあったことは予想とは違った。彼女に絡んで、秘密裏に実験が行われたらしい。

ひとつひとつ読んでいくうち、怒りがまた増していった。

（まったく、どこまで……）

この資料を読む限りではカレアナの両親、ルーフェイアから見た祖父母はかなり早く、子供がいないうちに亡くなっているらしい。

ただ、問題はその後だ。

子供を設ける前に祖父母が死んでいるのだから、本来ならそこでシユマーの総領家は絶えていたはずだ。

——残された受精卵がなければ。

最新技術のそれは、早々にシユマーにも導入されていたらしい。そしてそれを元にかんりの数の子供が作られ……カレアナはそのうちの一人だと資料には書かれていた。

しかも実験はそこで止まらず、さらに加速している。ただ子供を作る——それだって相当の犠牲が出る——のに飽き足らなくなつて、子供の「加工」を始めているのだ。

ある程度予測していたとは言え、見逃せるようなことではなかった。

Episode : 47

怒りを押し殺しながら読み続ける。

どうやらカレアナと同時期に生まれ同じ総領家として扱われたのは、あとは弟とされた1人だけのようだ。

他にもう1人、女性が破格の扱いを受けている。だがこの女性はシュマーを捨てたようで、出奔の記述を最後に記録が途切れていた。

さらに記録を下るうち、また知った名が目飛び込んでくる。

サリーア。ルーフェイアの従姉で、シュマーの実務面の実力者だ。責任者はカレアナだが、取り仕切っているのは実質的にサリーアと言ってもいい。

だがその彼女にまで、この実験が絡んでいた。しかも、明らかに常軌を逸している。

（親が……）

記録には父親が存在せず、母親が2人。片方はカレアナ。もう片方は出奔したとされる女性だ。コメントには「より強い魔力を持たせグレイスを生み出す実験」とあり、また「意図そのものは達成したもののグレイスとはならず」とあった。

これが本当だとすれば、サリーアはルーフェイアの従姉ではなく姉だ。

ただこの件、ルーフェイア本人はおそらく知らないだろう。そうでなければあそこまで無邪気に、「従姉だけど姉さん」とは言わないはずだ。

いずれにせよ、相当根は深いようだ。どう見ても総領家全てが巻き込まれている。

問題は、それをどこまで当人達が知っているかだが……。

（――全ては知らないのでしょうか）

何ひとつ知らないと言うことはさすがにないだろうが、全貌は分かっている可能性が高い。

こういった「通常ありえない」形で生命を生み出す技術は、以前からある合成獣を作る技術に端を発していた。

そもそも合成獣自体が、人為的に生命を作り出そうという実験の副産物だ。

長年の研究から生き物はそれぞれ生体情報と呼ばれる、固有の生命波とでも言うべきものを持っているのが分かっている。

それは例えて言えば音楽のようなものだ。そして種族単位でいたいと同じ旋律になるのだが、細部を細かく見ると一体ごとに違っている。

それを混ぜ合わせ、本来ならくつつくわけもない別の生き物同士を繋ぎ合わせるのが、合成獣の技術だった。

本来別々の生き物を魔法で時間を止めた状態にし、切り刻んである程度繋ぎ合わせ、特殊な魔法陣の中に置く。そしてそれぞれの生き物が持っていた生体情報を上手く混ぜ合わせ、一つのまとまった旋律とでもいうべきものにし、魔方陣の中に注ぐのだ。

そして成功すれば、あり得ない生き物の出来上がりだった。

――考えるだけでも吐き気がしそうだが。

自分がされる側になったら断固拒否だろうに、何故他者に対しては平然とやれるのか。

タシユアも自分の感覚が多少一般からずれている事は認識しているが、さすがにこれは理解の範疇を超えている。

Episode : 48

いつかこの連中を、そんな仄暗い想いを抱く。こういう一線を踏み越えた連中は、何かあってもおかしくない程度には恨みを買っているはずだ。

資料にはカレアナ始め、この連中が生み出した存在に何をどうしてこうしたというような事が、延々と書かれていた。

もつともやり方自体は、オーソドックスなものだ。

今では合成獣のほうが有名になってしまったが、この手の生体錬金術と呼ばれるものは元々、人工的に生命を生み出すのが目的だ。そのため生き物の一部を使って元と同じ生き物を作ると言った実験は、古くから行われていた。

ただその実験が成功し始めたのは、そんなに昔のことではない。自然科学が発達し始め、受精卵が発見されてからだ。

だがそこから先は早かった。

何しろ本来関係ない生き物を、混ぜ合わせるような技術があるのだ。最初から赤ん坊になることが前提の受精卵を育てることは、決して難しくない。魔法陣の中に培養層を設置し、受精卵と同じ型の旋律を注ぐ。ただこれだけで十分だ。

まあ実際には育ち始めはするものの、新生児のレベルにまで育つ確率は通常妊娠には全く及ばず、いいところ10回に1回らしいが……。

加えて魔力を栄養代わりに育つためか、精神的におかしくなる傾向が高い。その辺からしても、やる価値は薄かった。

——この連中には、そんなことどうでもいいのだろうが。
命を平然と冒流して、何も感じないような連中だ。生み出した存在がどうなろうと、気にするようには思えなかった。

しかもこの人工発生、資料を見るとさらに続きがある。

2つの異なる生き物を混ぜ合わせ合成獣を作る技術はポピュラーだが、禁忌とされる混ぜ合わせ技術の応用をしているのだ。

培養層に入れた受精卵を魔法陣に置き、本来のものではなく他の生体情報と混ぜ合わせた『旋律』を注ぐ。確かに理屈の上では、これで本来無いはずの性質を持った子供が生まれるはずだ。

ただ本来あり得ない情報を強引に追加するためか、成功率はかなり低かった。それに上手く成功したとしても、これまた精神に異常を来す率が高い。

そんな理由で一般には禁断とされていたはずなのだが、シュマーの連中に倫理観を求める時点で間違っているだろう。

（もっともこういう馬鹿は、他にも山程いますか）

他にもそんな連中に心当たりのあるタシユアにしてみると、もうこういう研究をしようとする時点で、何か精神に問題を抱えているようにも思えてくる。

いずれにせよこの資料を見る限りでは、シュマー総領家でも実力者のサリールは、そういった「強引に情報を書き換えられた」存在らしい。

が、そこまでしたにもかかわらず、結果的に実験が失敗に終わっているのが興味深かった。

実験の目的は当初は「総領家を途絶えさせない」ことだったようだが、カレアナと弟とが総領家を継いだ時点で元々の目的を失い、

変質したようだ。

Episode : 49

その証拠にカレアナ達が総領家に入るまでは単純に受精卵を育てていたのが、それ以後急に「加工」へと舵を切っている。

（農作物の品種改良ではあるまいし）

執拗に加工と改良を繰り返した理由は、「グレイス」を生み出したかったらしい。しかしなぜそこまで生み出したかったのかについては、この書類束には書かれていなかった。

ただルーフエイアを見る限り、シュマーの中での「グレイス」というのは単なる立場ではなく、何か強制力を持つらしい。だからその辺に理由があるのだろう。

ともかく資料ではそうやって改良を続け、トップクラスの能力を持つて生まれたのがサリーアということだった。そして当時は、彼女こそが「グレイス」だろうと思われていたらしい。

が、秘密裏に行われていたのが発覚、カレアナがこの時点で徹底的に制裁を加えたようだ。しかも数年後、実験とは無関係に生まれたルーフエイアがそうだと分かって事態は一変。一連の実験は目的を失い、消滅したとある。

（——はい？）

予想外の言葉に少々考える。

発端は別としても、グレイスを生み出そうという実験が、グレイスが自然発生したことで消滅したということ自体は、これといって矛盾はない。

だがそうだとしたら、今ここで行われている実験は何なのか。

何らかの非道な、人を改造するような事が行われているのは間違いない。けれど目的が見えてこない。

これほどの人数で実験を行っているのだ。ただの興味本位にしても、それなりの意図がなければ賛同者——居ても困るのだが——は得られないだろう。

だとしたら、いったい理由は何なのか……。

「——先輩？」

後ろから近づいてきた少女が、タシユアに声をかける。

「あの、その書類……要りますか？」

「意味が分かりませんね。通じるようにお願いします」
すかさずそうタシユアは返した。

振り向くと案の定、ルーフェイアが困った顔をしている。

「えっと、ですから、その書類……」

「この書類がなんだというのです」

機密事項だから触るなどでも言うつもりなのか。

口下手なルーフェイアはもう気圧されてしまったのだろう、何か言いかけてはやめることを繰り返している。

「言いたいことがあるならはつきりと、常日頃から言っているはずですがね。それとも、この書類に触るなどでも？」

だとすれば本末転倒だ。部外者を引き込んだ上に資料庫に連れ込んでいるのだから、見るなど言うほうがどうかしている。

Episode:50

「あの、そうじゃなくて……書類……」

ルーフェイアが、また同じような台詞を繰り返した。

正直埒があかないと思ったが、何か言いたそうなので待ってみる。少女は少しの間意味不明のことを言っていたが、やっと理解できる言葉を口にした。

「……その書類、えっと、持って……行きますか？」

「持って行って構わないのでしたら」

これは本音だ。知ったからといって何が起るわけではないが、出来ればこんな中途半端な立ち読みではなく、きちんと座って読んではみたい。だから持ち出していいというなら、断る理由はなかった。

——ルーフェイアにその権限がない気はするが。

とはいえシュマー内なら、この子が言えばほとんどの横車を通るだろう。異を唱えるとしても書類の持主当人程度、下手をすれば持ち主も喜んで従うかもしれない。

（まったく。何のための自由意思なのやら）

これではどう見てもただの奴隷だ。しかも奴隷状態にあるシュマーの面々がそれでいいと思っているのだから、もうどうしようもない。

まあだからこそこの施設での実験が、まかり通ってしまったのだろつが……。

（シュマーももう、長くないのかもしれませんが……）
ふとそんなことを思う。

大きな組織が倒れるときというのは、中から腐るものだ。そしてシュマーは、すでに一部が腐り始めている。

誰かが大蛇を振るって切除しなければ、遠からず自壊するだろう。もっともその大蛇を振るえる人物の一人は、今ここにいる。だからもしかすると、ここで一族をうまく立て直すかもしれない。

（――私一人で来るべきでしたかね）

話の成り行きでここまでルーフェアと一緒に来たが、そもそも彼女に何も言わず黙っておけば、シュマーはそのうち消えたかもしれない。

そうなれば、晴れて人殺し集団が地上から一つ無くなったわけだが……それに気付いたとしても、実験を見過ごせなかっただろう。

シュマーが仮に消えるとしても、今日明日の話ではない。だが実験台にされている側は、それこそ今日明日の話だ。

どちらを優先すべきかは一目瞭然だった。

ただ見過ごせない理由は、「人道的」とか「正義」などというものではない。単に「この手の実験が嫌いで許せない」というだけだ。そしてタシユアにとっては、それで十分だった。

そして、目の前で困ったような顔をしている少女に言う。

「この書類、持って行っていいのですね？」

「あ、はい。あ、でもあの、あんまり、大っぴらには……あと、返して頂くかも……」

立場からしてみれば概ね妥当なことを、ルーフェアが口にする。

Episode : 51

ただだからと言って、ルーフェイアの立場に配慮するようなタシユアではない。

「外へ情報を出しておいて、返して欲しいとはずいぶん甘い考えですこと」

「え、でも、調査に……」

「——なるほど」

回収が目的かと思っていたが、少々勘違いしていたようだ。

「でしたら、あなたが先に読むべきですね。他人に渡すと言うことは、『返ってこない』ということでもあるのですよ」

「え、でも、先輩は約束守るんじや……」

ルーフェイアが不思議そうな顔をしながら言う。

「確かにそうですが、他人を勝手に判断してどうするのです」

「え、でも、シルファ先輩が……」

答えを訊いてなるほどと思う。シルファはルーフェイアとよく一緒に居るから、何かの折にそんな話になったのだろう。

（やれやれ、ずいぶん買いかぶられたものですね）

ルーフェイアのいうとおり、自分は必ず約束は守る。ただそれはあくまでも自分の場合で、他人に適応できるわけではないのだ。

そういう細かいことが、果たしてルーフェイアに分かっているのか。

（——まあ、構いませんか）

仮に思い違いをしていたとしても、困るのはルーフェイアだ。そんなことを思いながら、タシユアは書類束を指差しつつ訊いた。

「それで、これはどうするのです?」

自分が質問されるとは思っていなかったのだろっ、しどろもどろになりながらルーフェイアが答える。

「あ、えつと、ええと……お借りして……調査終わったら、先輩にお返ししてもいいですか……?」

「本来シュマーのものを、あなたが借りてどうするのです」
くれるというならそれで構わないが、渡してもいないうちからどうやって借りるのか。

「……すみません……」

「誰が謝れと言いました」

「すみま……あ……」

いつものやり取りになる。

だがタシユアは今日は、早々に打ち切った。調査が先だ。

「これ以上ここに用がないのなら行きますよ」

「あ、はい」

きびすを返したタシユアの後を、ルーフェイアと例の研究者——まだ居た——がついてくる。

だがその後は、これといって目新しいものはなかった。研究者たちが逃げ出しているのもあって、どの部屋も肝心の資料は処分されてしまったらしい。

もう何度目かのドアを、まずついてきた例の研究者が開くかどうか試し、結局またルーフェイアが強引に開ける。

Episode : 52

「……ここも処分されていますか」

棚から書類や本が落ち乱雑に散らかった部屋は、慌てて何かを引っ張り出した様子が窺えた。

今までいくつも部屋を見たが、あったのはさっき読んだ書類束だけだ。

思うにこの書類束はアヴァン語だったために、慌てて処分する際に見落とされたのだろう。

（この調子では望み薄ですかね）

地図と照らし合わせた限りではここが魔力炉の一番近くで、施設のほぼ中心と言っているいい場所だ。

そこを探してほとんど見つからないのだから、あとはもう人海戦術で、施設全体をしらみつぶしに探すしかないだろう。

例の研究者は、まだ一緒に居た。

（よほど頭が明後日のほうへ飛んでいるのですかね……）

同僚が逃げ出しているのだから、普通なら不安になってもおかしくない。なのにこのこと一緒に回っているのだから、頭のネジが数本抜け落ちていそうだ。

ルーフェイアと一緒に居るから安心して……というのはいりそうだが、それを考慮に入れたとしても、無防備すぎるだろう。

本を踏まないよう注意して歩きながら机まで行き、置きっぱなしの魔視鏡を立ち上げる。

（やはりダメですか）

記録石には、記録が消された痕跡があった。証拠隠しだろう。た

だ、消し方が甘い。これならば自作の魔令譜を使えば復元できそう
だ。

一旦魔視鏡を止め、記録石を外しにかかる。

ルーフェイアは横から見ていたが、止めはしなかった。だがじきに飽きたのかとことごと部屋奥へ行き、何故か壁の前で立ち止まった。

しかも何を思ったか、そのままずっと壁を眺めている。

「ルーフェイア、そんなに壁が気に入りましたか」

「あ、いえ、壁じゃなくて……」

例によって少女の返答は的を射ない。

「それが壁でなければ何だというのです」

「いえ、じゃなくて……開く……？」

言いながら壁をなでたりさすったりしている。

「隠し扉だとも？」

「分かりません……でも、開く気がするんです……」

タシユアが見る限り、部屋の奥はどう見てもただの壁だ。だがルーフェイアは開くと信じ込んでいるらしく、壁の前を行ったり来たりしている。

と、隅に置かれた棚の前で立ち止まった。

「ここを……開けるの？」

誰かに問いかけるような言葉。

「まったく、ついになんかおかしくなりましたか？ 誰と話しているのです」

「え？ あれ？」

どうやら本人に自覚がなかったようだ。

Episode : 53

「医者にでも行ったほうがいいのではありませんか？」
だがルーフェイアは答えず、棚の中に手を差し入れた。
かちりという、何かがはまるような音。

「ほう……」

タシユアが声を上げたのは、壁が動き出したからだ。
厚みのある壁が、下から上へ。そして天井へ吸い込まれていく。
小柄なルーフェイアがまず先に覗き込み、くぐって中へと入って
行つて――。

「いやああああっ！」
悲鳴。

「ルーフェイア？」

泣き虫な彼女だが、意外にも滅多に悲鳴は上げない。それどころ
か、非常時なら泣くこともしない。

おそらくは最前線で育つたためだろう。

いちいち声を上げていては、それこそ敵に場所を悟られてしまう。
あんなところで音をたてるというのは、敵に射撃の的を教えるよう
なものだ。

なのに今、ルーフェイアが声を上げている。
ただならぬものを感じて、タシユアは少女の後を追って壁をくぐ
った。

「いったいどうしたのです」

「先輩、あ、あれ……」

ルーフェイアが泣きながらすがりついてきて、奥を指差す。そうとう動揺しているようだった。

「なにをそんなに——！！」

さすがの様子になだめながら奥を見たタシユアも、さすがに言葉を失った。

部屋に並べられた大きな水槽。そこまではまだ何とか分かる。だがその中には……。

「——なんてことを」

水の中で揺らぐ金の髪。白磁の肌。おそらくはルーフェイアの複製だ。人数は20人近いだろうか？ 胎児と思えるものから幼児までさまざまだ。

ただそのどれもが、すでに命がなかった。

溶け崩れたりはしていないから、死んだのは間違いなく最近だ。

一番可能性が高いのは、ここが見つかって撤退する時か。

どちらにせよ、許せる話ではない。こんなふう to 子供をモノのように量産し、拳句に要らなくなったら殺すなど、気がふれているとは思えなかった。

よほどシヨックだったのだろう、ルーフェイアは幼児のようにしがみついたまま震えている。せめて椅子にと思ったが、タシユアから離れようとしなかった。

（まあ、これは仕方ありませんか……）

タシユアでさえ、ここまでは予想していなかった。

自分の複製をずらりと並べられたうえ全て殺されているなど、タチの悪いホラーとしか言いようがない。平然としているほうが、神

経を疑う。

Episode : 54

(……おや?)

ふと気づくと、例の研究者が消えていた。どうもルーフエアにしがみつかれている間に、出て行っただけらしい。

「——ルーフエア、そろそろ放してもらえますかね」

言つと少女が慌てて手を離れた。まだ瞳がうるんでいるが、どうにか落ち着いたようだ。

「まったく。ショックだったのは分からなくもありませんが、あなたはシュマーのトップですよ？　それが身内の所業にいちいち泣いてどうするのです」

「す、すみません……」

「条件反射で謝っても、意味はありませんよ」

以前から思っていたが、ルーフエアが謝るのは深く考えてのことではない。とっさに謝るといふ行動が、パターン化しているだけだ。

「やってしまつて謝るくらいなら、謝らずに済むように手を打て、以前も言つたはずですがね。だいいち考えもなしにただ謝っても、また同じことを繰り返すだけです」

「すみません……」

埒が明かない。

ひとつため息をついて、タシユアはさっきから気になってることを投げかけた。

「あなたの誤り癖がどうしようもないのは理解しましたが、謝ってもあの研究者の行き先は分からないでしょうね」

「え？」

まだめそめそしていたルーフェイアが、はっと顔を上げる。

「いないん……ですか？」

「少なくともこの部屋には」

小さな生き物ではあるまいし、人が他にいないは、たいていの人は気づく。

「逃げたん……ですよね？」

「分かりません。そういうことは本人を捕まえてから言ってください。」

タシユアのある種突き放した答えに、だがルーフェイアは納得がいったようだったそのまま壁へ走り寄り、通話石を稼働させている。

「この施設に残っている人に命じます。研究者のラヴェルをすぐ捕まえなさい！」

その様子たるや、ふだんのおどした彼女とは大違いだ。

（やはり何やかや言っても、シユマーということですか）

暴走してもおかしくないメンバーを、ただ一言でまとめ上げているのだ。やはり“グレイス”の肩書きは、シユマーの中では絶大なのだろう。

研究者のほうは、なぜ逃げたのかが分からなかった。

普通に考えるなら、もっと早い時点で逃げ出していて当然だ。事実他の研究者たちは逃げ出していて、ラヴェルとかいうものだけが取り残されている状態なのだ。

Episode : 55

（周囲が脱出したのを、知らなかったのですかね……）

だがいろいろ考え合わせてみると、やはりこれでは噛み合わない。

あの研究者は、警備のための人員が配置されたことは知っていた。だから情報が伝わってないわけではない。だとすれば、ここから他の研究者が脱出しようとしていることも知っていたはずだ。

なのに何故、彼だけは残っていたのか。何か理由があるはずだ。

（まあ、捕まれば分かりますか）

ここから脱出しようと思ったら必ず船が居るし、そこまでの距離は遠い。しかも追われるのは運動不足の研究者で、追うのは鍛え上げた連中だ。どう考えても逃げ切れないだろう。そのうち知らせがあるはずだ。

ルーフェイアのほうは命令だけはきちんと出したものの、すぐに手近な椅子に座り込んでしまった。まだショックが抜けきらないらしい。

「あなたがそうしていても、死者は戻りませんよ」

「はい……」

そうは言うものの、彼女はうつむいたままだ。

「そんなに後悔するのなら、もっとよく組織を把握しておくことです。防げないのはトップの責任です」

タシユアの言葉に、うつむいたままルーフェイアが小さくうなずく。

今までもこれからも、「知らなかった」では済まされない。それ

が上に立つということだし、それだけの権力を持ちながら義務を果たさない人間は、誰であれタシユアは許す気はなかった。

まあそうは言ってもこの件に関しては、ルーフェアはさほどの責任はないのだが……。

と、部屋の扉がノックされた。

扉そのものは開いているのだから、おそらくはルーフェアに入室を伝えただけだろう。そう思いながらも答える。

「何です？」

「グレイス様のご命令どおり、研究者を捕まえました」

言葉と共に、両方から羽交い絞めにされた例の研究者が前へ連れてこられる。

（よくまあ、この短時間で）

同じことをルーフェアも思ったようだ。

「どうして……こんなに早く？」

「不審な様子でうつついていましたので、念のために捕縛しましてそこへグレイス様の命令が入ったものですから……」

早い話、命令を出した時点でもう捕まっていたようだ。

ルーフェアが一步前へ出た。

「知ってた……のよね？ 奥の、部屋のこと」

彼女の問いに、研究者が視線をそらせる。

Episode : 56

「知ってるなら言いなさい」

珍しくルーフェイアの声が、僅かな怒気をはらんだ。甘い彼女でも、さすがに見過ごせなかったのだろう。

碧い瞳に見据えられて、研究者の顔が引きつる。

「どうなの!」

「し、知ってました……」

かすれるような声で彼が言った。

「いつから?! 何のためにあんなことを!」

ルーフェイアが少し涙声なのは、ショックからだろう。

「答えなさいっ!」

「は、はいっ!」

大の男が小娘に震え上がる様子は、滑稽としか言いようがなかった。

同時にこれこそが、シュマーの暗部を表しているのだろうとも思う。

あの見つけた書類束にも、「この実験はすべて総領家のため」というようなことが書かれていた。

逆に言うならそういう理由さえこじつければ、何でも通ることだ。事実そうやって、この施設では人をないがしろにした研究が続けられていた。

ルーフェイアやその母がどう考えていようと、シュマーの総領家はその支配力故に利用される。それが分かっているのなら、あま

りにも愚かと言つべきだろう。

「この部屋での研究は、いつから？」

「ぐ、グレイス様がお生まれになった後からですから……たぶん10年弱かと……」

「だいたい予想通りだ。だいいちルーフェイアが生まれる前では、その複製があるわけがない。」

「何のために！」

「そ、それは詳しくは……ここでこういう研究をしてる、ことしかいい加減すぎる答えに、さすがにいい口を挟む。」

「——自分たちが何をしているかも知らないとは、研究者として失格だと思えますがね」

一瞬真っ青になった後、真っ赤になって研究者の男が叫ぶ。

「し、仕方ないじゃないか！ お前に何が分かるんだ！」

「仕方ないなどと言いつつ訳するような輩のことなど、分かる気などありませんよ」

自分がやったことの重さに気付かなかった連中は、なぜ責任を棚上げて、一様にこう言うのか。

「あなたが同じことをされて、『仕方ない』と言われても納得できるのでしたら、まだ話は分かりますがね」

口ではそう言ったが、そんな聖人君子のような態度が、この連中に取れるわけがない。だいいちする側に限って、同じことをされたら怒るのだ。

「それで、なぜ逃げだしたのです？」

自分が訊いて答えが返って来るとは思わないが、それでもタシユ

アは尋ねた。こうでもしないと、今のルーフェアではなかなか事
の核心へたどりつかない。

Episode : 57

「……………」

案の定、研究者は黙ったままだ。

だがルーフェイアのほうが気を利かせて、男に対して問い直した。

「どこへ行くつもりだったの？ 答えて」

「わ、私の部屋へ……………」

「——部屋？ 部屋に何があるの？」

ルーフェイアに問われて、とても言いづらそうに男が口を開いた。

「そ、その、子供が……………」

この一言でタシユアはピンとくる。この研究者、恐らくは…………。

「子供？」

「ルーフェイア、最初の部屋に行けば分かります」

言ってタシユアは歩き出す。

ルーフェイアは最初ちよつと首を傾げ不思議そうな顔をしていたが、すぐに後ろを付いてきた。

「 그레이스様？ そちらの調査は終わったのですか？」

「終わったというか………… 違うもの、あるみたいなの」

途中で一度別れた警備の連中に出会ったが、彼らもルーフェイアの的を射ない説明に思案顔だ。

「違うものと言うと、何か調べ忘れましたか？」

「たぶん……………」

聞いているだけ無駄だと、タシユアはさっさと元の部屋へ向かう。

「あ、先輩！」

後輩の声が聞こえたが、タシユアは振り返らなかった。本当に知りたいのなら、勝手に付いてくるだろう。

「あ、えつと、みんな……この調査、お願い。片っぱしから開けて。ダメなら、非常コード使って」

ずいぶん大雑把な命令を出して、ルーフェイア本人はついてくる。ここが敵のいない施設内だからいいが、戦地であんな命令を出したら死者が出だろう。

もつともシュマーの人間がいくら死んだところで、別に構わないのだが……。むしろその方がいいかも知れない、そんなことを思いながら長い廊下を戻る。

途中、例の合成獣の死体はまだそのままだった。施設内にほとんど人が居ないため、片付ける人間もいないのだろう。

（——いつそこが丸ごと、墓場でいい氣もしますが）

極悪非道としか言いようのない研究をした連中を、全員ここまで連れてきて墓場にしてやったら、少しは氣が晴れそうだ。

もちろんそれで実験台にされた子たちが戻るわけではないが、彼らもいくらかは氣が済むだろう。

Episode : 58

そしてタシユアは最初の部屋にまた踏み込んだ。

ここも合成獣の死体はそのまま、床の血は乾きだしている。

（どこですかね）

ここも何か仕掛けがあるのだろうか、ちょっと見ただけでは分からないそう。

やれやれと思いながら、手近にあった椅子に腰かける。

どうせそのうち、ルーフェイアがあの研究者を連れて来るだろう。そうすればすぐ分かるのだから、ひとりで探すのは骨折り損というものだ。

（何がしたかったのでしょうか……）

分かったからと言って許す気はないが、動機は気になる。

当初が「グレイスを生み出すため」で、それがルーフェイアが生まれたことで目的を失い、実験自体が終わったのは分かった。

ならばなぜ、また続けているのか。

そもそもが頭のおかしい連中だ。意図がないというのもあり得るが、それにしては規模が大きすぎる……というのが感想だった。

いずれにせよ、総領家の統制が効かなくなっている可能性は高い。かなり危険だ。

（やはり今のうちに、シユマー自体を始末したほうがいい気がしますが）

こんな非道なことをやる連中が暴走を始めては、被害が大きすぎ

る。

と、廊下を歩く足音が聞こえてきた。

「……先輩？」

すぐにルーフェイアが姿を現す。予想通り例の研究者と、彼を連行してきたらしい警備の人間数名も一緒だ。

「今、開けさせますから」

「急いでいただきたいものですね。こんな場所に時間をかけても、楽しいものではありません」

「すみません……開けて。すぐ」

ルーフェイアに命じられて、例の研究者が慌てて部屋の隅へ走る。どうやらそこに、隠し部屋を開くためのスイッチやなにかがあるらしい。

（どこまで自分勝手なのやら）

この調子では施設のどこに、何が隠されてるか分かったものではない。警備とやらの人間も使ってかなり調べたようだが、まだ見落としがありそうだ。

例の子供たちが殺されていた隠し部屋と同じように、壁が丸ごとせり上がっていく。

「ここにも……」

ルーフェイアが弱々しい声で言ったのは、水槽の中を見たからだろつ。

金髪に白磁の肌。年は4歳くらいだろうか？

もしかしたら他の総領家の誰かが元かもしれないが、いずれにせよルーフェイアと血がつながっていることは間違いない。

と、水槽の中の子が目を開けた。

Episode : 59

R u f e i r

その部屋に入ったのは、偶然だった。順番に調べていて、たまたまその部屋に行き当たっただけだ。

この部屋へ来るまで、これといった収穫はなかった。タシユ先輩が一つ書類の束を一生懸命読んでたけど、それだけだ。どの部屋へ行っても、肝心の証拠はみんな捨てられてる。

逆に言うなら、それだけひどい事がここで行われてた、ってことだろう。じゃなきゃいろいろ捨てたりなんてしない。

それにどこの部屋も、厳重にロックがかかってた。ただあたしのコードがここでも効いて、それで全部開けられてる。

「……ここも処分されていますか」

先輩が中を見て言った。

今までと同じように、書類や本が床の上に散らかった部屋。慌てて何かを引っ張り出したのは間違いない。

つまり……ここでもいろいろ処分したんだろう。

ただこの部屋には、魔視鏡があった。それを先輩が起動させる。けど先輩、すぐに魔視鏡を止めた。そして記録石を外し始める。もしかすると中に、何か記録が残ってたのかもしれない。

ただあたしはそれよりも、奥の壁が気になった。

近づいて撫でて叩いてみる。

——ふつつの壁と同じ感触。

変わったところがあるようには思えない。なのに、気になる。

「ルーフェイア、そんなに壁が気に入りましたか」

首をかしげながら壁を見ていたら、先輩に怒られた。

「あ、いえ、壁じゃなくて……」

「それが壁じゃなければ何だということです」

言われたけど、上手く答えられない。

「いえ、じゃなくて……開く……？」

どこかに何か手掛かりがないかと、あちこち触ってみた。でも、やっぱり何も見つからない。

「隠し扉だとも？」

「分かりません……でも、開く気がするんです……」

これだけ見ても分からないんだから、気のせい。そう思いたいの
に思えない。どうしても開くような気がする。

どうにも腑に落ちなくて扉の前を行ったり来たりしていると、不意
に声が聞こえた。

「もっと、左」

驚いて辺りを見回して、部屋の隅にある本棚に目が止まる。

あたしは急いで、その前まで行ってみた。

「ここを……開けるの？」

聞いたけど答えはなくて、代わりに先輩の声が返ってきた。

Episode : 60

「まったく、ついになたまでおかしくなりましたか？ 誰と話しているのです」

「え？ あれ？」

確かに声が聞こえたのだけど、言われてみればこの部屋にはあたとタシユア先輩、それに一緒に来た研究者の男の人だけだ。

なのに声がどこからか告げる。

「その、中」

あたしは言われるままに、本棚の中へ手を差し入れた。指先に触れたスイッチらしきものを、押し込んでみる。

「ほう……」

舞台の緞帳のように、上へと上がっていく壁。身をかがめて、その壁をくぐって……。

——水が満たされた大きな水槽。
まず目に入ったのはそれだった。中に何か大きなものが入ってる。ゆらゆらと揺らめく膜のようなもの。折りたたまれた長い棒のようなもの、曲線を描く肌の色——。

「いやああああっ！」

それが何か気づいた瞬間、思わずあたしは声を上げた。足がすくむ。動けない。

自分の悲鳴が遠くから聞こえる。

水槽の中は、死の世界だった。死んでる。全員。みんなあたしと同じ髪で、同じ肌色で……。

何かとんでもないものがあるのは予想してた。そうじゃなきゃタシユア先輩が、あんなに怒ったりはしない。

でも辿りついた先に、こんなヒドいものがあるなんて思わなかった。

「いったいどうしたのです」

「先輩、あ、あれ……」

後ろから聞こえた声に思わずがりついて、奥を指差す。こんなところ、どうやっても一人なんかじゃ居られない。

「なにをそんなに——！！」

先輩の言葉も途中で止まった。

でも、当たり前だ。こんなものをいきなり見せられて、何も感じないほうがおかしい。

「——なんてことを」

タシユア先輩の、抑揚のない静かな声。声音からは何も聞き取れないけど、ものすごく怒ってそうだ。

そんな先輩にすぎりついて、泣く。それ以外に何もできない。

どこからか声が聞こえた。

こんな嫌、出して、苦しい、助けて……。

言葉以前の、感覚と感情の世界。

たくさんの声が渦巻いて、頭の中がかき回される。自分が細切れになってどこかへ行ってしまうようだ。

Episode : 61

それからどのくらい耐えてただろう？ 聞こえる声がだんだん弱くなってきて、少しずつ落ち着いてくる。もしかすると慣れたのかもしれない。

「——ルーフエア、そろそろ放してもらえますかね」
言われて初めて、先輩にずっとしがみついていたことに気づく。
慌てて手を離すと、先輩から即座に言われた。

「まったく。ショックだったのは分からなくもありませんが、あなたはシュマーのトップですよ？ それが身内の所業にいちいち泣いてどうするのです」

「す、すみません……」

「条件反射で謝っても、意味はありませんよ」

思わず謝ったところで、また叱られる。あたしがとっさに謝るのが、先輩嫌いなのかもしれない。

「やってしまつて謝るくらいなら、謝らずに済むように手を打てと、以前も言っただけですがね。だいいち考えもなしにただ謝っても、また同じことを繰り返すだけですよ」

「すみません……」

今言われたのに、ついまた謝る。

さすがに呆れたんだろう、タシユア先輩がため息をついてから言った。

「あなたの謝り癖がどうしようもないのは理解しましたが、謝ってもあの研究者の行き先は分からないでしょうね」

「え？」

言われたことをもう一度よく考えてみる。

先輩が言ってる研究者は、あのずっと付いてきてる兄さんと同じ名前の人だろう。

それが……。

「いないん……ですか？」

「少なくともこの部屋には」

確かに見回してみても、この部屋にはあたしとタシユア先輩の2人だけだった。

「逃げたん……ですよね？」

「分かりません。そういういことは本人を捕まえてから言うて下さい」

確かにそのとおりだ。

急いで部屋に備え付けられてた通話石を手にする。壊されてるかと思っただけ、調べてみたら大丈夫そうだった。

稼働させて、施設全部に向けて言う。

「この施設に残っている人に命じます。研究者のラヴェルをすぐ捕まえなさい！」

こうやって命じる自分が嫌だった。

あたしが命じてしまったら、絶対に逆らえない。それを分かっててあたしは言ってる。

でももし、本当は嫌がってたなら？

それを考えるとすごく気が重い。

Episode : 62

立っているのも辛くて、近くにあった椅子に座り込む。

「あなたがそうしていても、死者は戻りませんよ」

先輩があたしに言った。

「はい……」

けどあたしは立てなかった。それどころか顔も上げられない。

——あたし、何をしてたんだろ。

知らなかった。ここでこんなことをしてるなんて。

でもあの子たちにしてみたら、知らなかったじゃ済まないだろう。それにもしあたしが知ってたら、止められたと思う。

たぶんあの子たちは、あたしの妹だ。どうしてか分からないけど、見た瞬間そう思った。

頭の中を渦巻いてた声が、まだかすかに聞こえる。言葉にならない感情だけだけど、苦しかったもつと生きたかったと思ってたのは分かる。

けどあの子たちがそんな思いをしてる間、あたしはごく普通に暮らしてて……。

「そんなに後悔するのなら、もっとよく組織を把握しておくことです。防げないのはトップの責任です」

先輩の言葉にあたしはうなずいた。苦しいけど、辛いけど、事実だから。

ただ、どうすればいいのかは全然分からない。

と、扉がノックされる音がして、あたしは思わず顔をあげた。

「何です？」

先輩の問いに、あの守備をしていた人たちが答える。

「グレイス様のご命令どおり、研究者を捕まえました」

あの研究者の人が、両方から羽交い絞めにされて連れてこられた。でもあたしが命令を出してから搜索したにしては、早過ぎだ。

「どうして……こんなに早く？」

「不審な様子でうろついていましたので、念のために捕縛しましてそこへグレイス様の命令が入ったものですから……」

つまり、あの命令を出した時点ではもう捕まえてたらしい。この辺はさすがにシユマーの人間だ。

あたしは彼の目を見ながら訊いた。

「奥の部屋のこと……何か、知ってる？」

研究者の人が視線をそらす。きっと、何か知ってるんだろう。

「知ってるなら言いなさい」

つい声が厳しくなる。

もう何も知らされないのは嫌だった。確かに本当のことを知るの
は辛いけど——何も知らないのはもっと辛いハメになる。

研究者の人は、まだ黙ったままだ。

「どうなの！」

さすがに声が大きくなるのを止められない。

研究者の人がちょっとだけ縮こまって、かすれるような声で答えた。

Episode : 63

「し、知ってました……」

「いつから?! 何のためにあんなことを!」

涙が出てくる。知ってて、あれを許してたなんて。

「答えなさいっ!」

「は、はいっ!」

あたしの言葉に、研究者の人が飛び上がるみたいにして姿勢を正した。

なんかため息が出る。あたしみたいなのに大人が頭を下げたり、なのにこういう研究してることをなんとも思わなかったり、絶対にヘンだ。

「ここの部屋での研究は、いつから?」

詰まりながらの答えが返ってくる。

「ぐ、グレイス様がお生まれになった後からですから…… たぶん10年弱かと……」

「何のために!」

10年っていったら、かなりの時間だ。あたしがいま13歳だから、生まれて割とすぐからやってたことになる。

「そ、それは詳しくは…… ここでこういう研究をしてる、ことしかホントにこの人、考える頭があるんだろうか? いくらなんでも研究してるのに、無関心すぎる。」

タシユア先輩も同じことを思ったみたいで、冷たい声で言った。

「——自分たちが何をしているかも知らないとは、研究者として失格だと思いますがね」

「し、仕方ないじゃないか！ お前に何が分かるんだ！」

痛いところを突かれたみたいで、研究者の人が真っ赤になって叫ぶ。でも先輩は取り合わなかった。

「仕方ないなどと言いつけるような輩のことなど、分かる気などありませんよ」

あたしもそう思う。これは絶対、「仕方ない」なんてことない。先輩も厳しい言葉を続ける。

「あなたが同じことをされて、『仕方ない』と言われても納得できるのでしたら、まだ話は分かりますがね」

この言葉を聞いたら、あの子たちどう言うだろう？ でも反対だけはしないはずだ。

「——それで、なぜ逃げだしたのです？」

不意に先輩が話題を変えた。それでやっとあたしも、最初は何の話だったか思い出す。

もしかすると先輩、あたしが脱線してしまったから横から口をはさんだのかもしれない。

黙ったままの研究者に訊く。

「どこへ行くつもりだったの？ 答えて」

「わ、私の部屋へ……」

意味が分からない。確かに彼の部屋はあるけど、なんで今頃慌ててそこへ戻るんだろう？

Episode : 64

「――部屋？ 部屋に何があるの？」

「そ、その、子供が……」

「子供？」

答えを聞いて余計に分からなくなる。子供が居るのはこの部屋なのに。けど先輩は何か分かったみたいだった。

「ルーフェイア、最初の部屋に行けば分かります」

言って先輩は歩き出す。

あたしも意味が分からなかったけど、とにかく後に続いた。

「グレイス様？ そちらの調査は終わったのですか？」

途中で、ここの警備に呼ばれたって言うシユマーの面々に出会う。

「終わったというか……違うもの、あるみたいなの」

「違うものと言うと、何か調べ忘れましたか？」

「たぶん……」

あたしがよく分かってないから、彼らにもよく通じない。けどそれ以上説明のしようもなかった。

その間に、先輩が行ってしまう。

「あ、先輩！」

慌てて声をかけたけど、先輩は振り返りもしなかった。

「あ、えっと、みんな……ここの調査、お願い。片っぱしから開けて。ダメなら、非常コード使って」

とにかく命令を出して、急いであたしも歩き出す。先輩の行き先

は分かってるけど、あんまり遅れたくない。

長い廊下にはさっき倒した合成獣と、何人かの死体が転がってた。人がいないから、片付ける人もいないんだろう。

——あとで、ちゃんとしないと。

合成獣のほうはともかく、最低でも兵士の方は身元を確認して、遺体を家族に渡さないといけないだろう。

そんなことを思いながら隣を通る。

先輩はすごく早足で、小走りじゃないと追いつけなかった。

「早く！」

連れてきてる研究者の人を急かす。あんまり遅れたらまずい。

「は、はいっ！」

彼が慌てて走り出した。

でもこれじゃ、かなり時間がかかりそうだ。研究ばかりしてるせいで、かなり足が遅い。いくら中年だからって、ちよつと遅過ぎだ。

けどだからと言って、置いてくわけにいかない。だから仕方なく彼のペースに合わせる。

でもどうにか、長いはずの廊下を来たときよりずっと早く抜けた。たどり着いた最初の部屋は、鍵がかかってなかった。扉を開けて中へ入る。

Episode : 65

「……先輩？」

ここにも放置された合成獣の死体。そして乾きだした血だまり。奥には椅子にかけた先輩の姿があった。

「今、開けさせますから」

「急いでいただきたいものですね。こんな場所に時間をかけても、楽しいものではありません」

先輩に切り返される。でも実際、こんなおかしい実験ばかりの地下にいたら気が滅入ると思う。

「すみません……開けて。すぐ」

あたしが言うと、あの研究者の人が部屋の隅へと走って行った。元々彼の部屋だから、全部彼の自由になるはずだ。そして思った通り、すぐ壁が動き出した。

壁の向こうとは思えない意外に広い空間。床を這うパイプや配線。そして、水槽。

「ここにも……」

もう怒る気力もない。

水槽の中にはさっきの部屋と同じように、子供が入れられてた。白い肌。金の髪。たぶんこの子もさっきと同じで……あたしの妹なんだろう。

と、水槽の中の子が目を開けた。

「生きて……る？」

「もちろんです」

いきなり研究者の人が声を上げて、ちょっとだけ心臓がどきつと
する。

「良かった、殺されてしまったかと思った。もしお前に何かあったらどうしようかと……」

研究者の人が水槽に頬ずりした。

——ちよつと見たくないかも。

中に居る子があたしそっくりだから、なんか自分にやられてる感じだ。

「そ、その子……何？」

訊ねる自分の声がちよつと震えてる。でもあんな人に頬ずりされること考えたら、大抵の人は鳥肌が立つんじゃないだろうか？

研究者の人が言いづらそうに口を開いた。

「その、さっき殺されてた子たちの……姉妹で。えーと、ですから、私がこつそり……」

要するにこうで研究してた人達の目を盗んで、ここで育ててたんだらう。

先輩が一步進み出た。

「こつそりだか何だか知りませんが、まともな頭はないようですね
あんまり表情の変わる人じゃないからよく分からないけど、でも
相当怒ってそうだ。」

「そんなにこれが好きと言うなら、あなたが水槽へ入ってはいかが
です？」

辛辣な言葉が次々と飛ぶ

Episode : 66

「な、何を言うんだ。私はちゃんと、この子の面倒を見て……」

「その結果が、観賞魚のように水槽へ入れておくことですか？ ど
こをどう面倒見たらこうなるのか、説明していただきたいですね」

水の中の女の子は、きよとした顔でこっちを見ていた。きつ
と何が起こってるか分からないだろう。

水槽に近づいてみる。魔法で強化されたガラスは、触るとほんの
り温かった。

女の子が透き通った碧い瞳であたしを見る。

——可愛いかも。

水槽の中しか知らないせいか、表情が赤ちゃんみただ。

髪は切ったことがないんだろう、長く伸びて水の中で揺れてる。

肌も日に当たったことがないから、すごく白い。

女の子のお腹には、長いロープみたいなものが着いてた。反対側
は水槽の底の、肉の塊みたいなものに繋がってる。へその緒がまだ
そのままらしい。

たぶんこのへその緒と水槽下に描かれてる魔法陣の力で、この子
は生きてるはずだ。

あっちの方じゃ、先輩と研究者の人がまだ言い合ってた。

「閉じ込めて自由を奪ったままにしておいて、よくもまあ『面倒を
みる』などと。どうせあの子自身がどうしたいかなど、訊いたこと
もないのでしょうね」

「だ、だが！ 出して死んだらどうするんだ！」

その言葉にはっとして、水槽に視線を戻す。本当はこの子、どう思ってるんだろう……。

女の子はさつきとはぜんぜん違って、すごく真剣な顔をしてた。何か言いたそうだ。

「言いたいこと、あるの？」

分かってるかどうか、聞こえてるかどうか分からないけど、訊いてみる。と、女の子が手を伸ばしてきた。

ガラス越しに合わされる、手。

（――でたい）

不意に聞こえた声に、慌てて周りを見回す。

でも誰も居なくて……だいいち聞こえた声は子供みたいで……。

「今の、あなた？ 出たいの？」

尋ねると、またあの声が聞こえた。

（でたい）

間違いない。この子にはちゃんと意思がある。

「あの、先輩」

「何です」

研究者の人とやり合ってる最中に割り込むのはどうかと思ったけど、声をかける。けど先輩の紅い瞳を見たら、言おうとしてた言葉の続きがどこかへ行ってしまった。

「えっと、あの……この子が……」

「その子がどうしたのです？」

もっと何か言われるかと思ったけど、先輩はそれだけだった。そして黙ったままあたしを見る。

Episode : 67

——どうしよう。

何をしたらいいか分からない。それともあたしが話していいんだ
ろうか？

困ってたら先輩は呆れたみたいで、先に口を開いた。

「続きをどうぞ。あなたが何か言わないことには、こちらも分かり
ませんので」

「あ、はい」

続きを話していいみたいだ。

「あの、この子……出たいって。そう言ってます」

「その子がそう思ってるだろうことには異論ありませんが、何故分
かったのです？」

さらに訊かれて口ごもる。声が聞こえたなんておかしな話、どう
言ったらいいんだろう？

でも困って黙ってしまったあたしに、珍しく先輩が助け舟を出し
てくれた。

「どんな言葉でも構いません。まず言ってみなさい。そうしないこ
とには、糸口にもなりませんよ」

「……はい」

確かにそうだ。ずっと黙ったまんまじゃ、きっと先輩も困る。

「ええと、あの、よく分からないんですけど、声が……聞こえて。
それで、この子に『出たいの？』って聞いたら、出たいって……」
自分でも嫌になるほど要領を得ない。

それから思い出して付け加える。

「そついえば……あの、みんな死んでた部屋……あそこ、同じ声……?」

支離滅裂もいいところだ。

「まったく。いくら『どんな言葉でも』と言われたからといって、通じないようでは困りますが」

「すみません……」

やっぱりあたし、説明は苦手だ。ただ先輩のほうは、何となくは把握してくれたみたいだった。

「いずれにせよ、本人の望みですしね。出すべきでしょう——何をぼつつとしているのです」

先輩が研究者の人に視線を向けて言ったけど、たぶん彼、聞いてない。驚いた表情で水槽の中を見る。

「こ、言葉が分かってたのか……」

先輩が冷たく言った。

「普通の子はこの年になれば、かなり上手に話をしますよ。簡単な手伝いだって出来ます。なのに閉じ込めておくなど、虐待以外の何物でもないでしょうに。だから頭が回らないと言ったのです」

それから先輩、今度は水槽のほうへ近づいた。そして見たことないくらい優しい表情と声で、女の子に話しかける。

「そこから出たいのですね?」

次の瞬間、あたしの頭の中にまたあの声が響いた。

Episode : 68

(でたい。でたいの)

間違いない。まっすぐ真剣な瞳でこっちを見てるだけだけど、たしかにこの子は出たがってる。

「先輩、やっぱりこの子……」

言つと先輩は一瞬こっちを見たあと、水槽の前で立ち尽くしてる研究者の人に言った。

「さて、出していたきましようか？ 仮にも研究者のはしくれなら、そのくらいのことは出来るはずですから」

「だ、ダメだ！ 出したら死んでしまう！」

さつきは確か「死んでしまつかも」だったのに、「出すとこの子が死ぬ」に変わったらしい。

「ついさっきまで『かもしれない』だったのが、なぜ『出せない』に変わるのか、理解しかねますね」

先輩もいまは、あたしと同じことを考えたみたいだ。

「だいいち、可愛がっているのでしょうか？ その割に出せないというなら、それは可愛がっているのではなくて、単に思い通りにしたいだけです」

「わ、分かったようなことを言うな！」

先輩の言葉に耐えきれなくて、ついに研究者の人が怒鳴る。
けど先輩、なんとも思ってないみたいだ。

「言つの事欠いて、出てきた言葉がそれですか」

この研究者の人、いつまで無事だろう……なんて、ちょっと考え

る。さつきだつて逆鱗に触れて、殺されかかつてるのに。

それとも、そんなことがあつてもまだ言える精神力のほうを、ほめるべきなんだろうか。

「言つておきますが、専門家はあなたのほうですよ？　それが素人相手に激高するとは、自分のミスを認めたようにしか見えませんがね。専門家だというのなら、我々相手に易しい説明をすればいいでしょう」

先輩の言葉は事実しかないけど、それだけに尖つてて痛い。

「で、この子をいつ出すのです？　早くしていただきたいのですが」
「お、お前の言うことなんか——」

瞬間先輩が短剣に手をかけて、でもほぼ同時にさつきと同じ声が、痛いほどの大きさで響き渡った。

（ダメっ！！）

思わず耳をふさぐ。

しかもいまの声はあたし以外にも聞こえたみたいで、先輩までが顔をちよつとしかめて動きを止めてる。

「……先輩？」

心配になつて聞いてみると、先輩は何もなかったみたいな顔で、でも短剣から手を離れた。

Episode : 69

「あの子に感謝するんですね」

ただ言ってる内容からして、やっぱりあの声はあたし以外にも聞こえたんだろう。

それから先輩、水槽のほうへ向きなおって何か言おうとして、表情が少し変わった。

「この子ですが、熱があるようですか？」

「——え？」

あたしと研究者の人の声が揃う。

先輩がため息をついた。

「瞳が少し充血してるようです。どこか具合が悪いのでは？」

「そ、そんなはずは！」

研究者の人が慌てて魔視鏡へ飛びつく。

「い、いつもと別に何も……胎児期と、体温も変わらないぞ」

「そうですか？ それならいいのですが」

先輩はそう言って納得した見たいけど、何か気になってこの子に訊いてみる。

「どこか、辛くない？」

「……つら、い？」

けど返ってきたのは意味のない、ただのオウム返しだった。「辛い」っていうのが何なのか、よく分かってないらしい。

「ええとだから、どこか痛いとか、苦しいとか……」

「——？」

会話が成り立たなかった。

たぶん、言葉自体を知らないんだろう。ずっとこの水槽の中にいて、話を通じないと思われてたみたいだから、会話する機会がなかったのかもしれない。

「その、えーと、頭とか、手とか動く？」

（あたま……？）

どうも聞きだすのは無理そうだ。

けどそう思った次の瞬間、あたしの身体を激痛が襲った。苦しさとだるさで立つてられなくなって、床に膝をつく。

「ルーフェイア？」

先輩に訊かれたけど、声も出ない。

「ルーフェイア、何をしているのです」

重ねて言われても、首を振るのが精いっぱいだ。

「具合でも？」

「……身体、が……痛っ……」

痛みに振り回されながら、必死に考える。なんで急に、こうなったのか……。

（——いっしょ）

またあの声が聞こえた。

「何が……一緒、なの……？」

必死に言葉を絞り出す。

Episode : 70

(おなじ——いっしょ。いつも)

切れ切れの言葉は、けど言葉じゃないことに、このときようやく気付いた。頭の中に塊のように飛び込んできて、あたしが自分でそれを言葉に翻訳してる、そんな状態だ。

それならと、同じようにしてみる。

「この……痛い、あなたなの……？」

問いかけながら、必死で言葉にイメージを載せる。あたしの身体の痛みを、この子の身体に重ね合わせる。けど全身が痛くて集中できない。

ただそれでも、女の子の表情が変わった。

(おなじ？ わかる？)

「た、たぶん……」

絶対の自信があるわけじゃないけど、この痛みはこの子が、今感じてるものはずだ。

(いたい？ いたい。だして)

そしてここへ来てようやく、あたしは言葉の本当の意味を理解した。

この子は水槽から出して欲しいだけじゃなくて、この痛みからも逃げたがってる。そして水槽の外、違う世界なら痛くないと思ってる。

(いたい、いたい、いたい……)

初めて知った「痛い」という言葉を、この子が繰り返す。

たぶん、ずっとこうだったのだ。だけど訴える方法もなくて、そ

れどころか誰もまともに話しかけてさえくれなくて、ただじっと耐えてたんだろう。

「何とか、する、から……待って」

瞬間この子から「分かった」感じの意志が返ってきて、同時に痛みが消えた。

思わず大きく息をつく。

「一人芝居は終わりましたか？」

「あ、すみません……」

なんだかヒドい目に遭ったうえ、ヒドいことを言われてる気がするけど、うまく言い返せない。

「謝られても困ります。そもそも見ているこちらは、何が起ったのか分かりませんし」

「え、あ、えっと……」

どう説明したらいいんだろう？

「まったく。つい先ほども言いましたよ。まず言ってみないことは、糸口にもならないと」

「あ、はい……」

そうだった。でもなかなか上手い言葉が見つからない。

「その、急に身体が痛くなって……」

「それは聞きました。で、結局何だったのです？」
先輩に先を促される。

Episode : 71

「えっと、痛みは……その子でした」

そう言えば名前を知らないと思いながら、あたしは水槽の中を指さした。

「なんでかは、分からないんですけど……でも、その子が伝える気になると、あたし感じるみたいで……」

まるつきり説明になつてない。テストの小論文でこんなこと書いたら、絶対に追試だ。なのにタシユア先輩は分かっただけ。

「まあたしかに、あなただけは最初から声が聞こえているようでしたしね」

あたしと水槽の中の子を、タシユア先輩が交互に見る。

「要は双子のようなものですし、シユマーには念話が出来る人間も多いようですから、思うにその辺が理由では？」

「あ、はい、たぶん……」

なんか、あたしよりよっぽど詳しく分かってそう。

「で、どんな具合なのです。感じたと言うなら分かるはずですが」先輩、あたしの分かり辛い話に、今日はぜひぶん根気よく付き合ってくれると思った。

もしかすると、単に知りたいだけなのかもだけど。

「えっと、あの、かなり……痛いです」

「痛みが激しいのは見ていましたから分かります。で、どこがどう痛かったのです？」

言われてあたしは考え込んだ。どこって、どこだったろう？

「なんか、全部痛くて……えっと……」

けどあんなに痛かったのに、いまは不思議なくらい思い出せない人は痛みが消えると忘れてしまುತ್ತて聞いたことがあるけど、ホントみたいだ。

「たしか、腕とか足とか首とか……あ、でも頭も……」
説明ひとつまともにできない自分が、情けなくなってくる。

「……お腹はどうでした？」

「あ、いえ、そこはそんなに。どっちかっていうと、筋肉痛とか、関節とかのほうか」

あたしがそこまで言うのと、タシユア先輩が研究者の人——まだ居たんだ——に視線を向けた。

「だ、そうですよ。これで何か分かりましたか？」

言葉を聞いてなるほどと思う。先輩があたしに細かく質問して聞き出したの、症状を育ての親（？）に聞かせるためだったらしい。

話を振られた研究者の人のほうは、すごく青ざめてた。

「もう、あれに罹ってたのか……そんな……」
うわ言みたいに言って、水槽に両手をつく。

「病名が分かるのです？」

けど先輩の問いかけに研究者の人は答えなくて、だからあたしは代わりに答えた。

「たぶん、シユマーが時々罹るやつです」

「何ですそれは」

さすがの先輩も知らなかったんだらう。ちょっとだけ不思議そう
だ。

Episode : 72

「どうやってたら分かってもらえるか、考えながら話し出す。

「えっと、その、シュマーってあんまり病気とかならなくて、あと薬とかも効きづらくて……」

「そのようですね」

何故かもう、先輩はこのことは知ってたらしい。

「で、その体質とこの子の容態に何の関係が？」

「それがなんていうか、その身体を守る機能……時々自分に、向かうらしくて」

「なるほど、暴走ですか」

研究してる人たちからしたら大雑把なんてもんじゃないだろうけど、それで先輩は納得する。あたしに訊いても、これ以上説明できない——確かにそうだけど——と思ってるのかもしれない。

水槽の中に目をやりながら、あたしは続けた。

「最後はシュマーはみんな、これで。でも中には……」

この子の前で、これ以上は言いたくなかった。どうなるかを教えたくない。

「……大体分かりました。それ以上の説明は今不要です」

でも先輩、言いたくない理由を察してくれたみたいだ。それ以上訊かれずに済む。

「だとすると、その場合普通はどういう処置がなされるのです？」

「あたしも、詳しくは……」

それこそ、そこにいる研究者の人の仕事だろう。

「どうすればいいんだ、どうすれば……」

けど当の本人は、水槽の前でぶつぶつ言っただけだ。

「ちょっと、しっかりしなさい！」

「……え？ あ、 그레이스様、失礼しました」

あたしの命令でっていうのが何だかもやもやするけど、でも正気に戻ってくれたらしい。

「この子、助けなきゃ。このままじゃ可哀想」

「あ、はい、そうですね。すぐ手を……あ、でも人手が……」
事が事だけに、さすがに一人じゃやりきれないみたいだ。

「ケンデイクとファクトリーに連絡して、人を呼ぶわ。いい？」

「……はい」

たぶん本当はこの人、他の人呼ばれるの嫌なんじゃないかなと思う。でもあたしが言ったら逆らえるわけがない。

それにあたしも今は、そういう気持ちに構う気はなかった。あの子があんなに辛いのを考えたら、他のことなんて全部棚上げしていいはずだ。

船を降りるとき、ドワルディからもらった通話石を出す。

『——お嬢様、どうなさいましたか？』

すぐに応答があった。

「地下で、子供見つけたの。でもすごく具合が悪くて、誰か人を……」

「ルーフェイア、だいた事実と違いますよ」

横からタシユア先輩に言われて、しまったと思う。確かにこれじ

や、肝心のことが伝わってない。

Episode : 73

「そもそもその言い方では、何のために人が必要なのか分からないでしょうに。正確な報告も出来ないで、よく前線で生きていられたね」

「すみません……」

思わず謝るあたしの耳に、今度はドワルディの声が聞こえた。

『お嬢様？ 大丈夫でございますか？』

「え、あ、うん。えっと、えっと……」

言わなきゃいけないことが多すぎて、何から言えばいいのか分からない。

『お嬢様、どうぞ落ち着いてください』

「う、うん」

とりあえず深呼吸してみる。けど、頭の中はまだごちゃごちゃだ。

「——替わります。一刻を争うというのに、あなたの報告を待っているのはあの子がどうなるか分かりません」

結局タシユア先輩が呆れ顔で替わってくれた。

「……ええ、そうです。子供のほうは、何かの実験台にされたのかと。おおよそ四歳くらいですね」

先輩がてきぱきと伝えていく。

「いえ、水槽の中ですから、発生させてそのままかと。それとシュマー特有の病を発症しているそうです。ですので医師をお願いしたいのですが」

報告ってこうすればいいんだ、と思った。これなら聞いた人も、

何のことだかきつとすぐに分かる。

「——それだと助かります。私たちはこのままここで待機しますが、その間何かすべきことはありませんか？」

あつという間に、話がまとまったみたいだ。

「了解しました、ではそれまで待機で。失礼します」

そこで先輩は話を終わらせる。

「あの……？」

恐る恐る声をかけると、紅い瞳があたしを見た。

「このまま待機だそうです。まあ私たちでは何も出来ませんしね。あと医師はもう、こちらに向かっているとのことでした」

「え？」

今来て欲しいって言ったばかりなのに、もう向かってるって……？

あたしが不思議そうな顔をしてるのに気が付いたらしい。先輩が説明してくれる。

「私たちの乗った船がケンディクを出た段階で、ドワルディ氏は医師の派遣を決めていたそうです」

話を聞いて、さすがだなと思った。ドワルディはいつも手回しがいい。

「感心ばかりしていないで、あなたも少しは見習ったらどうです」「すみません……」

「謝れとは言っていないません。そもそも謝る暇があるくらいなら、覚えるべきでしょう」

「すみま……」

言いかけて、慌てて口をつぐんだ。さすがにこれ以上は繰り返したくない。

先輩はかなり呆れたみたいだけど、そのあとは何も言わなかった。水槽へ近づいて、中の女の子を見てる。

Episode : 74

「そつえば、この子の名前を聞いていませんでしたね。何と云うのです？」

最後の一言はあたしじゃなくて、研究者の人に向けてだ。でも彼は気づかなかったのか、それとも答えたくないのか、ともかく黙ったままだった。

先輩があたしの顔を見る。代わりに聞けっというんだろう。

「——ねえ、この子の名前、教えて」

「名前は……つけてません……」

消え入りそうな声で、この子を育ててた研究者の人が言った。

「やれやれ、やはりそうでしたか。先程から一度も名前を呼ばないので、そんなことだろうとは思っていましたが」

確かによく考えてみるとこの人、名前を呼んでない。だいいち呼んでたら、あたしだって知ってるはずだ。

逆に言つと可愛がつてるようできて、結局はこの子を「モノ扱い」してたつてことになる。

ただ珍しく、先輩はそこで黙った。普段だったらもつといろいろ言つはずなのに、冷たい目で研究者の人を見ているだけだ。

「何を見ているのです。人の顔を見るのは失礼だと、教えたはずですよ」

「す、すみませ……」

謝りかけて、謝つてよかったのか迷う。

先輩は軽くため息をつくと言った。

「子供の前ですからね」

「あ……」

つまりあたしがさつき、途中で言うのをやめたのと同じ理由だ。まだ小さい、しかも病氣の子供に、大人の汚い話を聞かせていいわけがない。

先輩が水槽のガラスに手をつきながら言った。

「名前をつけてあげないといけませんね。ですが、何とつけたものやら……」

と、またあの声が響いた。

（同じ、して）

「同じ？」

思わず訊き返す。

「——また一人芝居ですか？」

「え？ あ、えつと……」

今の声は、先輩には聞こえなかったらしい。

「ええと、えつと……」

あたしを見てる女の子と、先輩。どっちの話を優先したらいいんだろう？

交互に見ながらしばらく悩んで、あたしは女の子のほうを先にした。この子は具合が悪いけど、先輩は別に具合は悪くないから、具合の悪い人のほうが先だろう。

「何を、同じにするの？」

（同じ、いっしょ）

ちよっと前と言っていることが全く同じだ。やっぱりこの子、話しかけてもらってないせいで、あんまり言葉を知らないんだろう。

Episode : 75

水槽に手を当てて中を覗き込む。女の子の深い碧の瞳が綺麗だった。

「ねえ、教えて」

ガラス越しに女の子がまた手を合わせてきて、あたしを見上げた。

（同じ……）

思いが伝わってくる。

けど意味が分かって、逆にあたしは困ってしまった。

「同じ名前は、ダメかも……」

（イヤ。同じ）

「でも……」

どう説得したらいいんだろう？

「名前というのは、あなたの好きな人につけてもらうんですよ」
不意に横から先輩の声がした。

女の子のほうもびっくりした顔で、あたしの隣に立つ先輩を見上げてる。

（つける……？）

「えっと、なんて言えばいいのかな……あげる、かな？ 新しい名前を、あなたにあげるの」

（！）

すごく興味がある、そんな表情。

「つけても……いい？」

（いい！）

上手くその気になってくれたみたいだ。

「えっと、そうしたら何にしよう……アグラナ、ロザムンデ、ヤドウィガ、ブラジエナ、ゼナイド……」

（イヤ）

思いつくままに挙げてみたけど、速攻で拒否される。

（つける、同じ！）

しかもやっぱり、何か通じてないみたいだ。

「けど、同じだと区別がなくなっちゃうし……」

「それ以前に、あなたはどうしてそういう、一般的でない名前ばかり挙げるのです」

この子だけじゃなくて、先輩からもクレームがつく。

「名前というのは、他人から呼んでもらうためのものですよ。珍しいければいいというものではありません」

「あ、すみません……」

あたし、何か勘違いしてたらしい。でも「呼んでもらう」ためのものって、いったいどう選んだらいいんだろう？

女の子のほうは、相変わらずあたしと「同じ」にこだわってた。

これじゃ仮に名前をつけたとしても、この子が嫌がって名前が役に立たなくなりそうだ。

Episode : 76

考え込んでたら、また先輩が横から言ってくれた。

「本人が望んでいるのですから、いつそあなたの名前から一部を取ってはどうぞ?」

「あたしの、名前……?」

言われて初めて気付く。でも赤ちゃんに名前を付けるとき、親や友達や歴史上の人から一部(たまに全部)もらうのは、よくある話だ。

でも、そんなのでホントにいいんだろうか?

見ると女の子が水の中から、期待いっぱい瞳であたしを見上げていた。

——そういえば。

ふと思いついて訊いてみる。

「ねえ、えっと……ラヴェル、さん。あたしのこと、この子の前で言ったこと、ある?」

言ってしまったから、またこれじゃ意味が通じないなと思った。本当にあたし、説明が下手だ。

「グレイス様のことをですか?」

「あ、えっと、今で半分……分かったかも」

あたしのシュマー内での呼び名は、たいてい「ルーフェア」じゃなくて「グレイス」だ。だからこの研究者の人がそう呼ぶのはおかしくない。

「んと、そしたら……あたしのこと、この子に話したこと、ある?」

「直接話したかどうかは覚えていませんが、グレイス様のお名前は
この子の前で口にしています。その、何というか……要するに、妹
です」

さらりとんでもないことに裏がついた気がするけど、今は後回
しだ。

女の子のほうに向きなおる。

「あのね、グレイスじゃ同じだから……グレイシアは、ダメ？ こ
れなら半分、同じだし」

女の子が微笑んだ。何とか気に入ってもらえたみたいだ。

「やっと決まりましたか」

いまさらながら、先輩に決めてもらえば良かったかな、と思う。
あたしどうも決めるの苦手だから、何でも話がなかなか進まない。

「すみません……」

「誰が謝れと言いましたか。そもそもこのやり取り、既に何度もや
っていますよ。学習能力がないのですか？」

怒られる。ホントに先輩の言いかたじゃないけど、これ何度めだ
ろう？

情けなくなつてうつむいてると、また先輩の声が聞こえた。

「睨まないでください。私は事実を言っているだけで、いじめてな
どいませんよ？」

何のことだろうと思って顔を上げると、水槽のそばにいる先輩と、
水の中から先輩を睨んでる女の子が目に入った。

「——分かりましたから。それより、そんなに怒ると身体に障りま
す」

女の子が、あたしのことをかばってくれてるらしい。

「ルーフェア、あなたもいつまでいじけているのです。あなたから、きちんと名を呼んであげなさい」

「あ、はい！」

慌てて居住まいを正す。

Episode:77

「えっと…… 그레이シア、でいいんです…… よね？」

「私に訊いてどうするのです」

確認したつもりが、また怒られた。

—— やっぱりあたし、ダメだな。

だんだん落ち込んでくる。 タシユア先輩は何でも見ただけで分かる人だけど、あたしは戦闘以外は、いつも考えても答えが出せない。

「……ですから、いじめていないと言っているでしょう？」

あたしの隣で、また先輩が水槽の中に話しかけた。 女の子が怒った表情をしてるから、またかばってくれてるのかもしれない。

なぜか気持があったかくなって、女の子について話しかけた。

「 그레이シア、ありがとう」

瞬間、女の子の表情が明るくなる。

（—— 名前。 同じ）

「うん。 だいたい同じ」

女の子—— じゃなくて 그레이シアの嬉しそうな顔に、あたしもつられて笑顔になった。

「…… 恩寵、でしたかね」

先輩が隣でつぶやく。

「そう、なんですか？」

「ええ、記憶違いでなければ。 あなたのグレイスもそうですが、古い言葉でそんな意味があったはずです」

言いながら先輩が、 그레이シアの頭でも撫でるみたいに、ガラスに手を滑らせた。

「名前には力がありますからね。悪くないかと」

驚いて先輩の横顔を見上げる。もしかして、褒められたんだろうか？

「――何を见ているのです」

「あ、えっと、すみません……」

思わずまた謝ったけど、先輩は何も言わなかった。あたしに何か言っと 그레이シアが怒るから、黙ってるんだろう。

ただ 그레이シアのほうは、今はあんまり話に興味がなさそうだ。時々目をつぶってしまったりして、なんだか眠そうに見える。

「 그레이シア、疲れた？」

（……つかれた？）

また言葉が通じない。本当にこの子、許せないほど「物扱い」されてたのが分かる。

「ええと……痛くない？」

（ない。いたい）

なんだかよく分からない。

ただ表情を見ると、今はそんなに痛くなさそうだった。たぶんあの痛み、ある程度波があるんだろう。

Episode: 78

「身体、ホントに大丈夫？」

（だいじょうぶ？）

グレイシアは知ってる言葉が少ないから、オウム返しばかりだ。いつかこの子と、いろいろ話せる日がくるんだろうか？ そんなことを考えながら、グレイシアにも分かりそうな言葉を探す。

「ええとね、寝られるんなら、寝たほうがいいかと思う」

（寝る……寝る！）

この言葉は知ってたらしい。きちんと意味をとらえた上で、的確な反応をしてる。

「うん、寝たほうが……いいと、思う。寝られるなら、だけど」

（寝る。好き。痛い、ない）

要するに、寝てる間は痛みを感じないで済む、と言いたいんだろう。

「用ができれば、起こすから。寝ててね」

（寝る）

言うなりグレイシアは目をつぶって、そのまま何にも反応しなくなっただ。

「眠ったようですね」

「はい」

風邪と違って、寝て解決するような事柄じゃない。でもそれだつて、痛くて眠れないよりはいいはずだ。

あとは出来たら、病気が治ってほしいのだけど……。

ただこっちは望み薄だった。

シュマーはなにしろみんなでかかるから、この病気の研究は進んでる。けどそこまでで、それ以上はどうすることもできなかった。水槽の中を見ながら、壁際に座り込む。グレイシアだけじゃなくて、あたしもだいぶ眠かった。

あくびがひとつ、出る。

「眠いのですか？」

「あ、はい、すみません」

不意に訊かれて慌てて答えたけど、自分でも何を言ってるのかよく分からなかった。

「——だから何度言えば、謝る必要がないのを覚えるのでしょうか？」

「すみません……」

とっさに謝ってしまって、慌てて口元を押さえる。ホントにあたし進歩がない。

「まったく。そもそもそれほどまでに眠いのだしたら、あなたも寝てはどうです」

「え？ いいん……ですか？」

そこまでは考えなかった。

「かまいませんよ。別に今、最前線で戦闘というわけでもありませんし」

先輩の答えを訊いて、少し寝ようかなと思った。なんだか色々なことがありすぎて、頭がこんがらかってるし身体もやけに疲れてる。

「そしたら、すみません、何かあったら……」

「あなたに心配してもらわなければならぬほど、落ちぶれてはい

ませんよ」

先輩の声を聞きながら、あたしは目を閉じた。

Episode: 79

Sylpha

ため息をついて、私は教科書から顔を上げた。

——タシユアが居れば、良かったんだが。

だが生憎彼は不在だ。たしか一昨日は居たと思ったのだが、いつの間にか居なくなってしまった。

何かの任務かとも思ったのだが、どうも違うらしい。

細かい内容までは教えてもらえないものの、任務なら学院に訊けばそう教えてくれる。だが今回は外泊届だけらしい——それもかなりいい加減——ということだから、私的な用事だろう。

辺りを見回す。

図書館の中は、普段とは違って大勢の生徒が行き交っていた。テスト前だからだろう。

だいいち私も、しょっちゅう図書館で本を借りたりしない。タシユアがここに居るので良く来るが、正直本よりは身体を動かすほうが好きだった。

一つ息を吐いて、また教科書へ視線を落とす。苦手な歴史だが、テストとあつてはやらないわけに行かない。

と、教科書に影が落ちた。

「先輩」

「——イマドか」

答えながら視線を上へ戻す。ダークティープロンドに琥珀色の瞳の男子が、ぞんざいな調子で立っていた。

「タシユア先輩、居ないですよね？」

「居ないが……どうかしたのか？」

ただ彼の表情は、何か困ったというようではなかった。ちょっと気になって確認しに来た、そんなふうだ。

私のそんな思いを、彼が裏付ける。

「いや、ルーフェイアのヤツもいねえんで。だから、一緒になって」「そうかもしれないな」

「ん？ なになに？ シルフアの彼氏、浮気？」

唐突に友人が湧いて出た。同じAクラスのディオンヌだ。

「……どうしてそういう話になる」

「え、だって、年下の男子と一緒に居るから」

ディオンヌ初めどうも私の友人は、こういう方向へ話が転がることが多い。

「去年の夏なんてほら、金髪美人と浮気して別れたとかまで、話出たしさ」

「だからあれは違うと……」

何となく疲れを覚えながら否定すると、彼女があははと笑った。

「分かってる。ちゃんとあとから話訊いたし。で、今度はこれが新しい彼氏？」

「だから、これも違う……」

なんでこの話題から離れないのか。

Episode : 80

だがディオヌのほうは、私の受け答えが面白かったようだ。声を上げて笑いながら「やだもう」とかなんとかと言っている。

「――何が嫌なんだ」

「そこで怒らない。というか、あたしだって知ってるってば。あのルーフェイアの彼氏でしょ」

どうやら分かっている、私のことをからかったらしい。

見ればイマドのほうは、まんざらでもなさそうだった。ちゃんと自分がルーフェイアの相手だと認識されているのは、彼としては悪くないらしい。

――まあ、そうだろうな。

ルーフェイアがどこまで分かっているかは怪しいが、少なくともこの二人、傍から見ると限りでは「ふつうの友達」のラインは超えている。

その先がルーフェイアに分かるかどうか定かではないが、いずれにせよそのうちそういう関係になるだろう。

「で、カップルの片割れ同士が何の話してたの？ 浮気の相談？」

「違うと言ってるじゃないか……」

また話題が元に戻る。どうして女子は、こういう話が好きなのだろうか？

ディオヌのほうは、私の答えがよほど面白いらしい。「また真に受けてー」と言いながら笑い転げている。

ひとしきり笑ってから、ディオヌが真顔になって訊いてきた。

「で、実際のところ、2人で何の相談してたの？」

「相談、ってほどでもないんですけどね」

答えたのはイマドだ。

「うんうん、それで？」

イマドがちらりと私を見た。このまま自分が話し続けていいのか、確認したかったのだろう。

私が頷くと、彼は話し始めた。

「まあ実際、ンな大した話じゃないですよ。ルーフェイアが急に居なくなっただけ、もしかしたらタシユア先輩と一緒に、って」

「え、それ大事件じゃない！」

訊いたディオンのほうが血相を変える。

「まだルーフェイアって、傭兵隊じゃないでしょ？　なのに居なくなっちゃったら、ヘタすれば退学よ」

「あー、許可は取ってるっぽいんです。俺も学院に聞いたけど、『急用で何日か出かけた』って聞いたんで」

ずいぶんと学院側もいい加減だ。

同じことをディオンも思ったらしい。

「ちょっとそれ、学院っては何やってんの？　下級生が外泊するのに、そんないい加減な……」

「んー、でもアイツ、たまーにそゆことあるんで。つかあいつの場合、家がややこしいし」

ルーフェイアの秘密にかかわることを、あっさりとイマドが口にする。

「家がややこしい？」

案の定ディオヌが反応したが、イマドは平然としていた。

「です。あいつの家マジややこしくて。でもほら、たまにこの学院、そゆヤツいますし」

「あー、たしかに。シェリーもそうだった」

シェリーというのは、私の友人で同級生だ。

彼女は聞いた話では、本来は貴族だという。そのせいで素性や家系、それに要人との関係がそれなりにややこしかった。

それをディオヌも知っているため、納得してしまったのだろう。

同時に内心舌を巻く。タシユアもよく人の思い込みや誤解を利用して自分に有利な状況を作るが、イマドもそれに引けを取らない。将来が心配になるほどだ。

まあ裏表がなく素直なルーフェイアと一緒にのことを思うと、このほうがいいのだろうが……。

「まあなんかよく分かんないけど、退学はなさそうだから、ちょっとほっとしたかも」

「すいません、何か心配させて」

ソツなくイマドが謝った。この辺も彼は立ち回りがうまい。

「あーいいのいいの、あたしが勝手に心配したんだし。にしても、何の用で？」

「それが、俺も訊いてなくて」

彼の答えを訊いて、ディオヌが問いかけるような視線を私へ向

けた。

「すまない、私も……訊いてない」

「あらま」

彼女があからさまに、期待はずれと言いたそうな表情をする。

「まったく2人とも、自分の彼女と彼氏のことなのに知らないの？」
思わぬところを突っ込まれて、イマドとつい顔を見合わせた。

「そう言われても、タシユアはよく1人でどこかへ行くし……」

「あいつの家のワケありの話で、しかも急ぎとか言ったら、俺にだって事後報告ですよ？」

2人でそれぞれ言い返すと、ディオヌはちょっと納得がいかなそうながらも頷いた。

「まあ言われてみればそうか。けど、ふつつ心配くらいしない？」

『心配？』

イマドと私の声が揃う。

だがディオヌのほうが更に驚いたらしい。目を丸くしてまさに「啞然」という表情だ。

「ちよっともう！ お互いの彼氏と彼女がツルんで出かけたなら、なんていうかホラ、そーゆーの心配じゃない。一応男と女なんだし」
「タシユアは女子、それも年下には興味がないからな……」

「あー、ルーフェイアのヤツ、そーゆーのどっかに落としてますし」
またそれぞれに言うと、ディオヌががっくりと肩を落とす。どうもまた何かを期待していたらしい。

Episode : 82

「どーゆー彼氏と彼女よ。というか、あんたたちも絶対おかしい」
「——そうか？」

どうも話がかみ合わない。

ディオヌのほうは更にヒートアップした。

「だ、か、ら！ 自分の彼氏と彼女がペアで出かけて！ それだつて十分どうかしてるのに、残った双方が仲良く雑談っておかしいってば！」

「そう言われても……そもそも後輩だぞ？」

「まあたしかに、スタイルは先輩のほうがいいですけど。ルーフエアのヤツ幼児体型だし」

今度はイマドと話の方向が合わなかったようだ。ディオヌが勝ち誇ったような声を上げる。

「ほら！ だからこーゆーのはまずいのよ、うん」

「だからなんでそういう話になる……」

「いや、そゆ趣味ないですから。つか俺、ヘタなことして死にたくないです」

聞こえた言葉にちよつとムツとする。

「なんだそれは。第一タシユアは、そういうことはしないぞ」

「あれ、そなんです？」

だんだん何の話か分からなくなってきた。

だいいち私は、こういうとりとめのない会話は苦手だ。途中でたいてい付いていけなくなる。

まあ今は相手がディオヌとイマドで、どちらも私のさういうと

ころを分かってきているから、何とかなっているが……。
そこへ大声が響いた。

「ディオソヌーっ！ ケーキ食べに行く約束はーっ!?」

図書館中の生徒の目が、一斉に入口へと集まる。

「ちょっとヴィル、うるさい！ ここ図書館！」

「そゆディオソヌもうるさいー」

声の主は、これも私と同級生のヴィルシアだ。Aクラスの子は少ないせいもあって、私も含めこの辺のメンバーはよく一緒に行動している。

「ねえ早く行こう！ おじいちゃんの新作ケーキ食べるんでしょ、なくなっちゃうよ！」

ケーキと聞いて、ディオソヌがはっとした顔になった。

「いつけない、忘れてた。食べさせてもらう約束してたんだっけ」

「早く行ったほうがいいんじゃないか？ 他の生徒に知れたらなくなるぞ」

言いながら、もう無くなってるんじゃないかという気もした。ヴィルシアがあれだけ大声で言ったのだ。居合わせた生徒全員の耳に入っているのは間違いない。

実際、大急ぎで図書館を出ていく生徒も居た。きつと向かいの食堂へ行くのだろう。

「ああもう、ヴィルの馬鹿。なんであんな大声で言うかな」

「まあ、ヴィルだからな……」

何しろ彼女ときたら、偵察でさえ関の声を上げて敵に突撃したがっつては止められるという肉弾派だ。

Episode : 83

「ねえディオヌ、ほんとどーするの！」

「ったくもう……」

ヴィルの大声に、ディオヌが「処置なし」という顔になる。

「ともかく行ってくる！ 食べはぐったら、ヴィルのこととっちめなくちゃ」

ディオヌが駆け出して途中でヴィルを拾い、図書館を飛び出していった。

「何です、あれ」

「何ですと言われても……まあ、友達だな
他に言いようがない。

イマドのほうは呆れ顔だ。

「女子ってマジ分かんねえ」

「そう言うな、あれでも一応先輩だぞ」

我ながらひどいことを言っている気はするが、あの言動の後では「敬え」とはとても言えなかった。

何より私自身が、そうされるのは苦手だ。

「それで、ルーフェイアも居ないんだな？」

話題を元に戻す。

「ええ。一応ケンディクの執事さんにも訊きましたけど、教えてく
んないんですよ」

内容が内容だけにイマドが声をひそめて、私もつられて小声で返した。

「教えてくれない？ それは……何かあるんじゃないか？」
「です。大抵のことなら、俺に教えてくれますし」

ルーフェイアの家が普通と違うのは私も知っているが、だからと言ってそんなに秘密主義ではない。私も屋敷に上がり込んだことがあるが、誰もがみんな気さくだった。

それが教えてくれないというのだから、かなり面倒なことなのだろう。

「だが、なぜタシユアと？」

「俺もその辺は……ただ一緒に連絡船乗るの見たヤツがいるんで、そうかなって。つてもたまたまタイミングが合っちゃっただけで、なんもカンケーねえかもですし」

どうやらイマドも、何か確証があるわけではないらしい。

思い返す。

タシユアとを最後に見たのは一昨日だ。昼食で一緒になった。

「そっいえば……」

いつもと変わらない素振りだったが、あの時タシユアは、何かを押し殺しているようだった。たぶんあの感じは、何かに怒っていたのだと思う。

それをイマドに言うと、彼も何かに思い当ったようだった。

「もしかしてタシユア先輩、なんかヤバイもん見つけたんじゃない？」
「あり得るな……」

授業も単位も気にしないタシユアだ。それがどうしても許せないものとなれば、即座に動く可能性はある。

——それが何なのかは、見当もつかないが。

基本的に冷静沈着で下調べを怠らず、しかも意外と面倒くさがりのタシユアがすぐに動くことなど、私でも思い当たらない。
ただそれでももう一つ、謎が残る。

Episode : 84

「まあタシユアが何か思うところがあつたとして、なんでルーフエ
イアと行くんだ……？」

「んー、その辺は。さつきも言いましたけど、一緒って決まったわ
けじゃないですし」

イマドがまた同じことを口にする。

ただ私は、タシユアとルーフエアと一緒に居る気がした。

一般にどう思われているかは知らないが、タシユアはあれでけっ
こう出不精だ。用がなければケンデイクにさえ行かない。ましてや
任務以外で、私にも何も言わずに一人で泊まりがけで出かけるなど、
知る限りでは一度だけだった。

そしてこの辺はルーフエアもよく似ている。

戦闘以外ではオタオタしてばかりの彼女は、そもそも一人で出歩
いたりしない。そういう行動力は持たない子だ。しかもあの美少女
ぶりで、それなのに危険を理解していないから、周りも一人で行か
せたりしなかった。

その彼女が一人で泊まりがけというのは、なんとも解せない。

2人で連絡船に乗っていたという話からしても、一緒に行動して
いる率が高そうだった。

「何か……あつたんだろうか？」

「あつたと思います。っても、危険はねーな、あの組み合わせじゃ
私もそれには同意だった。タシユアとルーフエアのペアでは、
危険なことを探すほうが難しい。」

「……ルーフェアが泣かされてないと、いいんだが」
「ですね……」

一番心配なのは、むしろここだ。いじめ癖のあるタシユアはルーフェアが泣くのが面白くて、わざと追い込んで泣かせて楽しんでいる。

その意味では最悪の組み合わせだ。誰も止めたり慰めたりする人が居ないから、ヘタをするとルーフェアが泣いたまま、タシユアが飽きて放置しかねない。

まあさすがのタシユアも、あからさまに危険な状態で後輩を放りだしたりはしないだろうが……。

「帰ってくる予定は、分からないんだっただな？」

「未定っぽいです。なんせルーフェア、学院にメチャクチャいい加減な申請出てますし」

「そうか……」

何事もきつちりしているルーフェアがこれでは、タシユアのほうなどもっといい加減だろう。

どちらにしても、今は待つしかなさそうだ。

「……クッキーでも焼くか」

タシユアのことだ、帰ってくればまた食べたがるはずだ。

「あーんじゃ俺も、アイツになんか作つとくかな」

2人で顔を見合わせて、思わず苦笑した。

「そうしたらイマド、私にも教えてくれないか？ 作れたら楽しそうだ」

「俺もケーキとかあんま得意じゃないんで、教えてもらえませんか？」

今度は苦笑を通り越して2人で笑う。

「調理室へ行こう」

「テスト勉強、いいんです？」

「それを言ったらイマドもだろう？ 行くぞ」

面白いような調子で言う後輩に言い返して、私は立ちあがった。

Episode : 85

Tasha side

遠くにかすかな足音を感じて、タシユアは目を覚ました。

時計を見ると、もう真夜中だ。仮眠のつもりだったが、何も起こらなかったために思いのほか長く寝ていたらしい。

隣を見ると、ルーフェイアが背中を丸め、膝を抱えて眠り込んでいた。

（よく身体が痛くなりませんね）

自分も似たような格好で寝てはいたが、あそこまで丸くなれない。

様子をうかがったが、起きる気配はなかった。事実危険というわけではないから、寝ていて問題はない。

（ですが、足音がするのですがねえ）

すぐにどうこうというわけではないが、状況が変わるというのはつまり「何かが起こる」ということだ。警戒しておいて損はない。

だが少し考えて思い直す。ここはシュマーの施設で、ルーフェイアにしてみればいわば庭のようなものだ。足音の主もシュマーの誰かだろう。

だとすればルーフェイアにとっては、まったく危険がない。何しろ今まで見た限りでは、シュマーの面々は彼女に絶対服従だ。刃向かう人間などまず居ないだろう。

つまり、起きるわけもなかった。

（まあ、寝ていたほうが静かですか）

足音の主が近づいてくれば、ルーフェイアは放っておいても目を

覚ますだろう。それに起こしたらまた、何やかやと相手をする羽目になる。

それは少々面倒だった。こういうややこしい事態の中では、寝た子は起こさないに限る。

水槽の中のグレイシアも、まだ眠ったままだ。

（こちら起こさないほうがいいでしょうね……）

ルーフェイアと違ってこの子の場合、起こす起こさないはもっと切実な問題だ。

病気だというこの子は起きれば時として痛みに襲われ、少ない体力を更に削ることになる。ならば出来るだけ長く寝かせて、体力の温存を図るほうがいいだろう。

例の研究者も、向こうの机に突っ伏して眠っていた。魔視鏡が点きっぱなしのところから見て、調べ物の最中に眠ってしまったのようだ。

足音を伴った気配は、更に近づいてきた。

（——多いですね）

複数だとは思っていたが、どうやら10人以上居そうだった。手近に居た医師が総動員されているらしい。

さすがに無視できなくなったのだろう、ルーフェイアが目覚ましました。

「あ、えっと先輩、おはよう………ごきますか？」

首をかしげながら挨拶した後輩に返す。

「おはようございます。ですが今は夜中ですね」

「え？ あれ？」

地下に居るために時間が分からなくなったのだろう。ルーフェイ

アが驚いたように周りを見回している。

Episode : 86

「時間くらい把握出来なくては、前線では命がいくつあっても足りませんよ。それにここは地下ですから、外を見ようとしても無駄です。自分の居る場所も忘れたのですか？」

「す、すみません……」

完全に癖になっているのだろう、またルーフェイアが謝る。

（進歩のないこと）

そう思いながら、突っ込んで泣かせようとしたときだった。

（ダメっ！！）

殴りつけるような勢いで、カン高い声が頭に突き刺さる。

見れば水槽の中、 그레이シアが目を覚ましていた。こちらを睨んでいる。

「 그레이シア、私は事実を言っただけですよ？」

（ダメ！）

どうやら理由に関係なく、ルーフェイアをいじめるなということらしい。

「……分かりました、言いません。ですから、怒るのはおやめなさい。身体に障ります」

病身の子に怒りは禁物だ。それだけで体力が削られて、病状が悪化しかねない。

ルーフェイアをおもちゃに出来ないのは面白くないが、 그레이シアの容体と引き換えには出来なかった。それに詰まる所、 그레이シアの前でやらなければいいだけのことだ。

そうしている間にも気配と足音は近付いて、扉の前へと来たが、通り過ぎる。

「やれやれ……どこまで探しに行く気なのやら。ルーフェイア、行きますよ」

「あ、はい」

普段なら放っておくところだが、今は一刻を争う。不本意だが彼らを呼びとめて、ここへ連れてくるしかないだろう。ルーフェイアを伴って廊下へと出る。

「おや、一応急いでいるのですか」

足音からして速足だとは思っていたが、一行の姿はだいぶ遠ざかっていた。

ルーフェイアが少し大きく息を吸って、声を上げる。

「止まって！」

高く澄んだ声は良く響いて、廊下に幾重にもこだました。

一行が立ち止まって振り向く。

「申し訳ありません、グレイス様。今すぐそちらへ！」

大の大人が何人も、転がるようにして走りだした。

（まったく、いい大人が何をしているのやら）

いつ見てもこの光景は理解不能だ。ルーフェイアが何をしたいかわけでもないのに、シュマーの面々は平伏する。

かつての王侯貴族もそうだったが、そこまでかしくかれるのに対し、どれほどの物を相手に返しているのか。

Episode : 87

——もつともこの辺は、大人のほうに問題があるのだろうか。

何も知らぬままそういう立場に置かれてしまった子供自身には、正直同情を覚える。何しろ本人が選んだわけではないのだ。

ただある程度の年になってなお何も気づかない場合は、やはり問題だろう。

ルーフェイアの場合は当人は分かっているようだ。

だが周りが強要しているうえ、ルーフェイア自身もシユマーから出る気はなさそうなことを思うと、やはりそろそろ持てる「責任」を考えるべきだろう。

とはいえ最終的にはどうでもいい話だった。自分がシユマーの生まれ——考えたくもない——ならともかく、タシユアは本来シユマーとは関係がないのだ。

一行が目の前へ来る。

「申し訳ありませんでした、 그레이ス様」

「それはいいから……」

ルーフェイアも嫌がっているのだからやめればいいものを、相変わらずまずは無駄なやり取りだ。

と、一行の一番後ろ——先ほどまでは先頭だったのだろう——から、青年が進み出た。

「 그레이ス、発見された子と言うのはどこだい？」

「ふぁ、ファールゾン?!」

何故か彼女が悲鳴に近い声をあげる。

「どうして、ここに」

「どうしてって言われても、呼ばれたから来たんだが。君が呼んだんだろう？」

青年は金髪碧眼で、ルーフェイアによく似ている。他の者と違いルーフェイアにぞんざいな口調で話しかけていることからしても、恐らくは総領家なのだろう。

ルーフェイアは妙に及び腰だった。どうもこの青年もカレアナ辺りに似て、かなりクセがありそうだ。

「べ、別にあなたを呼んだわけじゃ……」

「ケンデイクに居る医師全員って言ったら、僕も入るに決まってるじゃないか」

「あなた常勤じゃないでしょう」
「なにやら揉めている。」

「——再会を喜ぶのは分かりますが、自己紹介くらいは欲しいものです。それに発見された子のことを考えると、こんなところで時間を潰す余裕はないはずですが？」

呆れて口を挟むと、さらに斜め上の返答が来た。

「誰だい、君は」

「ファールゾンっ！」

慌てるルーフェイアに少々感心——シュマーの割に人並みの感覚がこの子にはあるらしい——しながら、タシユアは言い返した。

「自分は名乗りもしないくせに他人に名前を問うとは、一体どのような教育を受けたのでしょうかね」

「す、すみませんっ！」

何故かルーフェイアが頭を下げる。

Episode : 88

「ルーフェイア、あなたが謝っても意味がありませんよ」

「グレイス、何で君が謝るんだ」

腹の立つことに、こんな相手とおかしなところで意見が一致した。間に挟まったルーフェイアが、おろおろしながらも言い訳する。

「あの、すみません先輩、彼、研究以外はダメで……ファールゾン、あなたもちゃんと挨拶して！」

「大の大人が子供に窘められるとは、シュマーは幼児の集団ですか？」

この言葉にさらに平謝りするルーフェイアへ、ファールゾンとかいう研究者がありえない一言を放った。

「グレイス、君、この男に何か弱みでも握られてるのか？」

「そんなわけではないでしょう！」

やり取りを聞いているだけで疲れてくる。

「ともかくいいから挨拶して！ 初対面の人には挨拶でしょ！」

「ああそうか」

冗談なのか本気なのか、青年は納得したように頷くと、タシユアのほうへ向き直った。

「ファールゾン」ゼニアだ。よろしく。専門は生体情報学だけど、医者もやってる。あと魔法物理学と魔力干渉力学と真音分析学と――

――

「タシユア」リュウローンです」

長々と続きそうな自己紹介を遮る。普段ならこんな礼を失した真

似はけしてしないが、今は聞いていられる余裕がなかった。
聞く気がしなかった、というのも多少はあるが。

「発見された子は、話では既に発病しているそうです。早く診てやつて欲しいのですが」

「あ、そうだったな」

「ずかずかとファールゾンが部屋へ入っていく。この青年、早い話がまったく時と場所をわきまえない性格なのだろう。」

「やれやれと思いつつ後に続くと、水槽の前へたどり着く前に騒ぎが起こった。」

「なんだ、誰の仕業かと思ったらラヴェルか。どうりで発病させるような馬鹿な真似をすると思った」

「なんだと——！」

「どうやらこの二人、面識があつたらしい。しかも関係はあまり良好と言えないようだ。」

——良好でも困るが。

「幼子をこんな目に遭わせて平然としていられる神経の持ち主が、これ以上居てはたまらない。」

「言い合いはまだ続いていた。」

「だってそうじゃないか。シュマーはただでさえ発生時の問題が多いのに、まったく対処しなかったからこういうことになってるんだろう？ 羊水槽での発生なら手順を踏むのは常識なのに、そんな初歩の初歩も忘れるのはあんたくらいだ」

「いいのか悪いのかこのファールゾンという男、年上のはずの相手に対して全くと臆したところがない。言いたい放題だ。」

Episode : 89

「お、お前みたいな若造に何が分かると言うんだ!」

「研究に経験が必要って言うなら、年行ったアンタがこんな初步的ミスはしないだろう? 要は資質の問題だと思っただが」

面白いことにルーフェイアのほうは、この言い合いに無関心だった。取り立てて止めようとせず、ただ成り行きを見ている。シューマーの中のことから放置しているのか、それともファールゾンの言い分に多少なりとも同意なのか。

正直なことを言うと言計なことでは謝るよりも、こういう無駄な言い合いを止めて欲しいのだが……。

「いい加減にしてください」

見かねて止めに入る。

「病人を診るのが先でしょうに。まあこんな人道無視の研究をするシューマーでは、治すより先に研究結果の討論なのかもしれませんが」
そして後を向いて付け加えた。

「ルーフェイア、あなたもあなたです。ムダに謝るより、こういう不毛なやり取りをやめさせたらどうなのです」

「え? あ、すみません……」

言ったそばから彼女が謝る。

「ですから」

「あ、すみま……じゃなくて、えーとファールゾン、ラヴェル……さん、グレイシアを」

が、また横槍が入った。

「グレイシア？ 誰だいそれは？ それにグレイス、こんなヤツに『さん』付けなんて必要ないぞ。無能なくせに叔父上と同じ名前だなんて、ずうずうしすぎる」

「お願い、少し黙って……」

さすがに疲れたのだろう、ルーフェイアが懇願する。だがファールゾンという男、答えた様子はなかった。

「黙るも何も、本当のことを言っただけじゃないか」

なおもごちゃごちゃと言いつける彼に業を煮やしたのか、すつとルーフェイアの雰囲気が変わる。

「——黙りなさい、ファールゾン。死にたいの？」

いつもとは似ても似つかぬ、傲然とした表情と態度。権力者の顔となったルーフェイアは、母カレアナや姉のサリーアを思わせた。

（なるほど、これが『シユマーのグレイス』ですか）

もつとも、これが常態というわけではないだろう。それなら先ほどのような不毛なやり取りを続けさせ、あちこちで下手に出たりはしないはずだ。

基本的な性格は大人しく引つ込み思案だが、あまりにシユマーの連中が度が過ぎるとこういう態度に出る、という程度らしい。

どちらにしても、これならこちらが言えばルーフェイアは連中を押さえ込むだろう。好都合だ。

ファールゾンのほうは驚いたことに、青ざめてその口を閉じていた。ルーフェイアの恫喝は、シユマーの中では洒落で済まないようだ。

Episode : 90

（まあ、だからこそしないのでしょうか）

呆れるほど甘いルーフェアのことだ。相手が悪辣なことをしている身内でも、極力強制せずに話し合いで、などと考えているに違いない。

罪人の尊重より、被害者の一刻も早い救済が優先のはずなのだが……。

「ともかく、グレイシアを治療して。言い合いは許さないわ。必要なものがあつたら言いなさい、何とかする」
ルーフェアがきっぱりと言い切る。

「ラヴェル、資料を全て出して。ファールゾン、治療の指揮を。他の方は助手を」
やっと事態が動き出した。

「——それだけ出来るのでしたら、最初からやってほしかったですね」

「すみません……」

何か少し変わったかとも思ったが、見込み違いだったようだ。いつもと同じ謝り癖が発動する。

だがタシユアが言葉を発する前に、また騒ぎが起こった。

「なんだこの資料は。穴だらけじゃないか。生体情報の188番は調べてないのか？」

「そこは一般と同じだ」

「同じかどうか分からないだろう。188番は2-6-3の縦構造が危ないんだ。そこを見なきゃ同じだなんて言えるか」

専門用語が飛び交っている。

「すぐに出してくれ、側面図と俯瞰両方だ」

「そ、それは……」

どうやら不備があったらしい。

「ないのか？ まったく、話にならないな。誰か、すぐ取るから準備してくれ。あとお前、このオリジナルはグレイスだろう？ その詳細図は？」

「それならこれだ」

魔視鏡が操作され、魔法陣のような複雑な図が映し出される。おそらく生体情報だろう。

だがファールゾンは気に入らなかったようだ。

「たったこれだけか？ これじゃ立体構造が分からないじゃないか。まさか、平面図だけで考えてたんじゃないだろうな」

ただこうして見ていると、能力的にはファールゾンのほうが上のようだ。彼が穴を見つけ、例の研究者が指摘されてはオロオロするという図が繰り返されている。

「まったく……こんな基礎も知らずに発生させたのか。問題が出て当たり前だろう」

「き、基礎じゃないだろう！ こんなもの論文のどこにも！」

「当たり前だ、僕が見つけたんだから。けどこんなの、基礎を学べば自然に分かる程度だろう？ それとも分からなかったのか？」

やはりこのファールゾンという男、性格にかなりの難がある。優秀なのは確かだが、他者との乖離も分かっているなければ、必要なことを伝えるということも出来ていない。

Episode : 91

（まあ、ルーフェアが逃げて回るくらいですからね……）
ルーフェアがあからさまに避けて回る人物というのは、意外だがそう多くない。それどころか、すぐに懐いてしまつて危険なくらいだ。

だいいちあのカレアナにも何だかんだ言いながら懐いているようだし、ミルドレッドとは仲が良いと言つていいほどだ。

そんな彼女が嫌がるのだから、ファールゾンというのは相当の問題があると見ていい。

それでも状況は少しずつ進んでいるようで、だんだん白衣の男たちの動きが慌しくなつていった。

「くっそ、これじゃ……どこから手を付けりゃいいんだ」
ファールゾンが珍しく毒づく。

「どう……したの？」

「どうしたもこうしたもない。必要な措置が最初からされてない上に、状態もあまりよくない。しかも羊水槽の中だから、必要な治療が出来ないんだ」

だがピンと来なかったのだろう。ルーフェアが首を傾げる。

「ここじゃ……ダメなの？」

「ああ。——そうか、グレイスじゃ分らないか。こういうことは無知なものな」

言われて後輩が珍しく眉根を寄せた。あまりの言い方が気に入らなかつたようだ。

だがファールゾンのほうは気づいた様子もなく話を続ける。

「君じゃ知らないのも無理はないが、こういう人為的な発生では魔法を利用するんだ」

「それは知ってる……」

ルーフェイアはあからさまに表情に出しているが、やはりファールズンは気づかなかった。むしろ周囲の連中のほうが、彼女の様子に焦っている。

話のほうは問題なく（？）続行中だった。

「そうか、さすがにこれは知ってたか。それで魔方陣なんだが、時には幾つも使えないんだ」

「それも知って——あ！」

ルーフェイアが声を上げるのとは同時にタシユアも気づく。これでは確かに治療が出来ない。

人為的に発生させられたグレイシアは、現段階では早い話、魔法陣に依存して生きている。だが治療するためには、その魔法陣を止めなくてはならない。

「この症状では、他に治療法もないでしょうしね」

「おや、タシユア、よく知ってるじゃないか」

本当に言うことを為すこと、いちいちカンに触る相手だ。

「ある程度の年齢になれば、自然と知ることですからね。わざわざ指摘していただくようなことはありません」

「あ、そうか？ 学校では教えないと思ってたんだが、今は違うのか」

そういう意味ではなかったのだが、どうもこの男には通じない。ある意味、ミルドレッドより面倒だ。

Episode : 92

「ともかくそういうわけだから、このままじゃ治療は出来ない。グレイス、分かったかい？」

「うん、今は分かってる……」

ルーフェイアがため息交じりに答える。

「で、どうするつもりなのです？ まさかこのままと言うわけではないのでしょうか？」

タシユアが問うと、ファールゾンが怒ったような顔をした。

「当たり前じゃないか、このまま放置なんて出来るか！ 可哀想だろう！」

「——あなたにそのような感情があるとは、思いませんでした」
正直な感想が思わず口について出る。

「なんだかひどい事を言っていないか？」

「事実を言っただけです。お気になさらず」

こんなまともに言葉の通じない相手に、説明するのは面倒だ。

「で、先程の質問ですが。どんな手を？」

「それで困ってるんじゃないか」

ファールゾンが肩をすくめる。

「今の魔法陣を切ったら、この子は生きられない。羊水槽から出せば治療できるが、出した時点でどうなるか見当がつかない。かといってこのままじゃ、だんだん痛みが激しくなって死ぬだけだ」
「なるほど」

予想以上に状況がシビアだ。もうこうなると、どれを選んでも賭けに近い。

だとするなら、基準はひとつだろう。

「この子が一番楽なのは、どれです？」

「楽なの？」

自分としては分かり易く言っただけだが、言葉が通じないファールゾンには難しかったようだ。

「研究者と言うのなら、このくらいは理解していただきたいのですがね。――要するに、グレイシアが一番苦しくない方法、ということですよ」

手取り足取り、何故こんな説明までしなければならぬのか。本当にここでは、腹が立つことと疲れることばかりだ。

「どのやり方も一長一短で危険だというのなら、この子が辛い思いをしないのが最優先では？」

「ああ、それもそうか」

呆れたことにこの男、指摘されて初めて気付いたらしい。

「まったく……幾ら治療でも、患者を苦しませては意味がないでしょうに。まあ殺人集団のシュマーでは、そんなものは気にしないのが流儀なのでしょうが」

「シュマーは色々やってるぞ？　今の稼ぎの主力は、発明品の販売だし」

「――あとの説明は不要ですよ」

今まで以上の疲れを覚えながら、ファールゾンの話を遮る。こう来るとは思わなかった。

当の本人は、けろりとした顔で何かつぶやいている。

Episode : 93

「どれもリスクは高いから……このままが一番確実だけど、本人が辛いし。かといって出せば死にかなないし……」

頭がいいのか悪いのか。どちらにしても同じ総領家のルーフェイアに似て、決断が苦手なようだ。

「——一旦出してから、様子を見るのは出来ないのです？ 外なら痛み止めくらい使えると思いますが」

「ん？ あ、その手があったか」

さっさと帰ろうか、そんな考えが頭をよぎった。

正直なところ、いつもだったらとつくに帰っている。今回それをせずにいるのは、幼いグレイシアを思つてのことだ。

何しろシュマーの連中だ、これからはきちんと扱うという保証がない。もちろんルーフェイアは許さないだろうが、陰でこれほどのことをしている連中だ。とても信用できなかった。

「じゃあ、出すか」

「待ちなさい」

思わず止める。このファールゾンと言う男、人の心というものが全く分かっていない。

「いきなり何かをしたたら、グレイシアが怖がるでしょうに。ただでさえこれほどの目に遇わされているのに、まだ苦しめようというのですか」

「でも、やることは同じだろう？」

このまま首をはね飛ばしたら、さぞかしすっきりするだろう――

そんな気になる。それでもこの男しかグレイシアの治療が出来ないことを思い出し、何とか踏みとどまった。

「たとえ同じでも、心構えがあるかないかで全く違いますか？ それともシュマーでは、極力不意打ちで驚かす決まりでも？」

「そんなもの、あるわけないだろう」

本当に疲れる。それ以外に表現のしようがない。ルーフェイアが逃げるわけだ。

もう会話をするのも嫌になりながら、それでもタシユアは口を開いた。

「ともかく、グレイシアに説明します。何かをするなら、それからにしてください」

「分かった」

何故かファールゾンがあっさりと同意し、そこだけはホツとする。これ以上かき回されてはたまらない。

「このまま水の中に居るか、出て治療するか、方針はそのどちらかで間違っていないか？」

「細かいことを言えば多少違うが、まあそんなもんだな。だいいち言っても、君にさえ分からないだろう」

なぜこつも、常に一言余計なのか。

言い返すどころか頭痛さえ覚えながら、タシユアは水槽に歩み寄った。

Episode : 94

「ルーフェイア、グレイシアと話しは出来ますか？」

「あ、やってみます……」

今までの様子からすると、グレイシアはこちらの考えはある程度読んでいようだ。ただ当人が喋れないので、どう思っているのかを確認出来ない。

だが双子の関係にあたるルーフェイアは、何故か話出来るようだった。

後輩も水槽の傍へ歩み寄り、ガラスに手を当てる。

「グレイシア、起きてる？」

検査だ治療だこちらで騒いでいる間、少女はうつとしていたらしい。だがルーフェイアが呼びかけると、すぐに目を開けた。

「えっと……」

起こしておきながら、ルーフェイアが困ったようにこちらを見る。何を伝えるのかよく分かっていないらしい。

「——私が伝えます」

ルーフェイアに何か言っただけでやりたいところだが、先程の約束がある。グレイシアの目の前で、ルーフェイアを叱るわけにはいかなかった。

「グレイシア」

水槽を覗き込んで話しかける。

「身体は痛くありませんか？」

タシユアの問いに、ルーフェイアが首を振った。言葉を持たない

少女の代わりをしているのだろう。

「何よりです。他に苦しいところもないですか？」

今度はルーフェイアは、首を振らなかった。グレイシア自身もはつきり分らないようだが、快調とは言えないらしい。

（まあ、まだ幼児ですしね……）

親がしっかり育てている子供でも、このくらいでは上手く伝えられない子は多い。ましてや虐待されて言葉さえ知らないグレイシアが、きちんと伝えられるわけもなかった。

「グレイシア、あなたにとっても大切な話があります」
きょんとした表情で、少女がこちらを見上げる。

「とても、大事な話です。ですからしっかり聞いてください」
ルーフェイアとグレイシア、2人が一緒に頷いた。一応理解したようだ。

少し間をおいて、言葉を選んで話した。

「ずっとその中に居た場合、だいぶ先ではありますが、もっと身体が辛くなるそうです」

水の中の少女の顔が歪む。恐いのだろう。

「大丈夫です、落ち着いて。まだ続きがありますから」
タシユアの言葉に、グレイシアが真剣な顔になった。

（賢い子ですね……）

ルーフェイアも頭は良いが、双子と言えるグレイシアも同じらしい。こんなに小さくても、大切なことがどれか把握する能力がある。

Episode : 95

「もしそこから出れば、治る可能性があります。ただ、とても危険です。出ただけで、死ぬかもしれません」

金髪の少女2人が、ちよつと首をかしげた。通じていないようだ。

「ルーフエア、グレイシアは何と？」

「その、『死ぬ』っていうのが……分らないみたいで」

それはそうだろう。この年で、こんなところに閉じ込められて言葉さえ知らない状態なのだから、「死ぬ」などという概念が分かるわけもない。

だが、ある程度でも理解させたほうがいいだろう。本人の命に関わる話を、頭ごなしに決めるわけにはいかない。

「『死ぬ』というのは、そうですね……眠ったあと二度と目が覚めない、とでも言えいいですかね」

グレイシアがまた首をかしげ、ルーフエアと視線を合わせた。姉(?)を代弁者として使うことを覚えたらしい。

「何と言っています？」

「痛く……ないか、って」

子供にしてはずいぶん現実的だ。だが逆に言うなら、普段からそれだけ痛みに悩まされているとも言えた。

「少し待って下さいね」

少女に言つて、今度はファールゾンのほうへ問いかける。

「どうなのです？」

「何がだ？」

「またもや会話にならない。グレイシアのほうがよほどまともだ。」

「ですから、グレイシアを出した場合の痛みです。あるのですか？」

「それは分からないな。でも出てすぐ死んだりしなきゃ、魔法陣を利用して痛みは止められるはずだ」

「なるほど、分かりました」

「どうやら予想したほどではないようだ。」

「グレイシア、今の話、分かりましたか？」

「だが少女は首を振った。自分に問いかけられない限り、聞く必要がないと思っているのだろう。」

「ちよつと視線を落として縮こまっている——こういうところもル―フェイアに似ている——に、タシユアは声をかけた。」

「別にかまいませんよ。誰も聞けとは言いませんでしたしね。それで痛みのほうですが、外なら何とか出来るそうです」

「少女の表情がぱつと明るくなった。やはり時々来る痛みが、今のこの子にとって一番辛いことらしい。」

「それから死んだ場合は、痛みはありません。死ぬまでは苦しいかもしれませんが、それで終わりです」

「事実だけを並べる。」

「本当だつたらこんな年で知るようなことではないが、何も伝えずに苦しませる方が、この場合はよほど問題だろう。」

Episode : 96

「そこに居て、しばらくの間生きるか。死ぬのを覚悟で出るか、どうしますか？」

少女が真剣な顔でこちらを見上げた。

そしてルーフェイアが口を開く。

「出る、って言ってます。痛くない方が、いいって」

本当にしっかりした子だ。メリットとデメリットを天秤にかけて、きちんと考えている。

「分かりました。なるべく危険のないように検討しますから、しばらく時間をもらえますか？」

こつくりとグレイシアが頷いた。分かったようだ。

「……いい子ですね」

水槽へ手を伸ばしガラスに手を当てと、少女も内側から手を伸ばした。

懇願をたたえた碧い瞳。

「大丈夫ですよ」

そう言ってタシユアは水槽から離れた。

「この子の意思是、このとおりですが」

振り向いて、見ていたファールゾンに言う。

「このとおりって、どのとおりだ？」

「……目の前で今、グレイシアが言ったと思いますが。聞いていなかったのですか？」

「聞いてた。でもグレイシアは何も言っていないぞ」

ため息が出る。

頭が回る連中というのは往々にしてどこかおかしいものだが、ここまでというのは聞いたことがない。

「ですから、グレイシアの言うことをルーフェアが代弁していたでしょう」

「そうだったのか？　誰も言わないから分からなかった」
本気で頭が痛い。

「えーと、じゃあ整理するぞ」

「どうぞご自由に」
自分でしてくれると言うなら文句は無い。これ以上説明に付き合わずに済む。

「さっきからアンタが水槽の中に話しかけてたのは、グレイシアになんだな？」

「当然です」

それ以外の、いったい何に見えていたのか。

「で、あの子の答えを、ルーフェアが代弁していたんだな」
「そう言いましたが」

この男を始末して放りだせたら、ずいぶん気分が良くなりそうだ。

「で、ルーフェアが言ってた『出たい』ってのが、本当はグレイシアが言ったこと、と」

「その通りです」

やっと何がどうなっているか、把握したらしい。

「正直シュマーの中とは言え、一応研究者を名乗る人間が、これほ

ど理解が遅いとは思いませんでしたよ」

「分からないものを分からないままにしていたら、研究者なんか勤まらないぞ」

本当にこの男、どこまで行っても会話が成り立たない。

Episode : 97

「あなたの物分りの悪さはよく分かりましたので、いちいち自慢していただかなくても結構です。それより、グレイシアを楽な状態で外へ出す方法はあるのですか？」

「ないな」

実も蓋もない答えが返ってきた。

「だいいちそんなに楽だったら、もう終わってる」

「——意味が少々違いますが」

首を切り飛ばしたくなるのを押さえながら、説明を試みる。

「あなたが楽なのではなく、グレイシアが痛みを覚えず楽に出られるか、と訊いているのです。そもそもあなたは仕事をする側なのですから、苦勞があつて当然でしょう」

「なんだ、そういう意味か。なら最初からそう言ってくれ」

「言っています」

ふと見るとルーフェイアが、申し訳ないという表情をしていた。

（そう思ってもらつても、こちらの負担は減らないのですがね……）

知らん顔をされるよりはマシだが、何の助けにもならない。

だがグレイシアと約束しているため、それをルーフェイアに言うこともできなかった。それに言えばまたあの子が怒つて、身体に障る。

いずれにせよ、今すぐ帰りたいほどのストレスだ。

「で、可能なのです？」

「分からないな。羊水を切つて呼吸が始まればよし、ダメなら急い

で羊水を戻して——ん？ いけるかもしれない」
何か妙案を思いついたらしい。

「——そうか、なんで気づかなかったんだ。魔方陣をそのまま羊水だけ切って、呼吸を待てばいいんじゃないか。外へ出すことなかったんだ」
「なるほど……」

違う魔法陣で治療することばかり考えていたが、考えてみれば何が何でもすぐに移す必要はない。一応安定している今の状態のまま呼吸を始めさせて、容態を見てから移しても十分に間に合う。
それでも事故はありうるが、いきなり外へ出すよりは確率が低いはずだ。

「これならすぐ行ける、準備しないと。誰か室温上げてくれ。あと布だ。毛布も要るな」
急に慌しくなる。

「タシユアでもグレイスでもいい、その子に説明してくれ。じゃないと羊水が切れない」

「分かりました」

タシユアはすぐに水槽の傍へ戻った。ファールゾンは気に入らない相手だが、事ここに至っては不満を言っている暇はない。

「グレイシア？」

少女はいつの間にかまた眠ってしまっていたが、タシユアが声をかけるとすぐに目を覚ました。

Episode : 98

「話が決まりました。その水を抜きます」
少女が首をかしげる。

「ですから、今あなたがいる水を――ああ、その意味自体が分かりませんか」

考えてみれば、物心ついてからずっと水の中だ。それを抜くといっても何のことか分からないだろう。

「そうですね……このガラスの内と外では、環境が全く違います。そしてこれから、私たちと同じ環境に変えます。分かりますか？」
今度は何となく通じたようで、まだ不思議そうながらもグレイシアが頷く。

「初めてのことなので驚くでしょうが、大丈夫ですよ。それに先ほと言っていたよりも、ずっと安全なようですから」
少女の表情が緩んだ。やはり怖かったのだらう。

「タシユア、そっちはもういいか？」

「ええ、いつでもどうぞ」

タシユアの答えにファールゾンが頷く。

「分かった。えーとそこのお前！」

「お前じゃない、ラヴェルだ」

「偉そうに叔父上の名前を言うな。ともかくお前、清浄靴出せ。あと羊水をきる準備だ」

グレイシアを発生させた研究者に、ファールゾンが命令する。様子からしてこの2人、普段からもいがみ合っていそうだ。

「清浄靴くらい、自分でその辺から……」

「うるさいな、この子の容態がいつ変わるか分からないのに、そんな時間をかけさせるのか？」

言っていることは正論だ。

（――言われたほうは怒りそうですがね）

もっともここで怒れば、自分の立場が悪くなるだけだろうが。

「循環させたまま、流出量の設定を上げてくれ。少しずつ減らすんだ」

「わ、分かった」

周囲は忙しそうだが、タシユアたちの仕事はない。出来るのはグレイシアについて、声をかけるくらいだ。

水の中の少女はきよきよしていた。何かが始まったのは分かるが、何が起るのか分からない、そんな不安そうな顔をしている。

「大丈夫ですよ。みんなあなたのために、一生懸命やっていますから」

本当なら撫でてやりたいところだが、ガラスの向こうに手は届かない。

そうやって声をかけながら待っている間に羊水は徐々に減っていった。グレイシアの背の高さくらいになった。

驚いた少女がばたばたと暴れだす。

「落ち着いて、大丈夫です」

ルーフェイアも隣で水槽に手を当てる。言葉を介さずに話しかけているのだろう。

どちらの言葉が効いたのか、グレイシアが暴れるのをやめた。ただ水の外は怖いようで、必死に潜っている。

だがさらに水は減っていつて、少女は身を屈めた。

Episode : 99

「今行くぞ」

清浄靴——こういう清潔さが求められる場所で靴のまま更に履く靴、とても言うもの——を履いたファールゾンが、水槽内へと入った。肩から掛けているバッグには、おそらく必要な器具が入っているのだろう。

水から出るのが怖いようで、僅かに残った羊水に必死に顔を付けているグレイシアを、ファールゾンが抱きあげる。

「！」

いきなり水から離されて少女が暴れ出した。

「何をしているのです、そんな急にやるものではないでしょう！」
ただでさえ怯えている幼子を、更に怯えさせてどうするのか。

「え、あ、いや、そういうつもりじゃ……」

「どういづつもりだろうが関係ありません。——グレイシア、大丈夫です。彼に任せて」

タシユアの声が聞こえたのか、少女が暴れるのを止めた。

「悪かった、すぐ楽になるからちよつとだけ我慢してくれ」

ファールゾンがすまなそうに——そういう感覚があったことに驚く——謝って、少女をそつと抱きしめた。

安心したのだろう、グレイシアの身体から緊張が取れる。だが殆ど間をおかず、少女が苦しげに喘ぎ始めた。

「ごめんよ」

ファールゾンがそう言ってグレイシアをうつぶせにし、背中に乗

るようにして強く押した。

少女が大量の水を吐き出す。今まで飲み込んでいたものだろう。だがそこまでもまだ苦しげで、息が出来ているようには見えなかった。

「仕方ないな。もう少し我慢してくれ」

慌てることなくファールゾンはグレイシアの喉に管を差し込み、反対側を自分の口に当てて吸い、液体を吐き出す。

何度か繰り返した後、今度は彼は息を吹き込んだ。

「う、あ……」

か細い声。だが周囲の緊張が緩む。

「毛布をくれ！」

「はい、今！」

水槽の縁から毛布が投げられて、ファールゾンが受けと——れず、頭にかぶる格好になった。よほど運動神経が悪いらしい。

「まったく毛布くらい——」

言いかけて、言葉が止まる。

——グレイシアの微笑み。

ファールゾンの様子がよほど可笑しかったのだろう、少女がに笑顔をを見せていた。

「まったく、もう少し考えて投げてくれ。落としたら濡れるじゃないか」

彼は彼で、一応考えていたらしい。微笑みに気付かぬままそんなことを言う。

Episode:100

「待ってる、これじゃ寒いからな」

だが両手がふさがっているために、彼女を上手に包むことが出来ない。

「まったく……靴をください」

言って清浄靴を出してもらい、タシユアは僅かな助走で大きく跳んで水槽の縁に手をかけると、鮮やかに乗り越えた。

柔らかく中へ飛び降りる。

「貸して下さい」

毛布を受け取って広げて、ファールゾンに声をかけた。

「グレイシアをここへ」

「あ、ああ」

少女がタシユアの広げた毛布の中へ、そつと下ろされる。

「もう大丈夫ですからね」

言ってグレイシアを毛布で包んでやり、抱きしめた。

小さくうなずいて、少女がタシユアに身を寄せてくる。

「誰か、担架を。このままでは出せません」

「了解です」

バタバタと白衣の男たちが駆け出しに行った。

グレイシアは少し呼吸が早い気がするが、それ以外は問題なさそうだった。毛布に包まれたまま、視線をあちこちにやっている。いつもと違って見える部屋が珍しいのだろう。

「寒くありませんか？」

タシユアの問いかけに、少女が少し首をかしげた。意味が通じていないようだ。

「そういえばあなたは、今まで寒い思いをしたことがありませんでしたね。ともかく、何か不都合があったら何でも言ってお下さい。何とかしますから」

じつとタシユアを見つめていたグレイシアが、小さくうなずく。困っていることを伝えれば助けてもらえることだけは、理解できたのだろう。

今はそれで十分だ。

やがて担架が運ばれてきた。

「四隅にロープを付けて、この中へ吊り下げてもらえますか？　この子をお載せます」

水槽の壁は高い。とてもではないが、弱ったこの子を抱えて出るのは無理だ。

担架が下ろされてくる。

「呆けていないで、受け取ってください。私が手が空いていないのが、見て分かりますか？」

「え？　あ、そうか」

言われて初めてファールゾンが動いた。本当に研究以外は、全く役に立たない男だ。

「そちら側を持ったまま——いえ、もっと低く」

まだ濡れている水槽の床につけないよう、だがあまり急な角度がつかないように担架を調整させて、そっとグレイシアを下ろす。

離れるのが嫌だったのか、下ろす時に少しだけ少女が眉根を寄せた。ルーフェイアに似て甘えん坊らしい。

Episode : 101

「今だけですから」

グレイシアに言い聞かせ、寝かせる。

「そちらを」

頭側の取っ手を持ち、反対側をファールゾンに持たせ、タシユアは腰の高さまで一回持ちあげた。このほうが、引っ張り上げる距離が短くて済む。

「上げて下さい」

タシユアの言葉に、担架に結わえつけられた綱が引っ張られ始めた。

「お前たち、ゆっくり上げてくれよ。あと傾けるな」

「分かってます」

下からはタシユアたちが支え、上からは綱で引っ張られ、じき担架はタシユアたちの頭より高くなった。

「離しますよ」

「大丈夫です！」

タシユアの言葉に、しっかりした声が返ってきた。

そつと手を離す。

最後、縁までの僅かな高さをゆっくりと担架は上がり、梯子の上で待ち構えていた男たちが取っ手をがっちりと掴んだ。

不安定な担架からすぐにグレイシアが下ろされ、一人の男がしっかりと抱いたまま梯子から降りる。

「私たちも行きますか」

入ってきたときと同じようにタシユアは跳んで水槽の縁に手をかけ、常人離れした腕力で楽々と身体を引き上げた。

「ま、待ってくれ。僕はどうすりゃ」

「ご自分で考えて下さい。頭はよろしいのでしょうか？」

そこまで面倒などみてもらえない。

軽々と縁を超えて飛び降り、タシユアは 그레이シアの傍に歩み寄った。

「具合はどうですか？」

少女がタシユアのほうを向き、何か必死に視線で訴える。と、隣へ来たルーフェイアが言った。

「あの……先輩が、いいって」

「やはりそうですか」

僅かなしぐさと視線から恐らくそうとは思っていたが、間違いなかったようだ。

「私が抱きます」

白衣の男に言って 그레이シアを再度抱くと、安心しきった顔になった。

（ずいぶん懐かれましたねえ）

何故行きずりに近い自分にこうも懐くのか、理由が分からない。

ただこれでこの子の気持ちたちが落ち着くのなら、抱くことくらいタシユアは構わなかった。

本人に一切非は無い。だが結果的に虐待を受けたのと同じ有様で、特に身体は疲れ切った状態だ。今はともかく安心させて、心因的な

要素を取り除くのが重要だろう。
それが抱くことで出来るなら、安いものだった。

「た、タシユア、そこじゃダメだ——うわっ」

後ろで何やら大きな金属音と、重いものが落ちる音がした。

よほど驚いたのだろ。腕の中でグレイシアが、びくりと身体をすくめる。

「グレイシアを驚かさないでください。だいいち梯子くらい、何も飛び降りなくてもいいでしょうに。ここは運動神経の良さを、披露する場ではありませんよ？」

「落ちたんだ！」

どうも何とか水槽の縁は乗り越えたものの、上手く梯子に移れなくて転落したらしい。

ついでに首の骨でも折れば良かったと思うのだが、世の中はなかなか上手いかないなものだ。

「落ちたのか降りたのかは知りませんが、大きな声を出さないでください。この子が怯えます」

ファールゾンを一旦黙らせ、先程のことを訊く。

「それで、ここではダメとはどういうことです？」

「そこは魔法陣がないだろう。すぐ移さないと弱るぞ」

立ち上がりながら彼が言う。

「了解です。ですがどこへ？」

さすがにこの件で、何か言おうとは思わなかった。なにしろ一刻を争う。

「どこへって……しまった、まだ訊いてなかったな。おい、そこのお前！」

「だからラヴェルだと言ってるだろう！」

「うるさい、名前なんかこの際どうでもいいんだ。この子を入れる魔法陣はどこだ」

「こない加減な言い方で通じるのかとも思ったが、グレイシアを生み出した研究者には通じたようだ。要するに同類ということなのかもしれない。」

「維持用なら、こつちだ」

「使えるのか？」

「陣はあるが、魔力が……」

詳しくは分からないが、不完全らしい。

と、ルーフェイアが歩み出た。

「魔力が、足りないの？」

「え、あ、はい。だいぶ古いので……」

話を聞いたルーフェイアは、何か納得したように一人で頷いた。

「魔力、なんとか……できるかも。場所はどこ？」

「え？ あ、こちらです！」

慌ててルーフェイアを案内する研究者に、タシユアもついていった。使えるようになったら、すぐグレイシアを入れてやった方がいい。

（それにしても、無計画ですね）

そんなことを思う。

維持用の魔法陣が必要になるのは、最初から分かっていたことだ。ならばなぜ、先に確認しておかないのか。

幸いグレイシアの容体が落ち着いているから良かったが、この夕
イミングで何かあったら、確実にこの子は死んでしまう。それを忘
れて手順を間違えるなど、それこそあいた口がふさがらない。

Episode : 103

「ここなのですが……」

案内されたのは、一旦廊下に出て少し歩いた部屋だった。確かに中は病院に似て、清潔なベッドが置かれている。

「寝かせても構いませんか？」

「あ、どうぞ」

許可を取ってグレイシアを下ろし、まだ濡れた髪をタオルで拭いてやる。

（早く乾かさないと……）

自分も長いから分かるが、濡れた髪はあつという間に体温を奪う。弱ったこの子では、それが命取りになりかねなかった。

だがさすがにここには、髪を乾かす道具——炎石と風石を組み合わせたもの——がない。出来るのはひたすら拭いてやることだけだ。ルーフェイアのほうは、作業に取り掛かったようだった。

「この魔法……元は、何？」

「あ、これです」

すぐに魔方陣の設計図が手渡される。

「外が、ふつうに魔力を集めて……えーと、じゃあこうかな」

中央までルーフェイアが歩み出、すつとしゃがんで床に手を付き目を閉じた。

「……シャリテックラーレ」

よく知られた治癒魔法だ。ただ普段とは使い方が違うように見え

た。

彼女が立ち上がるのを待って訊いてみる。

「何をしたのです？」

「えっと、陣に、魔法を……」

初耳だ。

「何も魔法陣を治療しなくてもいいでしょうに」

つい毒舌が口を突いてから気付く。生命維持のための魔法陣に、
治癒魔法。

「なるほど、それで陣を再生というわけですか」

「あ、えっと、少し……違うかも、です……」

「ほう、ということですか？」

興味を覚えて問うと、後輩が考えながら話し始めた。

「えっと、その、この魔法陣、一番外が魔力集めて、一番中が治癒
で……」

「たしかにそうですね」

ルーフェイアの学年ではさほど詳しくやっていないだろうが、
シユアたちのようなシエラの上級隊ともなれば、魔法陣は読めて当
たり前だ。下級生に説明されるまでもない。

「で、その構成が何か？」

「ええと、だからこの構成に、同じ系統の呪文で魔力を……」
「なるほど」

かなり雑な説明だが、言わんとすることは概ね分かった。それ
にルーフェイアが相手では、これ以上説明を求めても的確に出てく
るかどうかわからないものがある。

Episode : 104

「要するに、陣へ魔力を流し込んだわけですか？」

「あ、はい、そんな感じです」

つまり、魔力が上手く流れなくなった魔法陣に同系統の魔法をかけて、呼び水として使ったのだろう。

ただこんなやり方は、聞いたことがなかった。

「えっと、これで、たぶん……誰か、確かめて」

ルーフェイアの言葉に、研究者たちの一人が小さな石を持ってきて、魔法陣の中に置く。

魔力に反応するように加工された石が、間をおかず淡く光りだした。

「使えます」

「良かった……」

ルーフェイアは単純に喜んでいるが、タシユアは内心驚いていた。

たしかに目の前で見せられて考えてみれば、出来ないことはないと分かる。だがこんな変わった方法は聞いたことがない。魔法物理学を研究している学者でさえ気付いていない方法だ。

そんなものを、何故ルーフェイアが知っているのか。

「このやり方、どこで学んだのです？」

「え？ あ、イマドがその、何度か目の前でやってくれて……」

「ほう、どのように？」

珍しい話に、つい問いを重ねる。

ルーフェイアが考えながら話し始めた。

「えっと、ダメになりかかった炎石とか、イマドが直そうとして…
…それで、あたしに何か炎魔法使え、って」

炎だから炎は一見間違っていないが、この場合は通常無意味だ。
魔力石は基本的に極めて安定していて、同じ魔法を傍で使っても何も起こらないのだ。だからこそ大がかりな魔法陣を作って、作る必要が出る。

「それでなぜ、魔力石を直せるのです」

「それが、イマド、魔力視えてて……で、魔力捕まえて、書き込む
って」

「——人類とは思えませんね」

あの後輩は、明らかに「ふつう」の範疇に入れるには問題がある。
念話が出るだけでも十分異常だが、以前の病院テロのときなど短
時間とはいえ、発動しかかった石を強引に抑え込んでいた。

拳句に魔力まで視えるとなると……。

（古代人、ですかね）

かつて居た、魔法に長けた者たち。

居たという証拠はそれなりにある。そもそも今でも、魔法が得意
な血筋があるくらいだ。そういう家を辿れば、最後は古代人に行き
つくのだろう。

ただ、イマドのように魔力石を直接扱う者は噂にさえ聞かない。
逆に言うと、彼はそれだけ「外れている」ということだ。

Episode : 105

もっとも彼が仮に先祖返りか何かだとしても、何が変わるわけもないが。

グレイシアは落ち着いていた。まだ少し呼吸が速い気がするが、辛くはなさそうだ。髪も乾いてきた。

（これなら大丈夫ですか）

あとは一刻も早く治療を始めるだけだ。

ルーフエイアが心配そうな顔で隣へ来、グレイシアに手を伸ばす。

「ごめんね……」

自分と同じ色の髪を撫でながら後輩が謝った。

「ですから——」

つい言いかけて口をつぐむ。自分の言うことが間違ってるとは思わないが、言えばグレイシアが気にして怒るだろう。

「ごめん……」

ルーフエイアの碧い瞳からこぼれた涙に、グレイシアが不思議そうな顔をする。

細い腕が伸びた。

ずっと水の中に居たために、全く筋肉の付いていない腕。

同じ年頃の子なら外を駆け回って、もっと身体がしっかりとしているはずだ。けれどこの子の腕と足では、とても身体を支えられないだろう。おそらく現時点では、立つことも這うことも出来ないに違いない。

グレイシアの小さな手が、ルーフェイアの涙に触れた。
不思議そうな色をたたえた瞳が、姉と涙とを交互に見る。
ルーフェイアが弾かれたように顔を上げた。

「許して、くれるの……？」

グレイシアの微笑み。

真似をしたのだろうか？　かすかに唇が動いたが、言葉は出なかった。

そして申し訳なさそうな、けれど嬉しそうな、複雑な表情のルーフェイアが頷く。

「何と？」

「ひとりじゃないから、って。触れるから、って」

「そうですか……」

思えばグレイシアは、ずっと全てがガラス越しかったのだ。誰とも触れ合うことなく数年間、隔てられた「向こう側の世界」を見ながら過ごしてきた。

その向こう側へ今連れてこられて直接触れ合って、それだけで喜んでいいるのだろう。

周囲は相変わらず慌ただしい。

「今後はどうするのです？」

例のファールゾンが傍へ来た時に、タシユアは捕まえて聞いてみた。

「このままここで治療を？」

「無理だな」

彼が即答する。

Episode : 106

「魔法陣自体は機能してるが、種類がない。人手もイマイチ足りないし、機材もだ。本家へ移した方がいい」

「本家、ですか」

要するにシュマーの本拠地のことだろう。

（行かせたくないのですがね）

この実験をやった連中も、同じシュマーだ。そんな連中を生み出したところへは、絶対に行かせたくない。

だがタシユアが連れ帰っても、何も出来ないのは確実だった。

どこかの大きな病院へ駆け込んでも、おそらくグレイシアの治療は出来ない。そして苦しみながら死んでいくだけだろう。

消去法で、シュマーの本拠地へこの子を送るしかない。だがそれをやると、身の安全が保証できない。

（いつそ、私が行きますか……）

自分が行けば、絶対に間違いはないのだ。

が、問題はそれで向こうが、受け入れるかどうかだ。部外者であるタシユアを、シュマーの面々がすんなり受け入れたりはしないだろう。

もつともイザとなったら、強引に入ればいいだけだが……。

「ちょーっと！ 誰かいらないの！」

突然、かん高い声があたりに響いた。

「あたしが来たんだから、誰か出てきなさいよ！」

居合わせた一同が一樣に硬直する。

「か、母さん……？」

ルーフェイアのつぶやき。

少しして、声の主が入ってきた。

「あら良かった、全部開けて探すんだったら、どうしようかと思っ
たわ」

「か、母さん、何しに……」

ルーフェイアの問いが、全員の思いを代弁する。

「何しにつて、そりゃ騒ぎが起こったつて言うから」

「それはそうだけど……」

相変わらずのマイペースに、ルーフェイアもたじたじだ。

（ですが、この場合は助かりますか）

ルーフェイアの母カレアナは、シュマーの実質的なトップだ。そ
れが 그레이シアの後ろ盾につけば、もう誰も手が出せない。

もっとも、カレアナの方もそれを分かっている、わざわざここま
で来たのだろうか。

「で、何がどうなったわけ？ 可愛い子が居るって、ドワルディは
言っただけど」

「子供なら、ここに。 그레이シアです」

喋れない少女に代わって紹介する。

「あら、ホントに可愛いわあ」

カレアナがつかつかと歩み寄り、少女の顔を覗き込んだ。

Episode : 107

「名前は？ そう、グレイシアって言うの。あら、ルーフェイアにつけてもらったんだ」

一人で話し始める。だが内容から察するに、どうもグレイシアと意思疎通が成立しているようだ。

グレイシアがまっすぐに、カレアナの瞳を見つめている。

「ちよつとだるいみたいね。でもそんなに痛くはないのね。いいことだわ」

性格にはそうとう難があるが、さすがに母親だけあって、カレアナは子供の扱いに長けているようだった。

「——ええ、そうね。でも大丈夫。ただ、ここから移らないとダメかもね」

少女の頭を撫でてやりながらカレアナが言う。

「……念話がいちいち口にするものだとは、過分にして知りませんでしたね」

タシユアが言うと、カレアナは初めて気付いたという顔になった。

「あらやだ、私言ってた？」

「ずいぶん耳が遠い上に、耄碌までされたようで。いつそ引退されたらどうです？」

「出来たらしてるわよ」

相変わらずマイペースで、取り付く島もない。

「それにしても、私たちが散々始末をした後でのこのこ来るとは、総領というのはいいい商売ですね」

「しょうがないじゃない、これでもプラジュから、高速艇で飛ばし

てきたのよ」

ブラジユというのは海を隔てた西大陸、ワサル南部のリゾート都市だ。少し沖合の小さな島が何故かシュマーの所有で、宿泊場所になっていた。恐らくは用事か何かで、その辺りに居たのだろう。たしかにあそこから来たのなら、これでも早い方だった。

——褒めるつもりはないが。

遠距離をすっ飛んで来なくてもいいから、こういうグレイシアがやられたような所業を、やめさせてほしかった。それが上に立つ者の責任であり仕事のはずだ。

「え？ 何？」

カレアナのほうは、タシユアの言葉にも堪えた様子は無い。全く変わらぬ顔で、またグレイシアを覗き込んだ。

「ああ、汚しちゃったのね。いいわよ、すぐ変えてあげるから」
さすがに手慣れている。

「ちよつと見せてね……あーあ、誰もやってくれなかったのね、可哀想に。これじゃ気持ち悪いでしょ。タシユア、その毛布取っていきなり頭ごなしに言われる。」

「そのくらい、自分で取って頂けますか？」

「何言ってるの、あたしこっちで手が空かないの」
平然と言い返して、カレアナはタオルを手を取った。

「誰か、お湯持ってきてちょうだい。タシユア、ほら早く毛布」
人の話など全く聞いていない。

だがタシユアはそれ以上言わず、黙って毛布を渡した。グレイシ

アにこんな思いをさせたのは、自分のミスだ。

Episode:108

「もうだいじょぶよー、すぐ気持ち良くなるから」

カレアナは持つて来られたお湯にタオルを浸し、手際良くグレイシアの身体を拭き始めた。

「まったくダメじゃない、こうしてあげなきゃ身体がすぐ痒くなっちゃうでしょ」

「年を重ねたあなたと違って、子育ての経験がありませんので」

「あらなんだ、まだ子供いないの」

意味不明の答えが返ってくる。

「しょうがないわねえ、最近の若い子は。子供はいいわよー」

「子供がいいのは否定しませんが、まだその気はありませんので」

「あらそうなの。まあシルファが可哀想か」

何やらよく分からない理由で勝手に納得したようだ。

（だいいち、何故急にシルファが出てくるのやら……）

そもそも産む産まないを決めるのはシルファだろう。女性の場合文字通り命懸けなのだから、決める権利も女性にあるはずだ。

何より彼女にその気がないなら、無理強いなど出来るわけもない。それを「可哀想」というのは、全く理解できなかった。

カレアナのほうは、こちらの思いなど気にした様子は無い。

（考えるだけ無駄ですか）

だいたいが彼女の場合、深く考えていないことが殆どだ。真つ当に相手をするだけ馬鹿らしいとも言えた。

なので、違う質問をする。

「この子をこれからどうするのです？」

「連れてくわよ、治療できるところに。——ああ、そういうこと。大丈夫、あたしとサリーアで監視するから」

カレアナが請け合った。

「それで何とかなると思いますかね。だいいちこの状況、要するにあなた方の監視不十分が、引き起こしたことですし」

「まあ、それ言われるとそうなんだけど」

こちらが指摘した事実、平然と返してくる。よほど神経が太いのか、そもそも感じていないのか。

カレアナは続けた。

「ホント、あなたが見つけてくれて助かったわ。ずっと追いかけてたんだけど、どうも尻尾掴めなくてね」

「ただの一学生が掴むような尻尾を掴めないとは、シュマーは子供の集団ですか？ まああの倫理観は子供以下ですから、間違っていないのかもしれませんが」

言いたいことは山ほどある。

だがさらに言おうとしたタシユアを、カレアナは遮った。

「タシユア、今は止めましょ。この子の前だから」

「——分かりました」

見ればグレイシアが、どことなく不安げな表情をしている。目の間でシビアなやり取りが始まって、怯えてしまったのかもしれない。

Episode : 109

「ごめんね、別にケンカしてるわけじゃないのよ?」

だがグレイシアは、まだ不信の表情だ。

「嫌われましたねえ」

「おかしいわね、嫌われるんならあなたの方だと思っただけ」

ずいぶん失礼な言い草だ。が、グレイシアの前では言い返せない。

「まあいいわ。とりあえず綺麗にしたし、あつたかくしたし。あとは移動をどうするかだね。——ファールゾン!」

カレアナがああ研究者を呼んだ。

「何でしょう、叔母上」

さっきまでとは打って変わって、ずいぶんと丁寧な態度だ。

「この子、ずっとここってわけにはいかないわよね?」

「ええ。最低でも近隣、出来ればファクトリーの医療施設へ移さないと無理です」

あまりの態度の違いに、開いた口がふさがらない。

(たしかに相手によって、態度はある程度変わるものですが……)
だがここまで変わるといふのは酷過ぎるだろう。

「移せるとして、どこが候補? 一番近いのはケンディクよね」

「ええ。ただきちんとした対応はできません。生命維持と、対症療法が中心になるかと」

会話を聞いて、ケンディクに既にシユマーが施設を持っていたことに気づく。

（そういえば、病院が新しく出来ていましたか）
例のテロ騒ぎの病院がケンデイクでは大きいが、去年少し離れた場所にもう一つ大きいものが出来た。

混雑が解消されたと町の人間は喜んでいたが、どうやらそれがシユマーの関係だったらしい。おそらくはルーフェアがシエラに在学しているために、イザというときのために建てたのだろう。

正直ルーフェア一人にそこまでするのはどうかと思うが、町の住人達は喜んでいるから何とも言えなかった。

（行ったら危険だと思うのですがねえ）

こんな非人道的なことをやらかす連中だ。それが経営している病院など、危なくて行けたものではない。

カレアナとファールゾンの話はまだ続いていた。

「とりあえずそこへ移して、様子見てファクトリーは？」

「叔母上の言うとおり、それしかないと思います。まだこの子は、長距離の移動には耐えられませんから」

態度の違いはどうかと思うが、話は概ねまとまったようだ。

「じゃあ、その方向で。もう少し様子見て、大丈夫そうなら移動かしら？」

この辺はルーフェアと違うところで、あっという間に話をまとめていく。

「だとすると叔母上、船にも陣を用意しないと。移動中が危険です」

「ああ、言われてみればそうね。作れる？」

今までとは打って変わって、物事の進み方も早かった。

Episode:110

「維持の魔法陣で構わなければ、時間をいただければ作れます」

「じゃあお願い。人は必要なだけ誰でも使いなさい。最優先だからあとここに2、3人残していつて。じゃないとこの子に何かあったとき困るわ」

傍らのルーフェイアが感心したように、そしてどことなく誇らしげに母親を見ていた。

金の髪に碧い瞳。よく似た母娘なのに性格は正反対だ。

（そういえば、 그레이シアも娘ということになりますか）

ルーフェイアの複製で双子のようなものだから、カレアナの娘と言っても差し支えないはずだ。

ただ 그레이シアの性格は、あまりルーフェイアに似ていないように思えた。なんと言うか——もっと気が強く感じる。

従姉だというサリーアも見かけによらず気が強かったことを思うと、大人しくてすぐに泣くルーフェイアのほうが、総領家としては異色なのだろう。

考えている間にも事は進んで、白衣の男を2人ほど残し、研究者らしき一行は出て行った。

あのラヴェルとかいう男も居ない。一緒に連れて行かれたようだ。

——居ない方がいいが。

子供をこんな目に遭わせる連中など、消えついでにこの世界からも消えたほうがいい。

ルーフエィアは 그레이シアの傍から離れなかった。
互いに視線を合わせ色々な表情を見せているから、言葉を使わずに会話しているようだ。

（何を話しているのやら）

그레이シアの表情から考えるに、恐らく見たことのない世界を訊いているのだろう。幼い碧の瞳が好奇心に輝いている。

（気の毒に……）

本当ならその好奇心のままに駆け回り、大人を振り回しているはずだ。

なのに、そんな些細な楽しみさえ、奪われてしまった。
心の奥底にずっとある、冷たい怒り。

根源を辿れば、個人的なことだ。だがそれは同時に 그레이シアと、
そして他の子供とも通じるものがある。

——許さない。

その思いだけは、変えることができない。変える必要もない。

今は、그레이シアの治療が先だ。他のことは後回しでもいいだろう。

それに曲がりなりにも 그레이シアを育ててきたあの研究者は、彼女のことに当然ながら詳しい。その協力なくしては、進まない治療もあるかもしれない。

だが、事が片付いたら。

そう思うタシユアに、のんびりした声がかかった。

「何考えてるんだか知らないけど、後にしてね。あとそれから、この子の前であんまり考えるもんじゃないわ。読まれるわよ」

「……」

カレアナの言葉には答えず、 그레이シアの頭を撫でる。
無邪気な笑顔。

「大丈夫ですよ……」

それだけ言って、タシユアは少女の頭を撫で続けた。

Episode : 111

R u f e i r

「それでファールゾン、グレイシア……どうなの？」

シエラの応接室で、あたしはファールゾンに訊いた。部屋にはほかに、タシユア先輩が居る。

「まだ移動出来ない。当分無理だろうな」

「そう……」

エル二群島から帰ってきて、もう20日が過ぎてる。

ずっとあの子のが気になってたけど、あれきり会っていなかった。テストを思いっきりすっぽかしてしまつて、追試になつたせいだ。

ただ一度受けてみたかつた追試は、あんまり面白くなかつた。いつもの試験と殆ど変わらない。

ともかくそれが終わったのが、やっと昨日の話だ。だからとてもお見舞いに行く暇なんてなかつた。

で、今日か明日にでも行つてみようと思つたところで、ファールゾンがいきなり来てあの騒ぎだ。

「痛がつたりは……してない？」

「それは大丈夫だ。その程度なら何とかなる。ただ元から弱つてゐるから、船で長距離移動は辛いんだ」

そうだろうな、と思う。

エル二群島からケンディクまでは、船で一泊の距離だ。けど魔法陣の中に居てさえ、グレイシアは揺れる船に少し酔っていた。

これが何日もかかる船旅になったら、とてもじゃないけど耐えられないだろう。けど向こうへ行かないと、本格的な治療は無理だった。

「ずっとここに置いてたら、ただ弱るだけだしなあ。頭が痛いよ」
「ベッドに細工すればいいでしょうに。その程度のこととも思いつきませんか」

「細工？ 何か手があるのか？」
タシユア先輩は冷ややかな感じだけど、ファールゾンは興味深々だ。

——やっぱりこの辺、おかしいかも。
ふつうだったら気付くような周囲の雰囲気、ファールゾンは本当に疎い。

「……やれやれ。ベッドに浮遊石を取り付けられればいいでしょうに。そうすれば、揺れを直接伝えずに済みます」

「なるほど！」

本気で感心しているのか、半分嫌みなのか……でもファールゾンの場合、たぶん本気だと思う。

「すぐに改良したのを、何とかして作らせないと」

ファールゾンが一人で息巻いてる。

「出力を計算しないとダメだな……あまり強すぎてもいけないし」

と、タシユア先輩が立ち上がった。

「これ以上用がないようでしたら、私は戻らせて頂きます」
冷ややかな声でそう言う。

Episode : 112

「いやちよつと待ってくれ、まだ用事が」

「何です」

出て行きかけた先輩が立ち止まって振り向いた。

「えーとそのだから、さっき言ってた生体情報」

「そうでしたね」

あまり気が進まなそうだけど、でも先輩は嫌とは言わなかった。
たぶん「それで 그레이シアに役立つなら」って思ってくれてるんだ
ろう。

「ですが生体情報は、ここでは取れませんからね。これ以上居ても
意味がありませんから、失礼します」

「あ、待ってくれ、もうひとつ」

「まだあるのですか」

先輩がうんざりした声で返した。

「早く言っして下さい。私も時間が余っているわけではありませんの
で」

「いやその、 그레이シアが、傍に居てくれないかって…… 그레이ス
と 타슈아의両方に」

思わず先輩と顔を見合わせた。

「そんなに精神的に不安定になっているのですか？」

「いや、見た目は落ち着いてる。ただやっぱり、見知った顔がない
と不安らしい」

話を聞きながら、そうだろうなと思った。

あたしだって、誰も知らないところに一人は嫌だ。それがまだ小

さくて具合のよくないグレイシアじゃ、なおさらだろう。

「……これから幸い冬休みですしね。当分は時間が取れますか」
タシユア先輩、行ってくれるみたいだ。でもグレイシアはすごく先輩に懷いてたから、来てくれたらとても喜ぶだろう。

「いつ行けばいいのです？」

「そっちの都合次第で構わない。ただ出来たら、ファクトリーまで来てもらえると助かる。あの子がまた不安になるだろうし」
ただ先輩が気にしたのは、少し違うところだった。

「ファクトリー？ 何ですそれは」

「あの、えっと……」
考えながら説明する。

「シユマーの本拠地が、あるんですけど……そこを昔から、そう言うんです」

「ほう」

先輩のどこか面白がるような、それでて蔑むような不思議な表情が何を意味するかは、あたしには分からなかった。

「ファクトリー、ですか。まあ順当なところでしょね。むしろ合っているくらいですか」

なんでそう言うかは、あたしも知らない。ただ昔からそう呼ばれていた。

けど、それがとてもいけないことの気がして謝る。

Episode : 113

「すみません……」

「ですから、謝れなどと言っていないでしょう。毎回毎回、よくそれだけ同じことができますね」

「あ、す——」

また謝りそうになって、今度はなんとかこらえた。

「で、そのファクトリーとやらはどこにあるのです？」

「なんだ、いつもうちの通信網に侵入してて、知らなかったのか？」
またファールゾンが横から余計なことを言う。

「私を知るわけないでしょう。通信網など、距離に関係なく繋がるものですよ。そんな常識も覚えていられませんか？」

「いやだって君、いつも我が物顔じゃないか。うちの連中が嘆いてたぞ」

「入られる方がどうかしています。仕事を忘れて宴会でもしているのでは？」

先輩とファールゾン、かなり相性が悪いんだと思う。話が違う方向へ行き過ぎだ。

「あの、先輩……？」

心配になって声をかけたら、冷たい視線が返ってきた。もしかすると先輩、分かっててファールゾンとやりあったのかもしれない。

「何です」

「えっと、あの……いえ」

視線に圧されて言葉が出てこない。それどころか、何を言おうとしてたかさえ分からなくなる。

「わざわざ声をかけるのですから、何か言いたいことがあったのでしょうか？」

「あ、はい……えっと」

何だったか必死に考えて、あたしはやっと思い出した。

「あの、ファクトリーの場所……南大陸です」
「なるほど」

何か言われるかと思ったけど、先輩は何も言わなかった。場所がちゃんと伝われば、それで良かったみたいだ。

「南大陸のどこかは知りませんが……大雑把に計算して、高速艇で片道4、5日ですか」

「はい」

それだけの距離、 그레이シアを移動させるのは決して簡単じゃない。何より途中で具合が悪くなったら、助けようがない。

かといってこのケンディクじゃ出来ることが限られてるから、ジリ貧なのは確実だ。

「やれやれ。あの子を移動させずに済めば一番ですが、そうもいかないでしょうしね」

先輩が軽くため息をついて、ファールゾンに訊いた。

「で、 그레이シアの容体は落ち着いているのですね？」

「ああ。今を逃したら、次はいつ移動できるか分からないな」

こういう言い方をするってことは、かなり安定してるはずだ。だったら、一刻も早く移動するに限る。

「あの、先輩は……出られますか？」

「多少荷物がありますから、それを揃える時間だけは頂きたいです」

がね」

少し考える。

出られないとは言っていないし、ちょっと時間が欲しいって言うだけだから、たぶん割とすぐ行けるってことだろう。

Episode : 114

「えっと、そしたら……1時間後で、いいですか？」

「もっと早くても構いませんがね。了解です」

話が決まる。

「で、僕はどうすりゃいいんだ？」

「待ってて。それがダメなら、誰かケンディクの船着き場に迎え寄こしておいて」

「……分かった。一足先に帰るよ。あの子が心配だ」
ファールゾンも立ち上がった。

「1時間に船着き場でいいですかね。では、また後ほど」

先輩がまず出て行って、ファールゾンも後に続く。

あたしも最後に戸締りして部屋を出て、隣の学院長室に声をかけた。

「あの、すみません、隣……ありがとうございました」

「いえいえ、話が済んだようで良かったですね」

学院長がにこやかに言う。

「で、まだどこかへ？」

「え……なんで、分かるんですか？」

隣の部屋の声って、ここまで聞こえるんだろうか？

けど学院長が笑いだした。

「大丈夫ですよ、あてずっぽうです。ただこの間から、あなたの側で立て込んでいるようですからね。そうかなと思ひまして」

「すみません……」

ほんとにこのところ、迷惑をかけっぱなしだ。
頭を下げると、学院長に頭を撫でられた。

「気にしなくて構いませんよ。カレアナにはずいぶん借りがありますから」

「借り……」

母さん、いったい何をしたんだろう？
首をひねるあたしに、学院長が言った。

「で、あなたは行かなくていいのですか？」

「——あ」

先輩と待ち合わせしてるのに、こんなところでのんびりなんてしてられない。

「ええと学院長、すみません、これからしばらく……また、留守にします」

「分かりました。手配しておきますよ」

学院長が請け負ってくれる。これなら安心だ。

「さ、行つてらっしゃい。何かあったら連絡でも下さい」

「はい」

学院長室を後にする。

寮はここからかなりの距離だ。まず1階へ降りて、図書館と食堂の前を通り過ぎてからじゃないと、辿りつかない。

しかもあたしの部屋は寮の上の方だから、登って降りてそれから船着き場となると、移動だけでけっこうな時間だった。

——少し遅めの待ち合わせにしておいて、良かったかも。

そうじゃなかったら、遅れてたかもしれない。

もっともそうは言っても、用意するものはあんまりなかった。何しろ自分の実家へ行くのと一緒に、だいたい物は向こうにも揃ってる。どっちかっていうと知らない家へ行くタシユア先輩の方が、用意するものが多そうだ。

もっともあの先輩だと、あんまり荷物を持たなそうだけど……。

でも来てくれないんじゃないかと思ったから、良かったなと思う。グレイシアもきつと、喜ぶはずだ。

まず同室のナティエスに置き手紙をして、それから武器と読みかけの本、冬休みの課題を持って部屋を出る。

あと出来たら、イマドに知らせたかった。

ただ、居場所が分からない。彼はあたしの居場所が分かるけど、あたしからは無理だ。

さすがにこの広い学院を、探しまわるヒマはなさそうだった。だから仕方なく、荷物だけ持って歩き出す。

——けど。

寮を出た先、食堂の前辺りに、こっちを見てる人影があった。あたしより頭一つ高い、ダーティーブロンド。

「イマド、どうして？」

「だってお前、呼んだろ？」

琥珀色の瞳に覗きこまれて、なんだかちょっとときどきする。

「どっか行くのか？」

「うん……ほら、あの子のこと」

あの廃棄施設であったことを、イマドには話していた。シュマーのことを話すなんて本当はよくないと思ったのだけど、どうしても黙っていられなかった。

でもイマドは嫌がったりしないで、いろいろ聞いてくれて……。

「荷物、持ってやろうか？」

「え？ あ、このくらい、平気……」

「るっせ、貸せ」

いって言ったのに、荷物を持って行かれた。

「どこ行くんだった？」

「えっと、船着き場……」

「そか」

2人で並んで歩きだす。

「ケンデイクか？」

「今はそこだけ……最後は南大陸まで、行くと思う」

「遠いな」

あたしの言葉に、イマドが短く言った。

「ごめん……」

「お前が謝ってどーすんだよ。てか、行かなきゃダメなんだろ」

「うん……」

行きたくないな、と思った。

なんていうか、グレイシアのところが嫌なんじゃなくて……ずっとこうしていたい。

Episode : 116

「——南大陸つてえと、当分留守だな。んでも今年は叔父さんところ行かねえから、すれ違いはねーか」

「え、行かないの？」

ちよつと嬉しくなる。

でも行けない理由に思い当って、あたしは下を向いた。

「ごめん……そうだよ、行けるわけ、ないよね……」

「気にすんなって。つかお前いなきゃ、あの町今頃全滅してるって」
「うん……」

イマドがいつも帰ってるルアノンの町は、いまでも非常事態の最中だ。

最近聞いた話じゃ、まだゲリラ戦が続いてるっていう。ただ本格的に攻勢をかけるところまでは行っていないくて、ロデステイオ軍が根城に出来ないように嫌がらせするに留まっているらしい。

それに幸いまだ地下通路と避難先は見つかってなくて、町のみんなは無事だそうだ。

でも避難が長期になってきてるから、さすがに子連れの家なんかは別の場所へ引っ越してるとも聞いた。たしかネミちゃんとそのお母さんのアーネストさんも、今は三姉妹の真ん中、ヘイゼルさんの農場へ身を寄せているはずだ。

こんな状態で、帰れるわけがなかった。

「みんなは……元気？」

「ああ。ユーニス姉辺りは、相変わらず写影機片手に走り回ってるな。おじさんも医者だから、仕事にや事欠かねえし」

「そっか……」

それがいいのかは分からないけど、でも何もすることがないよりはマシだろう。

「にしても、シエラで休みつてのは何年振りだ？ ガキの頃はそうだったけど、あんま覚えてねーんだよな。新年の騒ぎとかあったっけか？」

「えっと……ある、かも」

たしかシエラじゃいつも、年末最後の日はパーティーをしてたはずだ。

「んじゃご馳走食えるか。つかよく考えたら、俺今年はなんも作らなくていいってやつか？」

イマド、何か違うところに感動してる。

「なんかすげえ……俺、今度からルアノン帰るのやめっかな」

それっていいんだろうか？ 何かちょっと違う気がするけど……。でもこういう展開だとすると、休みの間にイマドの作ったもの、食べられなそうだ。

——食べたかったんだけどな。

ちよつとがっかりして下を向く。

「どした？」

「え？ あ、うん、何でもない……」

「ウソつけ」

言い繕ったはずなのに、その場で見抜かれた。
イマドが立ち止まる。

「あー、そゆことな。つか、そんな心配すんなって。そんならいなら作っから」

「え、でも……」

いま嫌がってたのに、頼むなんて出来るわけがない。

Episode : 117

けどイマドのほうは、何も気にしてないみたいだった。

「いいっての。何が食いたい？ 今から仕込んでやるよ」

「え……ごめん、分かんない……」

あたしが料理はまったく分からないのイマドも知ってるはずなのに、なんで訊くんだろう？

けどイマドのほうは、分かかってて訊いたらしい。

「んー、リクエストあったらって思ったけど、やっぱり別にねーか。んじゃテキトーにやっとくわ」

「うん」

それにしてもイマド、また料理の腕を上げたんじゃないだろうか？ 正直ここまできたらシエラなんてやめて、町でコックだってやってけると思う。

ただ彼の場合トラウマがあるから、ちょっと無理そうだけど……。

あれがいいなの、ここで売ってるだの、イマドのそんな話を聞きながら建物を抜けて、船着場への坂を降りていく。

栈橋には、もう人影があつた。

「やれやれ、保護者まで同伴ですか？」

「ただの荷物持ちですって」

タシユア先輩の言葉にもまったく動じないで、イマドが平然と返す。

「甘やかしすぎでしょうに」

「んでも、俺だけ手ぶらじゃカツコつかねえんで」

そのまま続くかな、と思ったけど、どういうわけか話はそこで終わってしまった。イマドとタシユア先輩の顔を見たけど、どちらもこれ以上言い合う気はなさそうだ。

「……行ってくるから」

「なんか作つとくわ」

短くそれだけ交わして、あたしは船の中に、イマドは元来た坂を引き返す。

後からタシユア先輩も乗り込んできて、そのあと少しして船が動き出した。

時計を見ると、待ち合わせの時間より少し早い。

たぶん船の時刻表の関係で、ひとつ早い便に乗ってしまったんだろう。けど遅れたわけじゃないから、別にいいかなと思った。

冬のせいか少しゆれる船は、でもすぐにケンディクの波止場へ付く。

「グレイス様」

いつも手際のいいドワルディが降りたところで待っていた。

「病院なんでしょう？」

「はい。行かれますか？」

「もちろん」

あたしの答えを予想してたみたいで、すぐに車が呼ばれた。

「……特定の相手にだけ、至れり尽くせりですこと」

タシユア先輩が冷たく言う。

グレイシアをあんな目に遭わせて、それなのに、って言いたいんだろうと思った。

車が走り出す。

シユマーが新しく建てた病院は、東区と行政区の間辺りになる。この間テロのあった病院の、ちょうど反対側だ。

東区の間は大きい病院がなかったのもあって、地元は喜んでらしい。この辺は本当に、抜け目がないと思う。

ただその「地元還元」がオマケっていうのが……。

トラムなんかを横目にしながら、ケンディクの町を走り抜ける。ただもう冬のせいだろう、人通りは他の季節より少なかった。

そのまま病院へついて、車が裏手へと滑り込む。

「——研究棟という触れ込みだったはずですがね」

タシユア先輩が鋭く言った言葉に、あたしは何も返せなかった。確かにこの病院、いわゆる患者さんを診る建物だけじゃなくて、「研究棟」と呼ばれる施設が裏手にある。

ただ実際には研究じゃなくて、あたしたちシユマーの医療棟だ。研究もしてるから間違いじゃないけど、けしてそれがメインじゃない。

その一角で、車が止まる。

「こちらでございます」

ドウルデイの案内で低い建物へ入って2階へ上がると、すぐのところグレイシアの部屋だった。南側の、一番明るくて暖かい部屋を用意してくれたらしい。

少しためらって……思い切ってノックしてみる。

「どうぞ」

聞こえてきたのは意外な声だった。

「――母さん？」

言いながらドアを開ける。

「何よ、あたしが居ちゃいけないみたいじゃない」

「そうは言ってないけど……」

ただ、話は確実にややこしくなったと思う。

「けど、どうしてここに？」

大体が母さん、ひとところに落ち着かない人だ。いつだって世界中を駆け回ってて、捕まえるのは容易じゃない。なのにそれが自分から居ついてるんだから、異常事態って言っている。

けど母さんの答えは予想外だった。

「どうしてっていうか、あたしが傍に居れば、好き勝手には行かないでしょ」

「それはそうだけど……」

確かにシュマーのトップの母さんが傍にべったりくっついてたら、何か手出しなんて不可能だ。

――そこまで考え付く頭があった、つてのには驚くけど。

何でも行き当たりばったり出たとこ勝負の母さんが、こんな風にあちこち事前に手を回すなんて、滅多にない話だ。

Episode : 119

と、ベッドの中の金髪の子、グレイシアがこっちを向いた。
華やかな笑顔がその顔を彩る。あたしたちが来たこと、喜んでく
れてるらしい。

「よかったわねー、友達来たわよ」

それは微妙に違うんじゃないかと思ったけど、あたしは言わなかつた。ここでそんなことを言ったら、絶対にグレイシアが傷つく。

タシユア先輩がベッドの傍に歩み寄った。

「元気そうで何よりです」

その言葉とともに頭を撫でられて、グレイシアが安心しきった表情になる。

胸が痛かった。

ずっと酷い目に合わされてきたのに、それでもこの子は周囲を信じてる。前のことなんかなかったふうに、無条件に信頼を寄せてくれる。

ただ逆に言えば……それだけもう、余裕がないってことだ。助け
てくれるならどんな相手でもいい、そこまでこの子は精神的にも体
力的にも追い詰められてしまってる。

「……ごめんね」

謝ってもどうにもならないと知りつつ、また謝る。この子の顔を
見るたび、謝らずには居られない。

けど、グレイシアの不思議そうな顔。そして、悲しそうな表情に
なる。

「ルーフエィア、この子ちゃんと、分かってるから」

「え……？」

あたしが意味が分からなくて困ってたら、母さんが説明してくれた。

「だからね、この子、周りの言ってることや考えてることは分かるの。当然あなたの思ってることも、この子は分かってるわ」

「あ……」

だとしたら、この子はごく大まかにだろうけど、自分が何をされたかも分かってるんだろう。

その上で、あたしたちを信じてくれてるんだと気づく。

「ありがとう……」

抱きしめたいくらいに愛おしかった。子供特有の疑われない心といえどそれまでだけど、そんな言葉で終わらせたくない。どう言っているのか分からないほど、綺麗で光る心だ。

あたしの思いが伝わったんだろう、グレイシアが微笑む。とても無邪気で、温かい笑顔だった。

その場でベッドに突っ伏して泣いてしまいたかったけど、何とかこらえる。そんなことをしたらまた、グレイシアが心配するだろう。

——何か、話さなくちゃ。

きつとこの子が望んでるのは、楽しい時間だ。だから黙ってたらダメだ。

「えつと……何がいいかな。えーつと……海って、見た？」

話題が思いつかなくて、自分でも情けないくらいつまらないものを口にする。でもグレイシアは、興味を惹かれたみたいだ。碧い瞳が輝く。

ただ何か言いたそうなのに、言葉を知らないから何も言えなくて
……そのうちあたしのほうに手を伸ばしてきた。
小さな手を握る。

Episode : 120

(うみ?)

明確な言葉ではないけど、でもあの時と同じように意思が伝わってきた。

「うん、海。青いの。見た?」

グレイシアが不思議そうな顔をする。

「えーと……外へ出たとき、見たと思うんだけど」

(そと?)

どうしよう、と思う。この子は単語とイメージや物とが結びついていないから、どうもよく伝わらない。

「その……水から出て、そのあと、すごく明るい場所に行ったでしょ?」

(——そと)

やっと認識したみたいだ。この子が見た、外の様子が伝わってくる。

「そう、そこ。で、乗った船が浮いてたのが海なんだけど……」

(——?)

今度は伝えることが出来なかった。グレイシアはずっと毛布に厳重に包まれてて、あまり外の様子を見ていない。

(うみ?)

「えーとね、すごく広いの。見えなくなる先まで広くて、青くて、全部水で……」

あんなに分かりやすいものののに、どうしても伝えられない。一目見たらそれだけで分かるのに……。

「そしたら 그레이シア、元気になったら……海で、遊ぼう？」

(！)

遊ぶ、という言葉に 그레이シアが反応した。

けどそれまで黙ってた タシユア先輩が言う。

「——ルーフエア、発想は悪くありませんが大丈夫なのですか？
あたしはいまも、あんまり泳ぎが上手じゃない。だから先輩、心配になったんだと思う。」

けど波打ち際で遊ぶくらいなら、さすがに平気なはずだ。

「あの、入らなければ……」

「なるほど。ですがあなた方2人で行くのは、あまり勧められませんかね」

先輩に釘を刺された。

ここまで信用がないと、ちょっと情けなくなる。けど普段からばーっとしてるあたしじゃ、反論できない。

그레이シアは不思議そうだった。

(……ダメ？)

数少ない語彙——って言うんだろうか——でそう訊いてくる。

「んと、ダメじゃなくて……みんなで、って」

この子の目が輝いた。

ずっと水槽の中に一人だった反動なのか、그레이シアは誰かに触れているのが好きだ。そして人がたくさん周りに居るのも好きで、だからみんなで行くのが嬉しいんだろう。

Episode : 121

(いく! うみ!)

「うん、行こうね。でも病気が治ってからかな……」

途端にこの子が不服そうな顔になった。すごく怒ってる感じた。

「でも、けど……」

「しょーがないわよ、 그레이シア」

困ってるあたしの後ろから、母さんが言う。

「だいいちベッドから起きられるようにならなきゃ、そこまで行けないわよ? ドア開けたら海ってわけじゃないんだから」

(——!)

그레이シア、そのことに初めて気がついたらしい。

(うみ……)

「大丈夫、見られるわよ。だからちゃんと周りの言うこときいて、しっかり直さないとね」

母さんの言葉にあっさりまるめこまれて、 그레이シアが小さくうなずく。

聞き分けのいい子だな、と思った。

周りの言うことを年の割にちゃんと聞くし、がんばり屋だし、素直だ。きつとふつうに育ってたら、とても可愛がられてただろう。

なのに、こんな酷い目に遭わされて……。

うつむくあたしの頭を、母さんがぽんと叩いた。

「だいじょぶよ、これからはふつうの子と同じように過ごせるから」
「……うん」

そうだと思う。そうじゃなくちゃ困る。

と、 그레이シアがあたしの手を強く握った。こっちに向かって話せと怒ってる。

「ごめんね」

慌ててあたしは謝った。小さいこの子には、きつと無視されたみたいに見えるはずだ。

（うみ？）

もっと話せと、 그레이シアがせがんでくる。

「うん、行こうね。えっとね……たまに、貝とか落ちてるの」

（かい？）

まだどう伝えようか悩む。絵本でも出したほうがいいんだろうか？ けど、今すぐには出せないし……。

「貝は……綺麗なの。平たいのとか、巻いてるのとかあって、内側がきらきらしてて」

（——？）

全く伝わってない。

「んと……じゃあ、後で持ってくるから」

（——）

嬉しそうな笑顔にほっとする。小さい子は、こういう顔をしてなくちゃダメだ。

でもさっき母さんが言ったとおり、これからは平気かな？ と思う。

ただそのためには、この難病が治らないといけないのだけど……。

Episode : 122

「用意が出来たぞ」

乱暴にドアを開けて、ファールゾンが部屋へ飛び込んできた。

「まったく。病気の子が居るんだから、もう少し静かにしなさいな」
「す、すみません」

いつも思うけど、ファールゾンはホントに母さんに弱い。

ただ理由は知らなかった。どうも昔何かあったらしいのだけど、
実の姉のサリーア姉さんも教えてくれない。

母さんが立ち上がった。

「じゃ、行きましょか。数日かかるけど、まあ仕方ないわ。——グ
レイシア、ベッド移るからそのつもりでね」

ふだんの母さんからは信じられないくらい、やさしく話しかける。
すぐに車輪のついた簡易ベッドが運ばれてきて、グレイシアが移
された。

「母さん、魔方陣は？」

「あー、あれ使い勝手悪いから、別のものにしたわ」

言って母さんが、グレイシアが首に掛けているものを指さす。不
思議な色の石だ。なんとなく魔力石に似てるけど、でも違う感じだ
った。

「何の……石？」

「慈悲石。見たこと無い？」

平然と母さんは言うけど、文献にしか名前が無いような珍しいもの、
見たことあるわけがない。というか、うちにあったというのが
驚きだ。

「ほう、これが」
タシユア先輩も見ただことなかったみたいで、興味深そうに石を見
てる。

「元々あんまり無いのよね。今人工的に作れないか、研究してると
こ」

「そちらの事業は勝手にやってください。全く興味ありませんので」
石に視線を注ぎながら言う先輩、取り付くしまも無い。

それにしても、こんなに便利なものがあつたんだと思う。こう
いう持って歩けばいいだけの石がたくさんあれば、大掛かりな魔
陣は全く必要ない。

まあそうなると、魔方阵描く仕事をしている人が失業しちゃいそ
うだけど……。

ともかく石の効果はかなり強いみたいで、グレイシアはベッドを
移されても平気そうだった。これならあと、船の揺れを抑えるよう
にしておけば、船旅でも耐えられるだろう。

そして南大陸にあるシュマーの本拠地まで着けば、もっと本格的
な治療が出来る……はずだ。

と、不意に呼ばれた気がしてあたしは見回した。
グレイシアの碧い瞳が、こっちをまっすぐ見てる。

「……ごめんね」
きつと、傍についていないのが気に入らなかつたんだろう。
横に立って手を握ってあげると、グレイシアが満足げな表情にな
った。けど、すぐに離す羽目になる。

「すまない、グレイス。移動するのに危ないから離してくれ」

「……分かったわ」

グレイシアがまた怒るかと思ったけど、何も言わなかった。いい子だから聞き分けたみたいだ。

Episode : 123

広めに作られた廊下を進む。

移動したらグレイシアに負担じゃないかと思っただけど、とりあえずは大丈夫そうだ。珍しいんだろう、周囲をきよろきよろと見回してる。

外は季節の割に暖かった。天気も良くて、空が澄んでる。

グレイシアがあたしを見て、手を伸ばしてきた。

（あれ、なに？）

碧い瞳がまっすぐ上を見上げている。

「空。あの青いのが全部、空なの」

グレイシアの瞳が見開かれる。驚いたらしい。明確な言葉にはなっていないけど、あまりの広さに呆然としてるのが伝わってくる。

考えてみればこの子は、水槽の中と水槽の天井しか知らなかったわけで……世界の広さは想像を絶するんだろう。

（あれは……？）

「雲。いろんな形があるの」

あたしたちの知る、当たり前前の世界。それがこの子には、こんなにも遠かった。

「グレイス、もう行きたいんだがいいか？」

「あ、うん」

あたしとグレイシアが手をつないでしまったから、待っていてくれたらしい。

ベッドがまた動いて、大型の車の後部に乗せられる。外が見えな

い造りで、グレイシアはちよつと不満そうだ。

この病院から港までは、そんなには遠くない。シエラからケンデイクまでかなりの時間だ。だからすぐに着いて、グレイシアが船に寄せかえられる。

「あ、ほら、グレイシア、海！」

（うみ……？）

この子の視線があたしの指をたどって、また見開かれる。青が薄青に変わった下、どこまでも広がる碧。

（ぜんぶ……？）

「うん、全部、海。広いよね……」

あたしも最初見たとき、同じことを思った。

遥かに広がる碧。どこまでも続く碧。

世界中どこにでも繋がってるって頭では分かっているけど、実感がわかないほど広い。

「……だから、グレイシアを乗せたいんだが」

「あ、ごめんなさい」

どうもあたしたち、移動の邪魔ばかりしてるみたいだ。

「ちよつと我慢してくれ」

ファールゾンが言っで、グレイシアを抱き上げた。そして歩き出そうとして……よろける。

けど横からさつと手が出て、2人を支えた。

Episode : 124

「——まったく。見栄を張るとろくな事が無いのが、分からないのですかね」

言いながら、ずり落ちかけたグレイシアを先輩が抱いた。

「可哀想に、驚いて怯えて。ただでさえ具合が良くないのに、余計なストレスを与えてどうするのです」

グレイシアも今のはかなり怖かったみたいで、ファールゾンの腕には戻ろうとしなかった。

「大丈夫ですよ、私が運びますから」

タシユア先輩がそう話しかけて、抱いて船に乗り込む。

「部屋はどちらです?」

「あ、こっちだ」

ファールゾンが慌てて先に立って、今度はつま先をぶつける。

「何してんのよ」

さすがの母さんまでが呆れ顔だ。

「い、いえ、急ごうとして……うわ」

今度は何も無いところで躓いてるし。

「——もういいわ。あなたの運動神経のなさ、忘れてた。タシユア、こっちょ」

結局母さんが先に立った。

グレイシアは、タシユア先輩なら大丈夫だと思ってるらしい。安心した顔で抱かれながら、船の中を不思議そうに見ている。

「ここよ。あと並びがあたしたちの部屋だから、好きなとこ使って母さんが案内してくれたのは、舳先のほうの一番いい部屋だった。タシユア先輩も部屋へ入って、 그레이シアをベッドに降ろそうとして——でも 그레이シアが降りようとしなかった。必死で先輩にしがみついている。」

「 그레이シア、降りてください。その体勢だと身体によくありませんよ」

それでも 그레이シアは、降りようとしなかった。

「気に入られたわねー」

「私は腹黒くありませんからね。—— 그레이シア、私はこの部屋に居ますから、ベッドに降りてもらえますか？」

それを聞いて、やっと 그레이シアがベッドに降りた。

タシユア先輩がそっと毛布をかける

「辛くありませんか？」

嬉しそうに 그레이シアがうなずく。その頭を、タシユア先輩が優しく撫でた。

安心したんだろう、 그레이シアの目がだんだん閉じていく。そしてじきに眠ってしまった。

「移動して疲れたかしらね」

「でしょうね」

言ってタシユア先輩が、手近な椅子に掛けた。

「この部屋を使わせていただきますので」

「分かったわ。ベッド運ばせる？」

「可能ならお願いします」

母さんがうなずいて、船の人たちに声をかける。

Episode : 125

船の中が急に騒がしくなった。何人もの船員さんが隣の部屋へ入っていった、掛け声をかけてる。

「ちょっとあんたたち、静かになさい！」

「も、申し訳ありませんっ！」

「それもうるさい！」

言い合う母さんたちを見て、タシユア先輩がため息をついた。

「ご自分がいちばんうるさいようですが？」

「あらそう？」

タシユア先輩に言われても母さん、まったくこたえてないし。その母さんがあたしのほうを見て言う。

「ルーフェイア、あなたは隣の部屋ね。あたしと一緒にいいでしょ？」

「え……」

思わず答えに詰まった。

「何よ、イヤなの？」

「そういうわけじゃ……」

母さんと一緒にイヤじゃない。けど、一緒に居るとなんか疲れる。

「そそ、あんたに似合うと思ってね、買ってきたのよ服。あとねほら、こつちあんたにと思ったけど、グレイシアに良くない？」

「部屋でやったら……？」

さすがにあたしは途中で遮った。

母さんが出してきたのは、綺麗な細工のされた髪飾りだ。ただ全体的に装飾の造りが丸い感じだから、確かにグレイシアに似合うかな？と思う。

でも、何もここでやることじゃない。そう思ってたなら視線を感じた。

「……グレイシア？」

どうも話し声で起きたらしい。

そして強い視線から、「内容を話して欲しい」という意思が伝わってくる。

「えっとね……」

この子の手を握ってから、あたしは話した。理由は良くわからないけど、グレイシアにはこの方が良く通じる。

「母さんが、グレイシアに……髪飾り買ってきた、って」

（——！）

グレイシアの表情が変わる。髪飾りは分かってないけど、何かもらえるのだけは分かったらしい。

「えっと……見る？」

（みる！）

あたしの傍へ来た母さんがにやにやした。

「ほら見なさい、こんなに喜んでるのに、後でとか言っんじゃないの」

「それ違うと思う……」

たまたまグレイシアが喜んだっただけで、母さんが時と場合を選んでないのは否定できないんじゃないだろうか？

Episode : 126

「ともかくほら、これ見せてあげて」

「あ、うん」

何故か母さんが私に髪飾りを手渡した。

——直接渡せばいいのに。

そう思いながら、グレイシアの目の前に差し出す。

「……どお？」

（——♪）

碧い瞳が嬉しそうに細められた。

「えつと……付ける？」

（つける？）

ああそうか、と思った。この子はずっと水槽の中で、服一つなかったから、なにかを身に付けるということ自体を知らない。

「えつとね、待って……」

弱いこの子を傷つけたりしないよう、そつと髪に飾る。それから洗面台から手鏡を取ってきて、グレイシアを映した。

（♪♪）

もしかして鏡が分からないんじゃないかと思ったけど、それはなかったみたいだ。きつと水槽が時々鏡みたいになるから、それで覚えただろう。

そのとき汽笛が鳴って、びっくりとグレイシアが首をすくめた。

「ああ大丈夫よ、船が動くだけだから。ほら、この間も聞いたでし

よう?」

母さんの言葉に、グレイシアがほっとした顔になる。

「窓から海が見えるかしらね? 寝てるからダメ?」

「ダメみたい」

立ってれば窓の外を見下ろす格好で海が見えるけど、ベッドの上のグレイシアは、空しか見えないと伝えてくる。

「そう……ごめんなさいね、グレイシア。今度は見えるようにしくわ」

母さんに頭を撫でられて、またグレイシアが嬉しそうに目を細めた。

そしてだんだんとろんとしてきて、また眠ってしまう。

「ホントに疲れてるわね、この子」

「当たり前です。第一、そうやって疲れている子を大声で起こしてどうするのです」

「そういうつもりじゃなかったんだけどー」

先輩と母さんの話を聞いていると、どっちが年上だか全く分からない。

「そういうつもりで済むのなら、殺人も言い訳で済むでしょうに」

「だれも殺人なんてしてないじゃない」

ほとんど子供の喧嘩だ。

「母さん、もうやめようよ……」

「え? あたし何もしてないわよ?」

答えを聞いているうちに、情けなくなってくる。

Episode : 127

「母さん、もうやめようよ……」

「え？ あたし何もしてないわよ？」

答えを聞いているうちに、こっちが情けなくなってくる。

「ともかく、静かにしようよ……」

「そうね」

なんで母さん、娘のあたしにたしなめられてるんだろう？

タシユア先輩がやれやれという風にため息をついた。

「全く、シユマーというのはどうして徹頭徹尾、そこまで非常識なのです」

「じ、ごめ——」

「あら、ヒドいこと言うわね。あたしはともかく、この子は十分常識的よ？」

あたしの言葉を母さんが遮る。

「おや、ご自分の非常識は認めますか」

「何言ってるの、あたしはごく普通よ」

「……普通が裸足で逃げ出すでしょうね」

聴いてて頭が痛くなるようなやり取りだ。しかもその原因が、自分の親っているのが……。

「母さん、隣の部屋行こう」

仕方なく誘う。母さんと二人って言うのは疲れるけど、ここでタシユア先輩と一緒によりはマシなはずだ。

「あーら、あなたから誘ってくれるなんて嬉しいわあ」

「いいから、行こう……」

母さんが嫌いつてワケじゃないし、けっこうできる人だと思うけど、なんでこんなに世話が焼けるんだろう？

「まったく、娘に面倒を見てもらってどうするのですか」

「いい娘でしょー。あなたも要る？」

「要りません」

またワケのわからないやり取りになった。

「母さん、ほら」

ちよつとでも早く母さんをここから出したくて、背中を押す。

「じゃあねー」

母さん、背中押されながらタシユア先輩に手を振ってるし……。
ともかくこれ以上騒ぎが起こらないうちにと、隣の部屋へ急いで入る。

「さー、さっきの続きしましょ。ほら、買ってきたのあるんだから
タシユア先輩じゃないけど、ため息をつく。どうして母さん、こ
うメゲないんだろう？」

「あらどしたの？ 見ないの？」

「見るけど……」

と、母さんが澄まして言った。

「このくらいの楽しみないと、船旅の間滅入るわよ？」

「あ……」

いつも考えなしの母さんだけど、今回は本気でちゃんと考えてたらしい。

「えっと……これ？」

あたしは、母さんが置いてきてくれたものを手に取った。

Episode : 128

船旅は順調だった。どこかで悪天候に遭いそうなものだけど、運が良くて晴天続きだ。

「そろそろ見えるわね」

「うん」

母さんと2人、舳先に立って言う。

このまま行けば、あと少しでシュマーの本拠地のある南大陸に着くはずだ。

――気が重いけど。

シュマーの本拠地は大体は大丈夫だけど、一部が想像もしたくないような人たちの棲家だ。その人たちと顔を会わさなきゃいけないのが辛い。

もっとも姉さんは母さんはしょっちゅう顔を会わせてるから、あたしなんて楽なほうだろうけど……。

ただ今回は、そういう人たちの真ん中だ。だから想像するのもちよつとイヤだった。

そんなあたしの考えが分かったみたいで、母さんが肩をすくめる。

「ま、何とかなるわよ」

「うん……」

あたし一人じゃないから平気だと思うけど、それでも気が重い。

「ああ、見えてきたわね」

「ほんとだ……」

世界で一番いやな場所が、どんどん近づいてくる。

見えてきたのは例の廃棄施設近くみたいな、荒れ果てた港だ。ただ船はそこには入らないで、脇の崖のほうへ回りこんでいく。

狭い岩と岩の間へ、船が入り込んだ。

「ホント、毎回よくぶつけないもんだわね」

「そりゃ、プロだし……」

母さん、なに考えてんだろう？

シュマーの本拠地はあの港からも行けるけど、だいたいはこの崖の奥だ。隙間の先が洞窟になってて、そこに船が停泊できるようになってる。

洞窟内だからほとんど波の無い水面を船がゆっくりと進んで、船着場に止まった。

「さてつと、 그레이シア連れてこなくちゃね」

「うん」

見ると下の船着場に、人がたくさん並んだ。たぶん 그레이シアのために、いろいろ準備してくれてるんだらう。それを横目で見ながら、あの子の部屋へ行く。

「入っていいかしら？」

「どうぞ」

그레이シアが懷いてしまったせいで、タシユア先輩はこの部屋に詰めつきりだ。

「具合、どお？」

母さんの言葉に、 그레이シアが笑顔を見せる。調子がいいみたいだ。

Episode : 129

「着いたから降りるわよ。下にまたベッドが用意してあるから、そこまではタシユアに抱いてもらいなさいね」

ぱつとグレイシアの顔が明るくなった。タシユア先輩に抱っこしてもらえるのが嬉しいんだろう。

先輩のほうは何を言うでもなくて、ただこの子の頭を撫でている。

——クセなのかな？

数えたわけじゃないから分からないけど、タシユア先輩、しょっちゅうこの子の頭を撫でてる気がする。それも髪の毛をぐしゃぐしゃにしたり、ただ頭に手を置いたりじゃなくて、髪を整える感じで丁寧に撫でる。

何か褒めたり抱きしめたりする代わりに、撫でてる感じだった。同時にちよつとだけ、いいなと思う。あたしの年じゃもうああいうことはやつてもらえないだろうから、なんだか羨ましい。と、母さんがあたしの顔を見た。

「やってあげよか？」

「やめて……」

こんなところで母さんに頭を撫でられたりしたら、何を言われるか分からない。

「えー、いいじゃない。撫でさせなさいよ」

なんでこう母さん、あたしのことやたらと構うんだろう？

「いいってば」

「何よケチ、減らないでしょ」
断ると拗ねるし……。

「まったく、どこの駄々っ子ですか」

「だって、ルーフェイアが撫でさせてくれないんだもの」

「私に向かつて駄々をこねられても困ります」

なんかもう、母さんが口を開くとため息しか出ない。

「母さん、降りようよ」

「ん？ ああ、そうだったっけ。タシユア、その子お願い」

すっかり忘れてたくせに、あっさり先輩にグレイシアを押し付けて、母さんが歩き出す。

「母さん待つて、どこへ？」

「え？ だって降りるんでしょ？」

「そうだけど、まだ先輩が……」

部外者の先輩を連れてきておいて、自分だけさっさと行こうとするなんて、母さんどういう神経してるんだろう？

まあ言っただけ聞く人なら、苦労はしないだろうけど……。

タシユア先輩のほうはまるで何事もなかったみたいに、そつとグレイシアを抱き上げた。

「あ、先輩、こっちに……」

「大丈夫です、迷うほど複雑な構造でもありませんので」
言いながら先輩が歩き出して、あたしは慌ててドアを開けた。

「ありがとうございます」

「あ、いえ……」

お礼を言われて、ちょっとびっくりする。

Episode : 130

先輩がちらつとあたしを見て何か言われるかと思ったけど、結局何もなかった。

甲板へ出る。

魔光灯が付けられてるから、洞窟の中は暗くは無い。でも潮風がないから、ちよつと物足りなかった。

ただ弱いグレイシアのことを思うと、この方がいいのかもしれない。

グレイシアを抱いたまま、先輩は危なげなくタラップを降りて、用意されたベッドの脇まで行った。そつとグレイシアが降ろされる。

「……」

声の無い、でも不安そうな表情。

「大丈夫、一緒に……行くから」

さつと周りのスタッフに緊張が走った。まさかあたしが同行するなんて思ってたんだろう。

——シュマーのグレイス。

その意味をまた思い知る。

けど今は、あたしはそれをトコトン使うつもりだった。

ここでのあたしは、間違いなく権力者だ。すぐくイヤだけど、そのことは変わらない。でも逆に言うなら、あたしが望めば何でも出来る、ってことだ。

タベ、ベッドの中でずつと考えた。

ここはシュマーの本拠地だ。だから最先端の医療が受けられる。だけど……世界で一番怖い場所だ。

同じシュマーでも、大抵の人は概ね普通だ。傭兵家業をしてるから荒っぽい人が多いけど、でもそれだけだ。あとロシュマーと呼ばれる、シュマーの下になる人たちも、そんなに問題は無い。

——いろいろ壊れるけど。

備品の損壊は、シュマーの施設全部で、いちばん頭の痛い問題だ。何しろ荒っぽいから、いろんなものがすぐ壊れて修理代がバカにならない。

ただ、壊れたものは直せば何とかなる。怪我也時々あるけど、戦地での怪我は別として、あとは大した騒ぎにはならない。人間のほうが、よほど同族殺しをする。

けど本当にごく一部、ものすごく酷い人たちが居る。 그레이シアをこんな目に遭わせたのも、その人たちだ。

だいたい、研究者に多かった。

信じられないほど頭がいいせいか、他の人のことを完全に見下してて、何をしてもいいと思ってる。そうして何かもつともらしい理由を付けて、「実験」と称してとんでもないことをするのだ。

けど処罰しきれないのが痛いところだった。

性格には問題があるけど、彼らの技術と知識はシュマーに確かに貢献してる。研究を基にして生まれた技術や薬は世界中に売られているし、シュマーの業病にも挑んでる。

だから彼らが居なくなってしまうと、治療や何かで即座に困る。実際 그레이シアの治療をするのも、彼らだ。

ともかくそういうジレンマの中にあって……だからあたしがグレイシアについてるつもりだった。

シュマーの人間は、たまに例外はいるけど、通常はあたしの意志に反することは出来ない。つまりあたしがグレイシアの傍に居れば、この子におかしな真似は出来ないはずだ。

Episode : 131

ずっと母さんがあたしの隣に立った。

そして不敵な笑みで周囲を見回しながら宣言する。

「あたしも今回は詰めるわよ。誰が何と言おうと、グレイシアは総領家の子だしね」

あたしのとき以上の緊張が周囲のスタッフに走った。

——こう言えば、いいんだ。

母さんあんな人だけど、こういうところは感心する。もう15年くらい、このシュマーを預かってるだけの事はある。

母さんの言った「総領家の子」っていうのは、シュマーの人にとっては脅し文句に近い。

シュマーは主に3つに分けられる。

ひとつがよく噂でも言われる、傭兵家業をしているその名のとおりシュマー。

そして元はシュマーの中でもあまり戦闘に向いてなくて、後方支援に回った人たちが祖のロシュマー。

残るひとつが総領家だった。

総領家はグレイス・メイアの直系で、シュマー家の祖だ。ただ、いわゆる人間の中の「。。。本家」とはだいぶ違う。

例えていうなら、女王蜂と働き蜂の関係が近いだろう。理由は分からないけど、総領家はシュマーとロシュマーに支配力を持つ。

だから母さんがグレイシアを「総領家」と言い切ったことは、シュマーの人間からしてみると一大事だ。それだけで絶対に逆らえない

い。

まあグレイシアは子供だし大人しいから、困らせるようなことはないだろうけど……。

けどあの言葉があれば、シュマーの人間のほとんどは、間違いなくグレイシアに忠誠を尽くす。だからとんでもない一部にさえ気をつければ、嫌な思いをしないで済むはずだ。

それに仮にそうだった「一部」が何かをしようとしても、周りが今度は許さない。総領家の子に何も無いように、常に誰かが監視するだろう。

本当にこういうイザというときの立ち回りは、母さんは凄い。

「あの、グレイス様、その子を部屋へ連れて行きたいのですが……」
完全に及び腰で、白衣の人が声をかけてくる。母さんの言葉が効いてるらしい。

「うん、連れて行ってあげて」

「いえその、そこにおられると、その、危険……と言いますか」

「え？」

慌てて見回す。どこかに刃物でも落ちてただろうか？

「——ルーフエア、あなたがジャマなのですよ。その位置に居ては、ベッドが動かせません」

「あ……」

グレイシアを心配しすぎて、移動のジャマになってたらしい。

「ごめんなさい」

慌てて離れると、スタッフがグレイシアのベッドを動かし始めた。

「えっと、先輩は……？」

「私は――あの子の部屋までは、一応」

何か言いかけて、でも部屋まで行くなって言ってるのは、 그레이シア가先輩を見たからだろう。

Episode : 132

グレイシアたちの後を、ジャマにならない程度の距離でついていく。

「……清浄区？」

「はい」

行き先からそうかなと思ったけど、答えを聞いたときはちょっとため息をつきたくなった。

そこへ行くって事は、要するに重症ってことだ。もちろん見てて見当はついてたのだけど、改めて治療側から言われると、やっぱり辛いものがある。

けど、その思いを押し殺した。

グレイシアとあたしは、年は違うけど双子みたいなものだ。そのせいか、簡単に思っていることが伝わってしまう。だからあたしがここで不安がってたら、グレイシアはもっと心配になってしまうだろう。

嚴重に仕切られた何重ものドアをくぐって、しっかり手を洗わされて、特殊な魔法陣を通る。何でもこの上を通ると、人間によくないものをかなり消せるらしい。

——実験段階らしいけど。

ただそう長時間居るわけでないから、まず試してみると、母さんが設置させた。

けどグレイシアにはあまり良くなかったみたいで、ちょっとだけ身じろぎする。

「大丈夫なの？」

「す、すぐ抜けます」

ベッドの移動するスピードが上げられて、大急ぎで抜けた。心配で様子を見てたけど、グレイシアは大丈夫だったみたいだ。さつきちよつと動いた後は、大人しくしてる。

「す、すぐ部屋に着きますから」

「分かった」

母さんが脅したせいでスタッフがちよつと怯えてるけど、まあいいかなと思う。これなら絶対、あの子に何かしたりしないだろう。

連れて行かれたグレイシアの部屋は、あたしたちが良く使う、いちばん広い部屋だった。

でも道具がばたばたと運び込まれてるから、元は違う部屋を使うとして、急いで変えた感じた。これも母さんが「総領家の子だ」って言ったせいだと思う。

やわらかいベッドに、グレイシアが移された。

「……苦しくない？」

近寄って尋ねると、グレイシアがかすかにうなずく。

「何かあったら……すぐ言ってね？」

またこの子がうなずく。あたしになら伝わるのを、もう分かっているみたいだ。

ただあたしの場合、手を繋いでなくて伝わるかどうかが分からないけど……。

「あ、あの、グレイス様？」

「なに？」

横から声をかけられて答える。

「そ、そのですね……この子の治療を」

「あ、うん。ここ空ければいいの？」

確かにあたしがすぐ傍にいたら、細かい作業は出来ないだろう。

Episode : 133

立ち上がって、場所を空ける。

グレイシアが心配そうな表情を見せたけど、あたしがうなずくと分かったみたいだ。

「隣に、いるから。すぐ来られるから」

そう言って、ドア一つ隔てた隣室へ行く。

母さんも付いてきて——途中で立ち止まって言った。

「タシユア、あなたも一旦こっちへ」

「彼らだけにして、平気とは思えませんがね」

「平気よ」

言い切った母さんの言葉に、タシユア先輩が一瞬冷やかな表情になる。

隣の部屋は、さっきの部屋よりまだ広い。誰かに何かあったときに待機するための場所で、寝室も二つあるし、居間は教室くらいの広さがあった。

先輩が見回して言う。

「……贅沢ですこと」

「こうしとかないと、納得しないのよ」

母さんがまた肩をすくめた。

「まったく」

先輩が呆れた顔になった。

「まあ、やはり通常の人間とは異なるのでしょーうね。部外者の私が

居ても、誰も疑問さえ持たないのですから」

「持たないんじゃないくて、持てないの」

「――ほう」

面白がる先輩に、母さんがため息をつきながら言った。

「シユマーってそうなのよ。総領家の言うことには絶対服従になつて。まあ今回みたいな言うこと聞かないのも、稀に居るけど」

「なるほど、洗脳ですか」

「違つてば」

母さんが否定したけど、タシユア先輩は見下した顔だ。

「洗脳以外に、どうやれば絶対服従になるのです」

「本能」

あつさりした答えに、しばらく間が空く。

けど、これが真相だった。

「……やはり人間ではない、ということですか」

「一度も人間だなんて言つた覚えなし」

また子供のケンカみたいなやり取りが始まった。

「ともかくね、シユマーはそうなの。ああ、何でかは訊かないでよ？　ずっと昔からそうなんだから」

「代名詞ばかりで意味が分かりませんが」

母さんの言つてることより、先輩の言うほうがずっと大人に聞こえるのが情けない。

Episode : 134

「そもそも、何がそうなのです」

「だから、シュマーは総領家に絶対服従ってこと」

「なるほど。要するに最初から一歩も話が進んでいないということですか」

どう聞いても会話になつてるようには見えなかった。
けど母さん、そんなこと気にならないらしい。

「進んでないも何も、初めっからそうなんだもの、しょーがないじゃない」

「人類に通じる言葉でお願いします」

傍で聞いてるだけで疲れるやり取りだ。

ただ、代わりに説明する気にもならなかった。あたしじゃヘタすると、説明が母さん以下だ。

「……まあ、シュマーがどうであれ、私には関係ありませんしね。それより、帰りの船を出して頂きたいのですが」

「え、もう帰るんですか？」

今付いたばかりなのに、さすがに早すぎの気がする。

けど先輩は本気みたいだった。

「確かにここまで来るとは言いましたが、別にずっと居るなどとは言っていないですよ？　だいいち付き添うとして、いつまでいればいいのです？」

「それは……」

確かにグレイシアの容態が安定するまでにしても、いつまでかかるか全く分からない。

「来るだけでもかなり時間がかかっていますからね。突然で後始末も不十分ですし。早く帰りたいのですが」

「どっちにしても、今日はムリよ」

母さんが割り込んだ。

「何故です？ 船が一艘しかないわけでもないでしょうに」

「無理やり動員すればね。でも整備が不十分。今日乗ってきたのも異音がしたっていうから、整備しないと無理だし。他の動けるのは行き先が決まってるし。明日——できたら明後日にしてもらえる？」
珍しくまともな説明だ。

「……仕方ありませんか。遅くとも明後日には発てるのでしょーね？」

「それは保証するわ」

どうやら話がまとまったらしい。

でも、ずいぶん忙しいなと思う。これじゃゆつくりする暇なんてなさそうだ。

それにグレイシアが心配だった。あたしたちが居る間はいいだろうけど、2人とも居なくなったらがっかりして、具合が悪くなったりしないだろうか？

まあそれでも、ずっと居るわけにはいかないのだけど……。

「ともかくタシユア、荷物置いたら？ 寝室はそっちの狭いほう使つて。あたしこの子抱えて一緒に寝るから」

「……甘やかしすぎです」

先輩に突っ込まれる。

Episode : 135

「いいじゃない、可愛いでしょ？」

「親が子供を可愛がるのは当然ですが、限度というものがありますよ」

「いいのよ、どうせそのうち、子供なんてどっか行っちゃうんだから」

何言ってるのか、母さん自分でも分かってなさそうだ。

「まあ構いませんが。――右の部屋をお借りします」

先輩が、少し狭い寝室のほうを指差す。

「好きに使って。何かあったら呼び鈴でも押せば、すぐ誰か来るわ」

「そうですか。では出来たら何か軽食を」

タシユア先輩の言葉に、母さんが呆れた顔になった。

「遠慮ないわねえ」

「私が少々食べたところで、シュマーに影響あるとも思えませんので」

平然と先輩が返す。

「まあ確かに、その程度じゃ屋台骨揺らないけどね」

言いながら母さんが、通話石で軽食を頼んだ。

「そう、それでいいわ。あとそうね……ルーフェ、あなた何か食べる？」

「え？ えっと、えっと……」

急に話を振られてうろたえる。何かって言われても、何を頼めばいいんだろう？

「やれやれ。自分の要望くらい言えるようになったらどうです」
タシユア先輩に突っ込まれたけど、それでもすぐに思いつかなかった。

——ダメだな、あたし。

戦闘に関することなら、何をしなきゃいけないくて何が必要かすぐ分かるのに、それ以外はぜんぜんダメだ。
情けなくなつて下を向く。

と、いきなり抱き寄せられた。

「かつわいいわぁ、泣いちゃった？」

「な、泣いてない！」

なんでこう母さん、人の気持ち考えないんだろう？

タシユア先輩なんて、向こうであからさまに呆れ顔だし。

「……荷物を片付けてきます。軽食が来たら呼んでください」

それだけ言つて、先輩は寢室に引っ込んだ。きつともう、母さんのとんでもない言動を見たくなかつたんだろう。

「もう、タシユアったら付き合い悪いわね」

「母さんのせいだと思う……」

思わずため息をついたけど、母さんは平然とした顔だ。

「そんなワケないでしょ。それより、あたしたちもなんか食べましょ」

「……うん」

なんだか眩暈を覚えながらも、あたしはうなずいた。

あと何日になるか分からないけど、母さんの無意味な言動にあたし、耐えられるだろうか……？

Episode : 136

Gratia

周りを人が動いている。

自分に直接触れてくる。

それがグレイシアにはとても不思議だった。

今までの僅かな経験から知るグレイシアの世界は、自分しか居ないあの硬いものの内側と、人が行ったり来たりしているその外側、というものだ。

なのに今自分が同じように外側に居るのが、少女には不思議でない。

ただあの水の中でも、「仲間」は居た。今グレイシアが周囲に意思を伝えるよりたやすく、伝え合える相手がたくさん居たのだ。

どこかは分からない。だが互いが見たものを伝え合っているうち、みんな同じような状況なのは分かった。

違うのは、似たような水の中だがすぐ隣り合っていたことだ。グレイシア以外はみんな、仲間が見える距離に居た。

「自分」と「仲間」と、それ以外。グレイシアの知る人の分類はそれだけだ。

硬くてつるつるした「世界を分けるもの」には、時々自分の姿が映る。そしてそれとよく似た仲間が、やはりよく似た世界1つに1人ずつ入っていた。

仲間とは、グレイシアはたくさん話をした。といっても言葉を知らないのです、見たものや思ったことを漠然と伝え合っていただけだ

が。

それでもいろいろなことが分かったし、1人でないというのはグレイシアにとって大きかった。

ただいつのころからか、その仲間がだんだん少なくなっていくて……最後には誰もいなくなってしまうた。

だからグレイシアは、自分も居なくなるのだろうと思った。いつか急にぱったり話さなくなつて、消えてしまふ。それと同じように、自分も消えてしまふのだらうと。

消えてしまふとどうなるかは、グレイシアには考え付かなかった。ただ消えてしまつたら、もう誰とも話せなくなるのだらうとは思つた。そして今もう、相手が居ないなとも思つた。

ただ時々頭や身体が酷く痛かつたので、それも一緒になくなるだらうとは感じた。そしてそれなら、悪くないだらうとも。

そんなことを考えながら漂つていたところに、「あの人たち」は突然現れたのだ。

1人は、不思議と安心できる人。

そしてもう1人は、仲間。自分とそっくりの、もう少し大きい人。ルーなんとかとか、グレイスとか、呼び名がたくさんあるらしい。

いちばん不思議なのは、その仲間は「世界」の外に居たことだ。

1つに1人ずつ世界に入っていないくはならないのに、それ以外の人と同じように外を動いていた。

だからグレイシアは、自分もいけると思つたのだ。

そして、出してもらつた。

ただグレイシアが思っていたほど、楽なところではなかった。あ
の中にいたほうが、ずっと身体が軽かった。
けれどそれでも、みんなが直接触れてくるのが嬉しい。

Episode : 137

それともう一つ、名前をもらったのも嬉しかった。

あの水の中に居たころは、誰からも呼ばれなかった。「この子」とは言われていたが、それだけだ。

けど後から来たあの「仲間」の人と、もう一人の人は、見る目が違った。いつもここに居る人たちとは、全く違う視線を向けた。

言葉を知らないグレイシアには、それを言い表す方法がなかった。ただともかく2人は雰囲気が全く違って、自分を大事にしてくれるのが分かったのだ。

だから、傍へ行こうと思った。

こういう人たちの傍なら、何があっても平気だと思った。

——今は居ないが。

何だかここに居てはいけないようで、2人と、後から来た自分に似たもう1人は行ってしまった。

ただ、遠くはない。見えないけれどすぐ近くに3人も居て、話しているのがグレイシアには感じられる。

話の内容は、難しくて分からない。けれど楽しくなさそうに聞こえた。

どうしてだろう、と疑問を持つが、その答えは見つからない。「楽しくなって欲しい」と願うばかりだ。

周りの人たちも、グレイシアが痛かったり辛かったりするようなことは一切しなかった。絶対に痛みを与えたりしないように、そっ

と触れてくる。

最初からこうだったら、どんな感じだったのだろうか？ とグレイシアは思った。

もっと毎日、楽しかっただろうか？

ただどちらにしても、もう終わりだろうと思う。

水の中に居るときから少しずつ、自分の力が無くなっていったのは分かっていった。

周りに居る人たちは、それを止めようとしているらしい。けれどそれでも完全には止まっていない。今はギリギリのところでは何とかなっているが、そのうちおかしくなるだろう。

そうになったら終わりだと、グレイシアには分かっていた。

あとは、消えるだけだ。

他の仲間がみんな“消えて”しまったように。

眠くなってきたて目をつぶる。

思い出すのは、あの2人のことばかりだ。

自分と同じ姿の仲間は、とてもよく話を通じる。そしてひとつひとつ、何でも相手してくれる。

もう1人大きい人は、「仲間」ではないから少し違うらしい。

仲間はもちろん、他の人も考えていることがグレイシアには分かるが、あの「仲間」と来た大きい人だけは、分かり辛かった。

全く分からないわけではないのだが、何も考えなくとも分かる「仲間」や他の人と違い、あの人だけはしっかり見ないと分からないのだ。

だがそれでも、自分ことを大事にしてくれているのは分かった。だから出来る限り、くつついていた。

——けど、もう。

眠たい頭で、グレイシアは初めて思う。
このまま消えませんが、と。

Episode : 138

Tasha side

やっと独りになり、荷物を降ろしてやれやれと思う。

（まったく、我ながらとんでもないところまで来たものですね）

よりによって、シユマーの本拠地だ。普通の人間なら一生足を踏み入れないどころか、名前さえ知らずに終わるだろう。

もつとも、船の準備が出来次第すぐに帰るつもりだった。

ここからケンデイクまでは、相当の距離がある。何しろ高速艇で一気に来て、それでも足掛け5日かかったくらいだ。

明後日にならないと帰るための船が準備できないことも合わせると、帰り着くのは早くても7日は先だろう。往路も合わせると、全部でほぼ半月だ。

予想してはいたが、かなりの長丁場だった。

（ですがまあ、仕方ありませんか）

グレイシアはあのとおり、かなりひどい虐待を受けたも同然だ。加えて具合もけてよくない。

そういう子が安定するために付き添いが必要というなら、多少のことはやむを得ない。

——それでも、長期間居る気はないが。

どう見てもあの子の治療は、期間を要するだろう。ヘタをすると何年単位になるかもしれない。

さすがにそこまでは付き合えなかった。

グレイシアが嫌がる可能性はあるが、我慢してもらうしかない。それにカレアナ辺りはずっと居るだろうから、別段心配することもないはずだ。

部屋を見回す。

（ムダに立派ですね）

たかが寝室なのに、応接用のテーブルとソファまで置かれている有様だ。しかもこれで狭いほうだというのだから、呆れるしかない。調度品もあのシュマーの島と同じように、贅沢なものだった。

（こんなことをする暇があるのなら、内部の監視でもすればいいものを）

そうすれば、グレイシアのような犠牲は出ていないはずだ。

ただカレアナは、気になることも言っていた。

曰く、「しないのではなく出来ない」と。

部外者のタシユアが平然とこんなところに居たら、普通はたちまち尋問なりされる。だが誰も疑問を持たず、それは出来ないのだという。

しかも洗脳ではないというのだから、余計に分からなかった。

（まあ、考えるだけ無駄なのかもしれませんが）

今回の色々なことやカレアナの言葉から考えるに、やはりシュマーは、一般的な人間とは何か違うのだろう。

だとすれば、考えるだけ無駄だ。

犬とネコは違って当たり前だし、同じ犬でも種類が違えばまるで別物だ。シュマーも同じように違う可能性は高い。

——何故そんなものが居るかは謎だが。

人種の差というものは確かにあるが、シュマーの“それ”はルー
フェイアなどを見る限り、もっと「違う」ものだ。

人の姿をした、けれど人とは異なる者。たぶん、この表現がいち
ばん近い。

（何なのでしょうね……）

一般的な“ヒト”の一派から別れ、徐々に変わっていったと考
えるのがいちばん妥当だろうが、それにしては差が大きい気がする。

あるいは草花や動物のように、大きく突然変異して別種と化した
のか。

（こちらのほうがあり得ますか）

だがそうなると、どうやって一族として確立したのか、という疑
問が残る。

そもそもが突然変異というのは、ある一体だけが起こすものだ。
だから動植物なら人間が保護して手をかけ、ひとつの種として成立
させる。

けれどシュマーは、誰かが手をかけたわけではないだろう。なら
ば何故、種として成立するほどに数を増やしたのか。

他にも飛びぬけた技術等、シュマーには本当にわからないことが
多い。

ただ、タシユアは所詮部外者だ。ここで考えたからと言って分か
ることはなさそうだし、教えてもらえるアテもない。カレアナ辺り

なら聞けば教えてくれそうだが、それでもすべてに応じるとは思えない。

要するに、肝心のところは分からないまま、ということだ。

（まあ構いませんが）

これが分からなかったからどうなる、というものでもない。分かれば面白いかもしれないが、所詮はそれだけだ。

いずれにせよ、船の用意が出来次第帰る。それだけだ。こんな胸糞悪いところに居る時間は、なるべく短くするに限る。

グレイシアのことが少々気がかりではあるが、これはもうやむを得ないだろう。どこかで割り切るしかない。

（元気になってほしいものですがね）

シユマー特有の病氣らしいが、出来るなら治ってほしいところだ。

——難しいかもしれないが。

あの研究施設で、ファールゾンという男はグレイシアを見、「何でこんなになるまで放置しておいたんだ」と詰め寄っている。

逆に言うなら、消して軽症ではない、ということになるだろう。

一応カレアナの口から、「この子は総領家」という言葉が出ているから、無碍に扱う馬鹿者は居ないだろうが、やはり他の連中が心配だ。

それともう一つ、かすかにグレイシアの表情から、死相が読み取れるのも心配だった。

病状が芳しくないが故と思うのだが、悪化して何かあったらさすがに気の毒だ。

（取り越し苦労とは思いますが……）

今までがどうであれ、これからは幸せに。

そう思いながら、タシユアは時間を潰そつと本を開いた。

Episode : 140

R u f e i r

ふつと目が覚めた。

——何時だろう？

何しろここは地下だから、時間がよく分からない。

「えつと……」

暗い中、枕元を漁って時計を探し出す。夜目が利く母さんはあんまり灯りを点けないから、あたしにはかなり不便だった。

「……あつた」

やっと見つけて時間を確かめると、まだ明け方前だった。自然と目が覚めたから朝だと思ったのに、違ったらしい。

なんとなく眠れなくて、そのまま起き上がる。

隣の母さんは、すごくよく寝てた。これじゃ敵襲があつても起きなさそうだ。

暗い中手探りで寝室を出て、隣の居間の明かりを点ける。なんだか目がさえてしまつて、寝れそうにない。

保冷庫を開けて、あたしは飲み物を取り出した。少し何か口にすれば、また眠れるかもしれない。

ここへ来てから2日、タシユア先輩はたぶん今日帰るはずだ。

ただ……あたしは決めかねてた。学院のことを考えたら一緒に戻るのが一番だけど、やっぱり 그레이シアのことを放っておけない。

그레이シアの容態は、どうも手放しで喜べるような状態じゃない

らしい。せつかくここへ来たのに、一進一退の感じだ。長旅がまずかったんだろうか？

ここまで連れてくれば、大丈夫だと思ってたのに……。

心配になって、隣の部屋をそつと覗く。

暗い中、眠っている 그레이シア。

ほつとしてベッドへ戻ろうとして……呼び声が聞こえた。

「 그레이シア？」

慌てて魔光灯を点けて駆け寄る。

「どうしたの？」

さっき聞こえた声は、いつもと違ってどこか苦しげだった。

「 그레이シア！」

大きな声で呼んでやっと、 그레이シアが顔をこつちへ向けた。手を握る。

よく分からない。分からないけど、嫌な感じだ。

「苦しい？」

けど答えはなくて、朦朧とした感じが伝わってきただけだった。

「誰か来て！」

通話石に言う。

あたしの声に気づいたんだろう、タシユア先輩と母さん——よく目が覚めた——もこつちの部屋へ駆け込んできた。

Episode : 141

「ルーフェ、どしたの?!」

「分からない……でも、グレイシアが」
「様子がおかしい。それだけは確かだ。」

「グレイシア、どこか痛い?」

母さんが訊いたけど、やっぱりはっきりした答えがない。いつもだったら言葉にはならなくても何か返ってくるのに、それがなかった。

「眠いの?」

母さんが重ねて訊く。

言葉を持たないグレイシアは、声は出さない。けどやっと少しだけ、反応したのが伝わってきた。

でも、「反応しただけ」だ。何かを考えるとかじやなくて、聞こえてきた音を認識した、っていう程度でしかない。

母さんとタシユア先輩の顔を見る。けどどつちも険しい顔だ。

つまり——そういうことだ。

元々グレイシアが罹っていた病気は、治せない類のものだ。ただそれでも、いろいろ治療すれば楽になったり長生きできて……だからこそ、ファールゾンたちはここまで無理をして連れてきた。

ただそれでも、急変するときはある。元氣だったと思ったら急に高熱を出して、それっきりってことも多い。

多いのだけど……。

扉が乱暴に開けられて、スタッフたちが駆け込んでくる。

「すみません、そこを」

「あ、うん」

慌てて場所を譲ろうとして、でもあたしは動けなかった。

グレイシアが、手を離さない。

もうまともに考えられないほど朦朧としてるのに、あたしの手だけはしっかり握ってる。

「ごめんなさい、この子……離して、くれなくて」

「ではそのままで」

意外なことに、あっさりと許可が出る。あたしが居たら陣のジャマになる、ってわけでもないらしい。

母さんとタシユア先輩だけが陣から出た。持ち込まれた魔力石が、次々と陣の要所に配置されていく。

そして、開放。でも何も起きない。グレイシアの様子は変わらない。

一瞬スタッフの人たちが一斉に舌打ちでもしそうな顔になって、でも淡々と石を変え始めた。

「ファールゾンはまだなの？」

母さんが厳しい声で訊く。

「それがその、今日は他でも急変が……」

「つまり重なった、と。タイミングが悪いわ」

急に様子がおかしくなったときの対応は、一刻を争う。だから逆に言うと、一度手をついたら一段落するまで離れられない。

それが同時に起こったら、……後から急変した人は、当然手が足りない。

Episode : 142

「ダメ、なの……？」

気弱な言葉が口を突く。

だってこんな、あつたら困る。他の子なら死んでいいてワケじゃないけど、でもグレイシアだけはダメだ。

なのに、どんどんこの子の体温が下がっていく。握ってる手が冷えていって、あつという間に死相が濃くなっていく。

「グレイシア、ねえ、治ったら……何する？」

何とか引き止めたくて、話しかけた。

(……？)

グレイシアが反応する。

「何がいい？」

あたしはさらに話しかけた。単純なことだけど、これで命を繋げるときだつてある。前線で何度か経験した。

かすかにこの子から、イメージが伝わってきた。

「海？ 海、が……見たいの？」

ぼんやりした同意。

「う、海、なら……」

涙で声が詰まる。話さなきゃいけないのに、言葉が続かない。「元気になれば、いくらでも行けますよ」

言葉が出てこないあたしに代わって、タシユア先輩が言った。

「ここは島ですからね、海なら目の前です」

先輩が次々という言葉に、グレイシアが意識を向けてるのが分か

る。前から海を気にしてたから、聞き逃さないんだろう。

「砂浜、ある……から……」

「では潮干狩りでもしますか——ああ、潮干狩りというのは、砂を掘って貝を採るんですよ」

グレイシアが好きそうな話題を、先輩が次々と並べる。

「後で料理して食べると、美味しいですね」

「ここ、大粒のが取れるわよー」

母さんも調子を合わせた。

「けど砂浜もいいけど、岬も綺麗よ？」

「ほう」

どう見ても相性の悪い母さんとタシユア先輩だけど、今だけは絶妙だった。何かの台本でもあるみたいに、上手に会話をつなげてく。

「東向きだから、夜明けなんて最高。日の出見れるわ」

でもグレイシアの反応は、だんだん弱くなってく。

すごく眠いときみたいに、反応しなくなってく。

「ダメ！ グレイシア、ダメ……」

スタッフはみんな必死だ。何とかこの子の命を繋ごうと、必死に動いてる。

でも……間に合わない。

Episode : 143

と、あたしの頭の中に声が響いた。

(る、ふえ)

グレイシアが初めてあたしを名前で呼ぶ。

「何！？ 何でもするから言って！」

この状況で呼ぶんだから、何か頼みがあるはずだ。

本当に何でもするつもりだった。この子が何か欲しいっていうなら、地の果てからでも持ってくる。

けど。

(あ、りが、と)

伝わってくる不思議な感情。何かをすごく残念がってるような、それでいてとてもホッとしているような、矛盾した思い。

握っていたグレイシアの手から、力が失われる。

「ダメ、ダメよっ！ 逝っちゃダメっ！ 戻りなさいっ！！」

この子が消えていく。

今まで確かにそこに居たのに、心が離れていく。

「あなたまだ、なにも見てないでしょう？！ これで終わっていいの？！ 一緒に外へいくんじゃないの！！」

叫ぶ。

けど、消えていくのは止まらない。

「——なんとかできないの！」

ムチャとは知りながらスタッフに、叫ぶ。

「今すぐ……よし、呪文を！ ダメか、もう一回だ！」

魔法陣に魔力が注ぎ込まれる。でも、瞳に輝きは戻らなかった。

「グレイシア……」

タシユア先輩の口から、沈痛な響きの声がもれる。

戯れに生み出されて、適切な治療も受けられず、苦しんで苦しんでやっと助かったのに。

いったいこの子が、何をしたっていうんだろう？ なんの権利が

あつて、この子から未来を奪ったんだろう？

確かに生まれ方は普通じゃなかったけど、この子は普通の人間だった。

——ちがう、普通以上だ。

これほど理不尽な扱いを受けながら、それでもただ素直に、誰をも信じていたのだから。

その時、場違いなくらい大きな音をたてて扉が開いた。

ファールゾンが飛び込んでくる。

「グレイシア！」

けど室内の様子に、その表情が凍った。

「まさか……間に合わなかったのか？」

「ほんの、今だったわ……」

母さんの答えにファールゾンの顔から血の気が失せて、そのまま彼はふらふらとベッドへ歩み寄った。

Episode : 144

「うそだろう……」

悪い冗談だとしてもいうみたいに、ファールゾンがグレイシアの頬をごく軽く叩く。

「グレイシア、遅くなって済まなかった。でももう僕が来たから」
思ってもみなかった彼の反応。

何故だろう？ ファールゾンはたぶんあたしより、ショックを受けてる。

空気なんて全く読まないファールゾンは他人を不快にさせる天才だけど、やってること自体は合理的だ。しかも医者だから、こういう状況はよく分かってるはずだ。

なのに……。

「なあ頼む、目をあけてくれよ……」

あたしを押しつけるみたいに、ファールゾンがグレイシアを軽くゆする。けど、生き返るわけも無かった。

「何でだ。何でいつもこうなんだ」

彼の口調が変わる。

「この子は何をした？ この子だけじゃない、何人も何人も、みんな何かしたのか？」

意味の分からない、けど強くて昏い言葉。

「何でいつも殺される？ この子も僕らも遊び半分で——けど、生きてるんだ」

「……ファールゾン？」

あたしが考えてるのは、何かが違う。もっと何か、深刻でヒド

イ話だ。

「勝手すぎるだろう。自分が実験される側に立てば、そんなこと分かるじゃないか」

「ファールゾン、何の話……？」

けど彼が言うより早く、母さんが遮った。

「その話は後で。いいわね」

有無を言わさぬ口調。たぶんそれだけ、重大なことなんだろう。

ベッドの上に視線を戻す。

——小さな身体。

穏やかな顔のグレイシアに話しかける。

「ねえ、グレイシア……外、行こう。海、見よう……」

もう遅いけど。けど、このくらいしてあげたっていいはずだ。

ぐったりと重いグレイシアを抱き上げようとしたら、横から先輩の手が伸ばされた。

そのまま無言で、タシユア先輩がグレイシアを抱き上げる。

「行こう、外へ……ね？」

先輩と二人部屋を出る。

母さんもついてこようとしたけど、入れ違いに部屋へ入ってきた人に話しかけられて、そのまま留まった。

長い廊下を歩いて、地上への昇降台に乗る。

——思ってたかった。

船旅が出来るくらい安定してたし、だからこそファールゾンたちもここまで連れてきたはずだ。それにここに来てからの対応は、ケ

ンデイクの病院なんて比べ物にならないほど丁寧だったはずだ。
それなのに……。

Episode : 145

こんなことならもっと外へ出してあげればよかったと、いまさらながら後悔する。

そうやって後悔しながら歩いて扉を開けたところで、思わず足が止まった。

「もう、そんな時間……」

外は思いがけず、白みかけていた。

先輩を先導する格好で、急いで東の岬まで行く。

切り立った崖になっている突端まで行くと、まだ昏い海の果てに、わずかに明るい空があった。

藍色、群青、紫紺、紫、赤紫、茜、朱、朱金……。

ゆっくりと空の色が変わる。

それにつれて海も、青みを増していった。

朝日が、射す。

「ねえ、見える？ 綺麗でしょう？」

見せてあげたかった。

世界は、ひどいことばかりじゃないことを。

たくさん、美しいものがあることを。

でももう、遅すぎる。

「ごめんね、グレイシア。もっと、生きていたかったよね……」

朝日に煌く金の髪をなでながら、そっとつぶやいた。
涙が止まらない。

「ごめんね」。その言葉だけを、何度も繰り返す。

「——ここにいたのね」

振り向くと母さんの姿があった。

悲しげな表情。

こんな悲しそうにしている母さんを見るのは、初めてだ。

「よく……寝てるわね」

分かってるのに、 그레이シアの顔を覗き込んでそう言ってくれる。

「……うん」

馬鹿みたいだと思いながら、あたしもそう答えた。

——本当にそうだったら、どれほどいいだろう。

そのまましばらく、3人で黙ったまま昇る朝日を見ていた。

新しい日の始まり。

でもそれを待つことなく、 그레이シアは……。

「さ、適当に戻ってらっしゃいね。小さい子に海風は、毒よ」

「……わかってる」

茶番劇。そんな言葉が脳裏を掠めたけど、それでいいと思った。

こういうことがあったっていい。

「ああ、それと」

帰りかけた母さんが立ち止まって言う。

「連中、案の定逃げたわ。まあ行き先は押さえてあるけど」

「——また逃がすのでは？ いつも詰めが甘いようですから」

「しないわよ」

母さんとタシユア先輩の短い、けど剣呑な会話が、朝日の中を飛び交った。

Episode : 146

Tasha side

(……まったく)

それ以外言葉が思いつかなかった。

何をどう言い表したらいいのだろうか？　ともかく面白くない。連中のやらかしたこと、自分がここにいること、グレイシアの結末、どれ一つとして気に入らなかった。

まあそうは言っても、身動きが取れないのだが。

出来たらすぐにでもここを立ちたいが、足となる船が無いのだからどうしようもない。一応飛行型の精霊——実体化させれば背に乗って飛べる——は持ってきているが、さすがにここからケンディクまでは距離がありすぎた。

グレイシアの亡骸は、今は用意された棺の中だ。

——小さな棺。

おそらくは、大人の半分くらいだろう。その小ささが、余計に周囲を重くしていた。

不思議、と言っではいけないのかもしれないが、奇妙な感覚だ。

タシユアにとって死は日常だ。シエラへ来る前はそれこそすぐ隣に在ったし、シエラでもけして無縁とは行かなかった。そして任務に出るようになってからは、また常に傍らに在る日常だ。

だがそれでも、「慣れる」ものとは違う。いちいち動じなくなるのは確かだが、好んで見たいものではない。

わけでもこういう小さい棺は——見たくない。

中に横たえられたグレイシアは、穏やかな表情だった。眠っているといわれれば、信じてしまいそうなほどだ。

だがタシユアには、それこそが怒りにつながるものだった。

本来なら、ここでこうして横たわっている子ではない。もっと何か、違う形で気ままに過ごしているべきだ。

ただそれを突き詰めていくと、「存在していなかった」可能性も高い。だが馬鹿な実験を考え付いたりしなければ、苦しんで死ぬ子が少なくとも1人減ったはずだ。

それが分かっているからこそ、腹立たしかった。

同じ部屋で、どこから引つ張ってきた椅子にかけている、カレアナを見やる

「――首謀者が逃げたといっていましたか？」

「逃げたというよりは、泳がせてる、かしら」

「モノも言い様ですね。それで通用するのだしたら、盗んだものも正当に拝領したものに変わりそうですよ」

言い返すが、相変わらずカレアナには効いた様子が無い。

そのことにさらに苛々しながら、タシユアは尋ねた。

「船は明日、出るのでしょうか？」

「出るわよ。疑り深いわね」

呆れたような声が返ってくる。

「確認しただけですが？」

「予定が変わったら知らせるわよ」

けろりと言うカレアナを見ながら、ため息をつきなくなった。これで一児の母だというのだから、たまったものではない。

Episode : 147

「まったく。その調子だから、今回のような話が起きても気づかないのでは？」

「まあそれについては、あたしの責任だわね。もちろん、相応のお礼はさせてもらうつもりだけど」

「お礼、ですか」

口ではそう言っているが、いわゆる「お礼」ではないはずだ。

（何をするのやら）

相手にしたくない性格をしてはいるが、さすがにシュマーの総領なだけあって、カレアナは決して甘くない。

当の本人はタシユアの内心になど気づかない——あるいは気づかない「フリ」か——様子で、楽しげに話を続けていた。

「勝手に出かけようとしたから、とりあえず片っ端から連れて帰らせたのよね。ってもまあ、一部ホントに出てっちゃったけど」

「……どこまで迂闊なのです」

グレイシアを見つけた時点で、首謀者が逃亡しようとするのは目に見えている。なのに対処もしないというのは、愚の骨頂だろう。

だがタシユアの視線に気づいたカレアナが、いたずらっぽく笑う。

「別に、逃がしてないわよ？ 出てっちゃったけど」

「似たり寄ったりでしょうに。出さないようにすべきところを取り逃がしておいて、何を言っているのです」

「だって」

口を尖らせて言う様子は、まるで子供だ。

「それじゃ面白くないじゃない」

「面白い面白くないで行動を決めてどうするのやら。それでよく、いくらシュマーとはいえトップに立てますこと」

「それとこれとは関係ないでしょ」

本当にこれで一児の母で、シュマーの総領なのだろうか？ ルー
フェイアが嘆くのも、さすがに分かるうと言っものだ。

「っていうかさ、ホントに面白くないじゃない。どうせやるなら、
せめて期待くらいさせてあげなきゃ」

「——先ほどと話が違いますが」

最初カレアナは「出て行った」と言っただけだ。だが今言ったこ
とが本当なら、「出て行かせた」ということになる。

「シュマーにとって人類の言葉は難しいのかもしれませんが、きち
んと言って頂かないと意味が通じません」

「いつもこれで通じるからいいのよ」

またワケのわからないことをカレアナが言い出す。

Episode : 148

「あなたご自身にだけ通じて、意味が無いのですがね」

「他の人にも通じるわよ？」

カレアナとの会話はいつもながら、まったく持って埒が明かない。だが呆れてもう帰ろうかというタシユアの前で、カレアナが面白そうに笑った。

「もうちゃんと捕獲してあるのよ。もうすぐ連中が着くって、連絡があつたわ」

「いたずらに情報を混乱させるなど、組織のトップの行動とは思えませんね」

この傍若無人ぶりに、どこまで付き合えばいいのだろうか？

「……確か船は、今日発てると聞きましたが」

これ以上付き合う気にならず、切り出す。さすがに帰る船に乗ってしまえば、顔を見ずに済むだろう。

「もう出られるのでしょうか？」

「出られるわよ。でもその前にあの連中、とっちめるってのはどお？」

まるで小娘のような悪戯っぽい顔でカレアナが言う。

「興味がないとは言いませんが、そのためにもう一泊するつもりもありません」

「だから『もうすぐ』って言ったじゃない」

「具体的な数字で言ってください。もうすぐと言って数日後ではないません」

タシユアがそう言ったところでドアがノックされた。

「開いてるわよ」
緊張感の欠片もない声でカレアナが言うと、そつとドアが開けられる。

ドアの向こうに居たのは、タシユアよりは年上だがまだ若い青年だった。

曲がりなりにも総領のカレアナと、グレイスであるルーフェイアの前だからだろう、緊張しきって直立不動になっている。

（こんなものを崇めてどうするのやら……）

確かに2人とも見た目は悪くないが、実像を知ったら何とやらだ。

——シユマーの人間には関係ないのかもしれないが。

あの地下施設でもここでも、部外者のタシユアが入り込んでいることに何も言わないのだ。先日それは「本能」だと言っていたが、神が何かと勘違いしているのではないだろうか？

それを言っていたカレアナ自身は、硬直している青年ににこやかに話しかけた。

「何の知らせ？」

だがその言葉さえも、青年は聞こえていないようだ。ただひたすらに硬直している。

これではシユマーの面々は、総領家にまともな意見を言えるとは思えなかった。

（まあ私が気にする必要ありませんか）

成り行きでこんなところまで来てしまっただけで、出来ることなら関わりたくもない連中だ。

「そんなに固まらなくていいわよ。伝言あるんでしょ？」

「は、はい。その、『捕虜』が連行されたそうです」

「分かったわ、ありがと」

カレアナの華やかな笑みに、また青年が硬直する。

13歳にもなる娘が居るカレアナだが、不思議とそうは見えない。そして顔立ちがいいのは確かなルーフェアの母だけあって、見た目はいい。更に匂い立つような身体つきと色気があるため、嫌でも男の視線を惹く。

それが分かっている微笑むのだから、効果の程は推して知るべしだった。

(やれやれ……)

もういちいち突っ込むのも面倒になりながら、成り行きを見守る。だが意外にもカレアナは、それだけで青年を下がらせた。あれでもう気が済んだらしい。

そしてタシユアのほうへ顔を向けた。

「そゆわけだけど、どする？」

「何がそういうわけで何をどうするのか、まったく意味が分かりませんが？ 先ほどの話はもうお忘れのようですね」

本当にこの女性、学習能力があるのだろうか？

「……さっきの話ってなんだっけ？」

「人類の言葉で言って頂かなければ通じない、という話です」

ついペースに載せられて答えたが、通じたとは思えなかった。

「んー、ちゃんと話が成り立っていると思うけど」

「そう思っているのは貴方だけでしょうね」

「あらそ」

案の定何も堪えていない声で、カレアナが答えた。そして再度訊いてくる。

「で、どうする？ あたしこれから、あいつらとつちめに行くけど」
「……すぐ、が今すぐでしたら」
さっさと帰りたいのが本音だ。だがグレイシアをあんな目に遭わせた連中には、それなりの礼はしたいところだった。

これでさらに数日かかるというなら話は別だが、「今すぐ」というならいいだろう。

「だったら行きましょ。ルーフェイア、あなたも来なさいね」
「……うん」

金髪の後輩が、少し青ざめた表情でうなずく。さすがにこの子も、これから何が起こるか理解しているらしい。
カレアナが歩き出す。

「どちらへ？」
「地上。地下じゃ暴れて何か壊れても困るし」
「ほう」

そう言うからには、カレアナは何か騒動が起きることを想定しているのだろう。逆に言うなら、タシユアが少々意趣返しをしても問題はない、ということだ。

（……少しは気晴らしが出来ますかね）
非道を通り越して邪としか言いようのない連中は、腹に据えかねていたところだ。グレイシアがそれで還って来るわけではないが、多少思い知らせるくらいはいいだろう。

そんなことを思いながら、タシユアはカレアナの後を歩いていった。

Episode : 150

R u f e i r

「捕虜」が連行された、と知らせが来た。
もっともこの場合、いわゆる捕虜じゃないだろう。どう考えたって、あの研究施設で馬鹿なことをしてた、研究者たちのはずだ。

「そゆわけだけど、どする？」

「何がそういうわけで何をどうするのか、まったく意味が分かりませんが？ 先ほどの話はもうお忘れのようですね」

「……さっきの話ってなんだっけ？」

母さんのやり取りがまた始まって、タシユア先輩が気の毒になつてくる。

「人類の言葉で言っ頂かなければ通じない、という話です」

「んー、ちゃんと話が成り立ってると思うけど」

絶対に違ふと思うけど、母さんだけは自信満々だ。

「そう思っているのは貴方だけでしょーうね」

「あらそ」

タシユア先輩に事実を指摘されても、まったく堪えないし……。そして性懲りも無く母さんは訊いた。

「で、どうする？ あたしこれから、あいつらとつちめに行くけど」
「……すぐ、が今すぐでしたら」

先輩の答えに、あれ？と思う。帰る帰ると言ってたから帰ると思つてたのに、ちょっと違うみたいだ。

「だったら行きましょ。ルーフェイア、あなたも来なさいね」

「……うん」

母さんに言われてうなずく。

でも内心は怖かった。絶対に先輩も母さんもあいつらを許すわけはなくて……そのときあたしは、どうしたらいいんだろう？

そんなことに構わず、母さんが歩き出す。

「どちらへ？」

「地上。地下じゃ暴れて何か壊れても困るし」

答えにやっぱり、と思った。

どう考えたって、これはやる気だ。しかも母さん、全面衝突になっても構わないと思ってる。タシユア先輩のほうもわざわざ来るくらいだから、容赦する気なんてないだろう。

タシユア先輩と母さん、この2人が本気になったらどうなるのか、あたしには想像もつかなかった。わかるのは、“捕虜”がタダじゃ済まないってことくらいだ。

母さんは、迷い無く地上へ続く道を歩いていく。

その後ろを歩く先輩も、毅然としてる。

でもあたしは、まだ迷ってた。

——何が、出来るんだろう？

そのことばかりが頭の中を回る。

Episode : 151

シユマーの人たちは、身内だ。それを疑うなんてしたくない。けどグレイシアはその身内にひどい目に遭わされて、結局こんなことになった。それはやっぱり許せない。

だとしたら、あたしはどうすればいいんだろう……？

分からなかった。

絶対に何か言わなきゃいけないはずだし、二度とやらないように手を打たなきゃいけない。そのことは分かる。

けど、それ以上は何をすればいいんだろう？

ただ、約束だけさせても無駄な気はした。あんまりそうあって欲しくないけど、こういうことってというのは大抵何度も起こる。

でもそうだとしたら、どうすれば二度と起こらなくできるのか。

その答えがまったく分からない。

そんなことをいろいろ考えてるうちに、もう昇降台の前まであたしたちは来てた。

母さんが操作盤に触れると、ドアが開く。

みんな無言だった。きつと心の中では何か考えているんだろうけど、母さんも先輩も言葉には出さない。

その間にも昇降台はどんどん上がって行って、一番上で止まった。開いたドアの向こうは、乗る前と同じような廊下だ。

「直接地上ではないのですか」

「いろいろ面倒なもの」

先輩の言葉に母さんが短く答えて、また歩き出す。

シュマーの地下の施設からは母さんの言うとおり、直接は出られない造りだ。たしかここは、地上の漁村にある、いくつかの家の地下室につながってる。

ただ、どこを使うかまではあたしには見当が付かなかった。たぶんいちばん大きい家じゃないかと思うけど、何となく向かってる方向が違う気がする。

——覚えてないと。

今まで嫌がつてあんまりここへ来てなかったせいで、こんな簡単なことさえ分からない自分が情けなかった。どう考えてもこれじゃダメだろう。

後で誰かに地図を出してもらって、一つ一つ歩いてみよう、そう思いながら後をついていく。

母さんは迷わず歩いて、何度か角を曲がって、最後に登り階段に行き着いた。

「この先ですか」

「先というか、地下室出て地上だけだね」

また短いやり取りがあって、母さんが階段の先にある大きな石を押す。

「こうなってたんだ……」

どう見てもただの石の壁だと思ったのに、ちょっと押すと上手くスライドして、文字通り「壁」が開いた。

ぽっかり空いた向こうは、ごく普通の地下室だ。貯蔵に使われるみたいで、根菜類なんかその辺に山積みになっている。

Episode : 152

「あら、足元危ないわね。気をつけて」

「言う暇があるのでしたwら、片付けておいてください」

なんだかよく分からないやり取りが、相変わらず続く。

ただ母さんは警戒する様子も無くて、無造作にドアを開けて部屋を出た。

続く、ゆるい登り階段。

「やれやれ……ムダに距離がありますこと」

「しょうがないでしょ、うち広いんだから」

ため息をつきながらついていくと、階段が終わって部屋に出た。

研究者たちが何人か、不安そうに立ってる。

「あーら良かった、勢ぞろいね」

母さんがまるで近所の子供でも見つけたみたいな言い方で、集まってきた人たちみたいに声をかけた。

「集まってるも何も、集めたのはカレアナ殿、そちらでしょう」

いちばん年をとった、白衣の人が言う。

けど、その言葉には違和感があった。いわゆるシユマーは、母さんない手にこんな言い方はしない。

集められた人たちの顔を見える。

年齢は、いろいろだった。でもあんまり若い人はいない。さつき答えた人はそれこそ「おじいさん」だし、他の人もかなり年はとってそうだ。

そしていちばん違うのは、その目つきだった。説明しろって言われると困るのだけど、こんな視線は初めてだ。

なんていうか……“モノ扱い”、それがいちばん近い。グレイスのあたしや総領の母さんを目の前にしても、ぜんぜん興味がなくてまともに相手する気にもならない、そんなふうに思ってる感じた。

——だから、グレイシアを。

こういう人たちなら、グレイシアのことなんてどうでもいいんだろう。

母さんはしばらく部屋を見回した後、別に怒るふうでもなくて言った。

「そういう言い方ってことは、用件は聞いてそうね」

「一方的に連れ戻した挙句こんなところへ押し込めるのが用件というなら、そうでしょうな」

やり取りは、一触即発の感じだ。

同時に、やっぱりおかしいと思った。この人は、母さんのことをなんとも思っていない。

もちろんタシユア先輩みたいな、普通の人は別だ。元々関係ないのに母さんやあたしの言うことをなんでも聞いたら、そのほうが絶対におかしい。

でも、今日の前に居る人は違う。れっきとしたシユマーなのに、シユマーとしての反応をしない。

血が薄いということも起こるけど……実際にはほとんど目にしない。大抵の人が詳しく知らなくても王様に頭を下げるのに似て、総領家にはみんな一応それなりの対応をする。

なのにこの人には、そういう感じが無かった。

それだけじゃなく、ここに居る人全員がそんな感じだ。あたしのはまだともかく、母さんのことはきつともなんとも思っていない。それは、人としては正しいと思う。けどシュマーとしては、やっぱり何かおかしかった。

ただ、理由が思い当たらない。シュマーの一員として世話になつてる身で、曲がりなりにもトップに立って仕切ってる母さんを、どうして見下せるのか分からなかった。

けど母さんのほうは、何か心当たりがあるみたいだ。戸惑ったような感じはカケラもない。

「まあ、あなたからしたらそうなんでしょうね」
かなり怒ってるはずなのに、世間話でもしてるような調子で母さんが言う。

「けどね、大事な子供が1人死んだわ」
それに答えたのはさつきとは違う、もう少し若い人だった。

「子供？ 被検体でしょう。それも、羊水槽から出すことさえ出来ない」

あまりの言い草に、思わずあたしも動きかける。

けどそれよりも早く、タシユア先輩がすつと動いた。

いつもと同じで足音も立てず、言い放った研究者のの正面に立つ。

「なんだねキミは？ だいたい部外者が――」

言葉は途中で途切れた。

この間ファールゾンにやったみたいに、先輩がスタッフの顎をつかんで、無理矢理椅子から立たせてる。

「ふふ」

母さんが軽く口笛を吹いた。

——やっぱり、おかしいかも。

前からまともじゃないとは思ってたけど、母さん完全にこの状況面白がつてる。

「どうやらご自分がどういうことをしてきたのか、全く理解されていないようですね」

タシユア先輩の声は、寒気がするほど冷たかった。

「絶えること無き地獄の業火よ——」

先輩の口から、魔法の韻がこぼれる。そして広がる、肉が焦げるあのイヤなにおい……。

顎をつかまれたスタッフに、青白い炎がまとわりついていた。消しとめることの出来ない魔法の炎が、身体を焼く。

「いかがですか？ 生きながらその身を焼かれる気分は」

返事はない。だいいち顎をつかまれてるから、答えられるわけがない。必死、としか言いようのない顔で暴れてるけど、ただそれだけだ。

皮膚が焼けて鮮やかな色の筋肉がのぞいて、けどそれも、炎にあぶられてすぐに色を変えた。

目の前で、声も上げられずに人が焼かれていく。

さすがに止めようと動こうとして——それより早く、先輩が口を開いた。

「人の命をもてあそぶということが、少しは理解できましたかね？ まあ、熱さと痛みで、それどころではないでしょうが」

いつもと何も変わらない、ごく普通の口調。

血が飛び散るわけでもないし、魔法が派手に発動するわけでもない。だからこそ不気味だ。

Episode : 154

さすがにたまらなかったんだろう、集められてたスタッフの1人が、短剣——うちの場合、研究者でも武器を使える人間は多い——を抜いて、タシユア先輩に刃を向ける。

「ほう。屑同士で一人前に庇いあいですか？」

淡々とした口調で言いながら先輩が動いて、掴んでいたスタッフを盾にした。

短剣が深々と、焼かれて死に掛けていたスタッフに突き刺さる。

「まったく。この程度も考えつかないとは、研究者という割にはずいぶんと貧相な頭脳ですこと」

同時にどさりと重い音をたてて焼かれたスタッフが放り出されて、刺さった短剣を握ったままのもうひとりが一緒によろめいた。

瞬間またタシユア先輩の手が伸びて、2人目のスタッフの顎を掴む。

「同じというのも芸がありませんが、まあこんなもので芸を追及してもムダでしょうしね」

炎が吹き上がる。また人が焼かれていく。

——一方的な、虐殺。

呆然と見ているあたしに、銀髪先輩が視線を向けた。その顔浮かぶに、どこまでも冷たい笑み。

一瞬にして全身が総毛立つ。

かわいそうだとかひどすぎるとか、あたしのそんな思いを嘲笑うかのような笑み。

けど……こういう人をあたしは、もう1人知ってる。
あまりに壮絶な光景に、思わずスタッフが助けを求めて振り返った、その人。

「力、カレアナ様……」

「あらなあに？」

気軽な口調。にこやかな表情。

碧い瞳に浮かぶのは微笑。

そのまま母さんは悠然と歩み寄って、スタッフの1人の頤に指をかけて、少し上を向かせた。

「なんのお願い？ 言ってごらんなさい」

甘い声。

先輩みたいな冷たさはまったくない。子供のちょっとしたわがままを、聞いてあげるようなた雾囲気だ。

「適当な形で、叶えてあげるわよ？」

艶然とした笑みを浮かべながら、母さんが言う。

その微笑に危険なものを感じたんだろう、スタッフたちがあとずさった。

外をよく知らない研究者は別として、現総領カレアナ——つまり母さん——の怖さは、シュマーの人間なら誰でも知ってる。

戦場で、時にはこんな風に身内の誰かががしでかした暴虐を目の当たりにするたび、この人はこの艶然とした微笑で屍の山を築いた。そう聞いている。

「た、助け……」

それを最後まで母さんは言わせなかった。

「ごめんなさいね。あたし、タシユアほど芸がないのよ」
言いざま片腕を切り飛ばす。

絶叫が上がったけど、母さんは平然としていた。

Episode : 155

「あら、そんなに嬉しい？　じゃあもう少し派手にいきましようか？」

返り血を浴びながらの、相変わらずの笑顔。

「あのお嬢さんにあんなに素敵なおことをしてくれたんだもの、ちゃんとお礼しなくちゃね」

にこにこ楽しそうな様子に、スタッフたちが完全に浮き足立った。我先に逃げようとする。

けど当然ドアは施錠されてて、逃げ道なんかなかった。

「逃がすわけ、ないでしょ？」

楽しげに弾む声。

あたしは動けなかった。

何が正しいのか分からない。グレイシアにことは許せなくて、けど母さんたちのしてることに賛成出来なくて、かといって何かいい方法を思いつくわけでもなくて……。

「——やはり、人の手による者は人にはならんか」

静かな声が響いた。

言ったのは、スタッフの中で最年長の人だ。

「何が言いたいのかしら？」

「そのままの意味ですな」

平静な声で彼が続ける。

「その銀髪の青年もあなたも、人に造られた。そして精神に異常

を来たしている」

「意味が分からないわね。あたしたちが異常って根拠はどこ？」

それはいくらなんでも聞く必要がないんじゃないか、そう思ったけどあたしは言わなかった。代わりに事の成り行きをただ見守る。

「十分異常ですな。人は人を殺すのを楽しんだりしませんぞ」

「『実験』と称して子供を虐待するのと、どこが違うのかしらね」
たぶん永遠に平行線の議論が続く。

ただあたしは、違うところでショックだった。

——母さんも、造られた。

タシユア先輩が曰くつきなのは、だいぶ前からあたしは知ってた。最初に出会った頃シユマーに問い合わせたら、そういう調査報告が返ってきたからだ。

けど、母さんまでそうだったなんて思わなかった。

だとすると、その母さんから産まれたあたしはいつたい……？
分からない。何が正しくて何が間違ってる何が真実で何が嘘なのか、まったく分からない。

話はまだ続いてた。

「我々は、むやみやたらと人に武器を向けたりはしませんな。ましてや、それを楽しむことなど有り得ない」

「一緒でしょ。名目が違うだけよ」

母さんの言葉に、最年長のスタッフが首を振った。

「 그레이스様、ご覧になりましたか？」

いきなり話が振られて、全員が一斉にあたしの方を向く。

Episode:156

「ご覧に、つて……？」

意味が分からなくて聞き返すと、最年長のスタッフが頷いた。

「グレイス様には衝撃とは思いますが、これが『人に造られた者』の実態です。人になり切れない」

説明されてもまだ、あたしは意味が分からなかった。

人になり切れない？ でも母さんもタシユア先輩も、確かにちょっと軸が違うとは思うけど、何をどう見たって人だ。

なのに何が、どう違うって言っただろう？

「何のことか、分からないんだけど……」

「ああ申し訳ありません、言葉が抽象的過ぎましたな。要するに、異常な精神構造の欠陥品、ということです」

「欠陥、品……？」

母さんも言っただけで、どこをどう見て欠陥だとか異常だとか言うのか、やっぱり分からなかった。

確かにさっきの母さんやタシユア先輩のやり方は、ちょっと度を越してるかもしれないと思う。

でも2人とも、無関係な一般人に手を出したりはしない。そういう意味じゃ、グレイシアをあんな目に遭わせたスタッフのほうが、よっぽど異常だ。

それに『造られた』から異常だっていうなら、グレイシアはどうだったんだろう？ あの子はあたしの複製だから、だとしたら元になったあたしも同じようにおかしいはずだ。

だいいちあたしは、造られたから異常だっていう母さんから産ま

れてるわけで……。

何かなんだか、まったく分からない。

「つまりグレイス様、人に造られたものは人ではないのですよ」
当然という顔で別のスタッフが言う。

「やはり、自然に産まれないとダメなのでしょうね」

「なら、あたしもでしょう？」

疑問をあたしはぶつけてみた。

「何故グレイス様が？」

「だって、あたしの母さんは異常でしょう？」

親が人じゃなくて異常だって言うなら、子供だってそうだ。あたしだけ違うなんて逆におかしい。

けど、彼らの答えは違った。

「グレイス様は、人に造られていません。ですから違います」

「でも……」

何かがおかしい。納得がいかない。

さつきから生まれ方が違うからと言ってるけど、あたしとグレイシアは早い話が年の違う双子だ。それが生まれ方のせいで、そんなに違うとは思えない。

何よりあの子は、いい子だった。

母さんと先輩との視線を感じる。2人ともあたしがどうするか、様子を見てるんだろう。

Episode:157

何を基準にどう判断していいか分からないまま、それでも必死に考える。

人為的に生み出された、グレイシア。

それと同じだという母さん。

なのにあたしは、まったく別だと彼らは言っていて……。

そのとき偶然、後ろのほうに居たスタッフたちが囁き交わしてるのが目に入った。

何となく唇の動きを読む。

（上手く行くか？）

（グレイス様は、素直だから）

これも意味が分からなかった。素直だと言われたのは嬉しいけど、会話がこの場にそぐわない。だいいち、何が上手く行くんだろう？

「どうかされましたか？」

「え？ ううん、その……」

□ごもりながら考えるフリをして、囁きを読み取り続ける。

（グレイス様さえ、押さえれば）

それに返されたのは、軽い頷きだった。

整理してみる。

なんだかよく分からないけど、このスタッフたちはあたしさえ居ればいい、と思ってるらしい。そしてあたしが素直だから、上手く行くと思ってる。ここまででは確かだ。

——だとしたら、何のために。

悩むあたしの“中”で、声が聞こえた。

（知りたいか？）

病院テロのときに、ルアノンが包囲されたときに聞こえた、あの

“彼女”の声だ。

そして“彼女”はあたしの答えを待たずに、言った。

（見せてやろう）

瞬間、世界が一変する。

いつもと同じ世界に重なって、人の感情が観えた。

嫉妬、欲、蔑み、怒り、そういったものがどす黒く渦巻いてる。

（何これ……）

問いかけると、“彼女”は可笑しそうに嗤った。

（そなたの身近な者たちが、観ている世界だ）

誰と名指ししたわけじゃないけど、「身近な者」が母さんやイマ
ドを指してると分かる。

まっすぐ見ていられないほど、酷い世界だった。

にこにこしながらあたしに丁寧に接してた人たちが、心の中では
反対ことを考えてる。いい人なのは上辺だけで、中ではどう利用し
てのし上がるかだけを思ってる。

逆に母さんは、中も見かけも同じだった。すごく読みづらいけど、
タシユア先輩もそれに近い。

そして、イマドが意外と人を信用しないわけも分かった。こんな
のを子供の頃からずっと見てたら、他人なんて絶対に信じられない。

Episode : 158

「グレイス様、大丈夫ですか？」
いちばん年上のスタッフが声をかけてくる。

——上辺だけの、心配。

その心の内は、あたしの心配なんてひとつもしてなかった。
考えてるのはただただ、この研究が続けられるのか、そのためにはどうすればいいのか、そんなことばかりだ。

「そんなに……研究、したいの？」
言葉が口を突いて出た。

「グレイス様には理解し難いかもしれませんが、したいですな」
目の前のスタッフが答える。

「研究すれば、子供たちの病も治せるやもしれません」
「病気を……？」
言葉が心に突き刺さった。

シユマーに特有の病気。子供たちを次々と殺していく業病だ。
死んでいった子供達の顔が脳裏をよぎる。
そのとき、静かな声が聞こえた。

「グレイシアも、同様に発病していたようですがね」
タシユア先輩の冷静な指摘で、はっと我に返る。
胸のうちに疑問が湧き上がった。

病気を治すのが目的で研究してたなら、グレイシアの放置は有り得ないはずだ。ずっと手元で詳細なデータが取れたわけだし、もっというんな治療を試さなきゃおかしい。

けど実際には、グレイシアはそれこそ実験結果とでもいう状態で、「生きてるだけ」の状態にされてた。

——やっぱり何かがおかしい。

何を隠してるのか探ろうとスタッフたちに目を向ける。

またあたしの中で嗤い声が聞こえて、スタッフたちの「声」が見えた。

（総領などと言っても、所詮は人造だしな）

（グレイス様は甘い。この方さえ居れば十分）

（現総領さえ居なくなれば、後はどうにでも）

啞然とする。

聞きたくなかった。こんなもの、知らないほうがいい。

グレイシアのことなんて一つも考えてない。それどころか、シュマーのことさえ考えてない。ただただ、自分たちの研究のことばかりだ。

それも、誰かの役に立つからとかじゃない。誰がどんなに苦しんでも構わず、自分たちの好奇心さえ満足すればいいと思ってる。

（まあ、“人”ならこんなものだろうな）

あたしの中で彼女が嗤った。

Episode : 159

薄々感じてはいたけど、絶対に居ないでほしい真っ黒な人たち。あたしの前にずらりと並ぶのは、そういう人たちだった。

「研究を続けたら、治るの？」

なのにあたしはどうしてか、自分でもびっくりするくらい“いつもどおり”だった。

スタッフが勢い込んで答える。

「もちろんです。研究が完成した暁には、もう二度と死ぬ子は出ないかと」

「そう……」

全部が嘘ってワケじゃないだろう。実際今までにも、研究が進んで治せるようになったものはある。

けど、これは違った。

“彼女”がまた何か小細工してるみたいで、言葉の裏の考えが見える。

実験がしたい、結果が見たい。それも出来れば数多く。口ではどう言っても、スタッフたちが考えてるのはそういうことだった。

“結果を見る”ためにヒドイ目に遭う子がいることは、彼らの考えの中にはない。

「治るとしたら……グレイシアはどうして、放置されてたの？」

「グレイシア？ 誰のことですか？」

やっぱりそうだろうと思う反面、ものすごく腹が立った。

こんなヤツのために、グレイシアは……。

炎にでもなりそうなほどの怒りの中、それでもあたしは訊いた。

「覚えてないの？ あたしと母さんであの廃棄施設から連れてきた子」

「ああ、あの実験体ですか」

さらりと、とんでもない答えが返ってくる。

さらに言葉は続いた。

「あれは失敗しましたね。首尾よく発病していたのですからなんとかしてでも調べて、役立てるべきでした」

まるで機械か何かみたいな言い方だ。

「まあ条件はある程度分かりましたから、次からはその条件に沿ってやっていけば、人為的に病児が作れるでしょう。そうなればまた研究が進みます」

次々と出てくる、有り得ない言葉。

しかも心の中で考えているのは……。

「……つまり研究を続けるのに、母さんがジャマ？」

彼らが心の中で思っていたことを言葉にする。

スタッフたちは、言い当てられるなんて思わなかったんだろう。

それぞれの顔に初めて、狼狽の色が見えた。

けどそれも一瞬で、むしろ嬉しそうな思考へと変わっていく。

（ 그레이스様、やっとその気になったか ）

（今の総領とやらは、ヘンなところでお堅くて困る）

見えるのは、そんな考えばかりだ。

Episode : 160

——こんなの、人じゃない。

シュマーの人間で傭兵として生きてたって、子供をこんな風に扱ったりしない。

母さんはたぶん、ずっとこんなを見てたんだろう。だからこそ、総領なのにシュマーを信じてないんだと思った。

まあもちろん、こういう連中はかりじゃないんだろうけど……。

「シュマーのトップは、そもそもグレイス様です。さあ」

「——そうね」

いつもの姿に重なって観える、醜く歪んだスタッフたちの想い。どんな魔物も裸足で逃げ出しそうな、捻じれて崩れたグロテスクな塊。死体のほうがよほどマシなくらいだ。

グレイシアや他の子のことをもう少し何か思ってたなら、救いようもあった。

でもそんなもの、どこにも見当たらない。

観えるのは、自分の願いを叶えたいという思いばかりだ。それがすべてで、何者にも優先するものだと思ってる。そして母さんもグレイシアも、ただの道具だと思ってる。

——こんな連中に、あんなやり方で。

前線で戦って、っていうほうがまだマシだ。

「あたしが、決められるんだっけ……」

「その通りです！」

スタッフの一人が力説する。

「シユマーはそもそも、グレイス様のものです。トップに立たれるのに何の問題もありません！」

そう言う裏で、彼らが別の言葉を叫ぶ。

自分たちにとってジャマなものを、全部あたしに排除させて。そして好きなことだけしたいと。

もっともつと研究をして、グレイシアのような存在を作り出して、いろいろなことを解明したいと……。

「よく、分かった」

理屈なんて要らなかった。

——許さない。

ただそれだけだ。

意識を自分の裡へ向ける。

周囲の気配を捉えて、引き出した力を向ける。

這い出した力が“彼ら”を捉えて、うめき声があがる。

「……あなた、何したの？」

「別に」

あたしの答えに、母さんが肩をすくめた。

「何もしなかったら、こうはならないでしょ」

「グレイシアと同じにしたいだけ」

どうやったらそうなるか、細かいことは知らない。ただそう“思う”ことで出来るのだけはわかってた。

立ってられなくなったスタッフたちが、床にはいつくばる。

Episode : 161

「それでも……まだ言える？」

スタッフたちからの答えはなかった。辛くてそれどこじゃないんだろう。

あたしは彼らに背を向けて、地下への階段に向かった。

「ぐ、グレイス、様……」

「自分で治療出来るでしょう。研究してたんだから」
振り返らずスタッフたちに言い放つ。

手厚い看護、なんて用意する気はなかった。グレイシアと……他にたくさん殺されていたあの子達の気持ち、少しは思い知ればいいと思う。

ただ、何かを踏み越えてしまったな、とも思った。

今までのあたしは最前線へ放り込まれて、って言い訳がまだあったと思う。

けど今のは違う。完全に自分の意思で、自分より弱い（はずだ）相手にあたしは手を出してる。

「ルーフェイア、あなた思ってたより手厳しいわねえ」

後ろからついてきた母さんに、あたしは言い返した。

「同じ分しか返してない。それにあの子達、みんなあたしの姉妹だもの……」

「確かにね」

母さんはそれ以上言わなかった。もうずっとシユマーのトップに居るから、こういうことは嫌って言うほど見てきてるのかもしれない

い。

あたしと母さん、それにタシユア先輩の三人で、地下への階段を下りていく。

「——それにしてもあれ、どうやったの？」

昇降台が見えた辺りで、のんびりとした声で母さんが訊いてきた。「どうって言われても……」

自分でもよく分からない。

シユマーの業病は子供を殺すけど、それだけじゃない。殆どの大人も、戦死じゃなければ同じこの病気で死んでいく。

だからあたしのやったことは、将来起こることを今起こしたに過ぎなかった。

それを説明すると、母さんはちよつとがっかりしたみたいだ。

「何でそんな顔？」

「だって。もしかしたら他の子の治療に使えるんじゃないかと思つて」

どっちが年上か分からなくなるようなやり取りだけど、内容は深刻だ。

「どうなの？」

母さんの真剣な表情。逆に言うと、それだけこの病気で苦しむ子が多い、っていうことだ。

けど、その役には立てそうになかった。あたしのやってることはどこまでも、「これから起こってもおかしくないこと」を早めに起こしてるだけだ。

要するに実際に何か治したりは、まったくしてないし出来ない。だから治療なんて、夢のまた夢だった。

あたしの言葉に母さんがほんのちよつとの間だけため息をついて、
肩をすくめて言った。

「ま、なかなか思う通りには行かないってことだわね」

「そんな単純なことにいまさら気づくとは、今までいったいどこを見てきたのです?」

「さあ?」

タシユア先輩の突っ込みに、母さんがうそぶく。

「それにしてもあんた、意外と隠し技あるわね。他にないの?」

「知らない……」

急にそんなこと言われても、分かるわけなかった。

「自分のことのように」

先輩からも言われるけど、答えようがない。そのときになってみて、自分でも「こんなことが出来たのか」といつも驚くのだから。

もしかしたらまた何か分かるのかもしれないけど、今のところはこれだけだった。

「まあしょうがないわ。人間なんてそんなもんでしょ」

「先程は、シユマーは人間ではないと言っていたようですがね」
先輩がまた突っ込む。

「言葉の綾よ」

「そんなもので、次々事実を覆されても困ります」

よく分からないやり取りを聞きながら昇降台に乗り込んで、最初の階へと戻った。

「で、あの連中はどうするの?」

「しばらくは……あのまま。後で回収」

半日くらい放っておいていいかなと思う。

「まったく、どこまで甘いやら。そうやってあんな連中を、一生養うわけですか」

あたしは答えられなかった。

先輩の言うことは、たぶん間違っていない。でもあそこで餓死させるのは、あたしには出来なかった。

それにこれから死ぬまで病氣と付き合うのだから、少しはグレイシアや他の子達の気持ちが分かると思う。

「まあいいわよその辺は。治療の実験台にもなってもらえるしね」

「なるほど、そういう考え方は成り立ちますかね。それでもコストに見合うとは思えません」

続く冷徹な話に、口を挟む気にはなれなかった。自分でも何をどうしたいのかよく分からないし、だいいちそんな気分じゃない。

「……ルーフェイア、あんた大丈夫？」

「平気」

たぶん本当は平気じゃないはずだけど、そう答える。

「そお？ あんまりそうは見えないけど」

「平気だってば」

母さんが心配してくれてるのは分かるけど、うるさいと思った。放っておいて欲しいのに、どうしてこうやって構うんだろう？

「——まったく。幼児ではないのですから、少し放っておいてはどうなのです。そうやって甘やかすから、いつまで経っても独りで何も出来ない子になるのでしょうに」

「いいじゃない、可愛いんだもの」

人の迷惑なんて考えない母さん、どこまでもマイペースだ。

Episode : 163

ふとこの辺、ファールゾンに似てるな、と思った。

けど不思議なのは、ファールゾンだと何をやっても角が立つのに、母さんだとみんな「仕方ない」で納得してしまうところだ。

どっちも十分迷惑かけてるのに、この差はなんなんだろう？

ただ、訊くのはやめる。

何しろ昔母さんに似たようなことを訊いたら、「人徳」とかいうとんでもない答えが返ってきた。だから今訊いたって、おんなじような答えが返ってくるはずだ。

正直「人徳」なんていうなら、今書けてる迷惑行為を全部すぐにやめて欲しいのだけど……。

ため息をつきながらグレイシアの部屋へ戻ろうとしたら、また母さんに声をかけられた。

「あなた、お茶に付き合いなさいよ」

「え……」

間違ってもそういう気分じゃない。けど母さんは相変わらずで、ちつともそんなこと構ってくれなかった。

「お腹すいちゃったのよね。バタバタして今朝からロクなもの食べてないし。タシユアもどお？」

「いただきます」

食べることだけは逃さない先輩が、あっさりと母さんの話に乗る。

「よかった、じゃあ決まりね。さっき個々へ来る前に用意だけはさせておいたから、すぐ食べられると思うわ」

いいながら母さんが元の部屋へと入った。

「あら」

「おや」

母さんとタシユア先輩の声につられて家の中を覗き見ると、もう軽食が並べてある。

「さすが、気が利くわぁ」

「感心する理解力があるのなら、ご自分でも真似をされればいいでしょうに」

「そんなこととして、他人の仕事とつたらダメじゃない」

また2人の、よく分からない堂々巡りが始まった。

「真似するのがどうして人の仕事を取ることになるのか、理解できませんが」

「だって住み分けなきゃ」

もう何を言ってるのかさえよく分からない状態だ。これでシユマのトップというんだから、ほんとどうなってるんだろう？ タシユア先輩も呆れたみたいで、それ以上言わない。

ただ当の母さんはいつもどおり平気な顔だった。

「まーどうでもいいわ、食べましょ。ほら座って」

「では」

言われるままに先輩が座ると、どこからか人が出てきてお茶を注いだ。

——いつも不思議だけど、一体どこにいるんだろう？

あたしの部屋でも、大抵呼びもしないうちに人が来るから謎だ。

Episode : 164

「ほら、ルーフェイア、あなたも」

「うん……」

あんまり気は進まないけど、席に着く。

すぐに目の前のカップにお茶が淹れられた。香りからして、あたしが好きなやつだ。

こんなに細かく対応して凄いな、と思いつつ、口に運ぶ。けどいっつもみたいに美味しくは感じなかった。

理由は……さっき聞かされた話だ。

たぶん本当だと思うけど、まだ信じきれない。けど訊くのも怖い。何度か訊こうとして、でも言えなくて、お茶を一口飲む。それを繰り返す。

「どしたの？」

母さんがすぐ気づいて訊いてきたけど、あたしはまだ言えなかった。どう切り出せばいいのか分からない。

「——さっき連中が言ってたこと？」

その言葉に、またタシユア先輩が突っ込んだ。

「自分で言わせなければ、意味がないでしょうに」
「いいのよ母娘だもん」

言い返す母さん、ホントにめげないというか、気にしなすぎだ。しかもそのままあたしへと話しかけるから、向こうでタシユア先輩はもう「処置なし」とでも言う感じで軽食を手にしてる。

「今まで、言わなかったものね」
「いつになく、優しい声だった。」

「何でこうなったか、知りたい？」

「知りたくない……」

本当はこれじゃいけないって分かってる。けど今は、聞きたくなかった。

「やれやれ。現実から目を背けても、事實はまったく変わらないの
ですがね」

「タシユア！」

珍しく母さんが鋭い声を出す。

2人の視線が合って何か言い合いになるかと思ったけど、何故か
どっちも何も言わなかった。先輩が呆れた感じで、視線を軽食に移
しただけだ。

「あなたの気が向いたら、いつでも話してあげるわ」

「……うん」

母さんの言葉が素直にありがたかった。ともかくいろいろありす
ぎて、まだ気持ちが追いつかない。

けどそれでも、ひとつだけ訊きたいことがあった。

「造られたら……ダメなの？」

「さあ？」

あっけらかんと、当事者のはずの母さんが言う。

「さ、さあ、って……」

「でもそうなのよねー」

なんだか真剣に考えてるあたしのほうが、おかしいみたいだ。

Episode : 165

「なんて言ったらいいのかしらねー。生まれ方がどうこう言われても、だから？って感じなのよ」

「母さんいい加減すぎ……」

物事を考えないにも程があると思う。

肩をすくめて母さんは続けた。

「だって。そんなこと言われたって、何も変わんないもの」

「それはそうだけど」

個人的には変わってほしいところだけど、母さんじゃ天地がひっくり返っても無いだろう。

「だいいちあいつらの言うとおりなら、ルーフェ、あなた自分で言ってたけど、あなたも異常ってことになるしね。矛盾でしょ」

「うん」

造られたから異常っていうなら、その子供もだと思う。そこが生まれ方だけで急に正常になるっていうのは、やっぱり納得が出来ない。

だいいちその説なら、正常な命を人工的に育てただけで異常ってことになる。もっと極端に言くと、動物の乳で育てただけで異常に育つってことだ。

でも、さすがにそれはヘンだ。

「正常に生まれて育てても、殺人鬼は出ますしね。前提自体が破綻していますよ」

いつの間にかあらかた食べたタシユア先輩が、カップを口に運びながら言う。

「要はあの馬鹿どもが、自分のしたことを肯定したかっただけでしよう」

「だわね」

2人があつさり結論付けた。

それを見て、あたしも考えるのをやめる。たぶんこれは、考えるだけ無駄だ。

「ま、後ろ見てもしよーがないわ。だいいち人となりなんて、何をどうしたかで決まるものでしょ」

「——うん」

きつと、これが正解なんだろう。グレイシアとあの研究者達を比べたら、グレイシアのほうが間違いなく「正常」に近かった。

もちろん何を「正常」とするかはあるけど、でもあの子が素直じゃないなんて誰も言わないだろう。逆にグレイシアをあんな目に遭わせた研究者達が、まともだなんてどうしても思えない。

だとしたら、「生まれ方」なんて関係ない。

どんなふうを考えてどんな風に生きようとしたか、それだけのはずだ。

息を吐く。つかえてた何かが、ずっと少し降りた気がする。

そんなあたしに母さんが言った。

「で、それはいいとして。早く飲まないと冷めるわよ?」

「またそういうことばかり……」

ホントに何にも気にしない人だ。

けどそれが、今はちよつとだけありがたかった。

「そっちも食べちゃいなさい」

「うん」

このささやかなお茶の時間が終わったら、またいろんなことと向き合わなきゃいけない。けどその前にほんの少し、こうやって落ち着けたのは大きかった。

——これが終わったら、また。

そう思いながら、あたしはサンドイッチを口に運んだ。

Episode : 166

Caiana

連中を始末したあとは、ドタバタだった。

ルーフェイアの意向どおりに時間を置いて連絡して、あの連中を回収して。それからシュマーのやり方に則って、グレイシアとお別れの会の用意をして。

その間に船の用意が出来て、タシユアはとっとと帰っちゃったし。いちおう一言「葬儀は？」って聞いたけど、「出る義理はありません」で切り捨てられた。

——まあ分かるけど。

薄情って言えばそうだろうけど、タシユアは元々シュマーとは無関係。たまたま成り行きで関わって、グレイシアの希望でここまで来たけど、それ以上は……って言うんだろう。

そして今、荒れた野にぽつんとある岩の上に、棺は置かれてる。

一緒に居るのはあたしとルーフェイア、ファールゾン、それに最後にグレイシアを世話した数人。

可愛かったグレイシアを知る、数少ない人間たちだけ。

「ルーフェイア、もういいかしら？」

「……うん」

隣でルーフェイアが頷いた。

それを確かめて、詠唱に入る。

「空の彼方に揺らめく力、絶望の底に燃える焰……」

ホントのこと言ったら、魔法の威力が桁外れのルーフェアがやるのがベスト。けどどう考えたって、優しいこの子にはグレイシアを焼くなんて出来っこない。

だから今回は、あたしがやるつもり。

「よみがえりて形を成せ——フラーブルイ・クワツサリーっ！」

呪に反応して、炎が舞い上がる。

けどそのとき、隣から詠唱が聞こえて。

「時の底にて連なる炎よ、我が命によりて形を取り……」

「ルーフェア？」

泣きながら、優しいこの子が呪文を紡いでた。

「うつつの世に姿を現せ——来いっ、サラマンドーっ！」

召喚された精霊が生み出す、比べ物にならない圧倒的な炎。それを見ながら、ルーフェアが言う。

「だって、時間が長いと……可哀想……」

そういうことか、と思う。

火勢が弱けりや当然、時間はかかっちゃう。ただルーフェアには、長い時間炎の中にグレイシアを置くのも、焼くのも同じくらい耐えられなかったみたい。

——本当に優しい子。

どうしてこんないい子が、戦闘なんてとんでもないものに向いちゃってるのか、どうやっても納得いかない。

グレイシアもそう。ルーフェアに似て優しくて素直で、なのになんであんな目に遭わなきゃいけないのか。

まあグレイシアの件は、あたしにも責任があるけど。

Episode : 167

ドワルディその他が持ってきた資料とか、関係者締め上げて吐き出させた情報を総合すると、頭のいい連中が悪知恵絞っただけあって、確かにそうとう巧妙。事実あのタシユアも、偶然で気づいたっていうし。

ただそれでも、部外者が偶然気づくものを見つけられなかったのは、あたしたちの非。もっと気をつけてればもっと早くに手が打てて、もう少し違う形にできたはずで……。

そんなことを考えてるうちに、棺が炭化してく。

スピードがいつもより速いのは、きっと炎が高温のせい。ルーフエイアの言うとおり、これならグレイシアは炎の中に長く居ないで済むはず。

そうしてずっと眺めてるうち、炎は収まってった。

横で泣いてるルーフエイアの頭を撫でながら、後ろのスタッフに声をかける。

「悪いけど、あと頼んでいいかしら？　ちょっとこの子、連れてくわ」

「了解です」

申し訳ないと思いながら、ルーフエイアを連れてここを離れる。案の定誰も居ない場所まで来ると、この子が動かなくなった。

「大丈夫って聞くのも、無駄そうね」

「大丈夫……」

どう見たって平気じゃなさそうなのにこの子ったら、口だけはそう言うし。

っても絶対、自分じゃ「ダメ」なんて言わない。ルーフェイアはその辺はかなり強情。

だから、抱き寄せる。

ルーフェイアのほうも逃げようなんてしないで、すっぱり腕の中に納まった。

——可愛いかも。

最近は抱こうとすると逃げちゃうから久々。ただルーフェイア本人は、そんなこと考える余裕なんかないわけで。

「ど、どう、して……」

泣きながら切れ切れに言う。

「こんなの、ない……」

この子の言いたいことは分かるけど、答えようがなくて、ひたすら金髪を撫でる。

正直あたしも、 그레이シアにも同じ事をしてあげたかった。

けして楽じゃないけど、あんなふうに押し込められてるよりはずっと自由な、そういう生活をさせてあげたかった。

それがムリでも、せめて十分な治療くらい常に受けさせてあげたかった。

けど娘が泣いてるのに、あたしまで泣いてなんていられない。

何より、やらなきゃいけないことが山積み。あの連中のことだの施設のことだの、医療関係の人間の再編だの、とつと手を付けなないとまた大変なことになるはず。

ってもこれは、今ルーフェイアに言うことじゃない。

「あとで、葬送の儀やるわよ」

「……うん」

あたしの言葉に、腕の中で金髪がうなずいた。

Episode : 168

葬送の儀は結局準備に手間取って翌朝、グレイシアが息を引き取ってから4日目になった。

天井の高い、広い部屋。整然と黒い石碑が並んでる。

石は全部が墓石で、亡くなったシユマーの人間の名前が全て彫られてたり。まあ時々一部入れ替えるから、正確に言うとなんか全部じゃないけど……。

その中央の通路を、あたしとルーフェイアは歩いてた。

前方、要するにいちばん前の壁際に並ぶのは、他と違って白い墓石。総領家のもの。

——同じでいいと思うんだけどねえ。

どっちも死ねば一緒なのに、なんだって総領家だけ色を変えたのかしら？

墓石の前にたどり着いて、ずらりと並ぶ名前に視線をやる。

「……ごめんなさいね」

一番下には、ただ“グレイシア”とだけ彫られてた。

そして墓石の前に置かれてた小さな箱を、ルーフェイアが手にする。

シユマーの葬儀のやり方は、とても簡単。生前に用意していた遺品を墓碑の前に並べておいて、縁の人が参列して受け取って祈る。ただそれだけ。

いわゆる「故人とのお別れ」をあまりやらないのは、遺体を回収できないことも多いからって話だった。遠い昔は普通にやってたというけど、どこでどう死んだかよく分からないケースも多いから、

だんだんこの形に落ち着いたそう。

遺体が回収できた場合は別に機会を設けて、火葬にして灰を撒く。当然ここで亡くなったグレイシアも、このやり方。

なんだかんだで灰を撒くほうが先になっちゃって、これは昨日の夕暮れ時に済ませてる。

だから、今日で最後。

正直あたしだって、最後だと言いたくない。ルーフェイアなんてもつとのはず。だけど、いつまでも引っ張ってるわけには行かない。

それに何となく……グレイシアが嫌がる気がした。

ルーフェイアに似て優しかったあの子は、たぶん周りが自分のせいで、いつまでも泣いてるのを嫌がるはず。

だったらさつさと区切りをつけて歩き出したほうが、グレイシアも安心できる。

ルーフェイアにもそう言って説得した。

いちばん前、白い墓石の前にたどり着く。

「……ごめんね」

もう何度言ったか分からない台詞が、また口を突いた。

ルーフェイアは黙ったまま。きつと辛くて、言葉なんて出てこないでしょうけど。

誰かが合図したわけでもなく、自然とみんなでシュマー式の礼を取って頭を垂れる。

——重苦しい、沈黙。

子供が亡くなった時はいつもそうだけど、今日は一層。

ルーフェイアが無言のまま、小さな箱を置いた。

中には、グレイシアの髪を少しだけ入れてある。何も持たなかったあの子には遺品に出来るようなものが、これしかなかった。

Episode : 169

もう二度と、こんなことは。そう墓前に誓うけど、本当は自信がない。

全力で当たるのは、もちろんその通り。

けど人のやることだからどうしても穴があって、突かれちゃうわけ。そして穴を塞いでまた違うところを突かれて、の繰り返しになるはず。

そういう意味で、全部きっちり止める自信はちょっと無かったり。まあ無意味に「絶対大丈夫」とヘンな自信持ったり、一度塞げばもう大丈夫だと思ったりするよりは、まだこの考え方のほうがマシなんだろうけど。

ただただ黙って泣いてるルーフェイアの頭を、そつと撫でる。

後ろに並ぶスタッフからも、悲しみが押し寄せてた。

それを背中に感じながら、もっと大々的に葬儀をやるべきだったかもと、とも思う。そうすれば悲しい事態がみんなの知るところになつて、繰り返さない力になつたと思う。

けど、出来なかった。

それをしたら、ヒドイ目に遭ったグレイシアをさらに見世物にするのと同じ。

死んでるんだから気にする必要は無い、という人も居るだろうけど、やっぱりあたしにはちよつとムリ。

今回の件を公にはいつかしのきやならないだろうし、したほうが絶対にいいわけだけど、もう少し先になっちゃいそう。

そうやっていろいろ考えながら、ルーフェイアの頭を撫で続けて。

適当なところであたしは声かけた。

「あとは、部屋へ戻って泣きなさいな。ここじゃゆっくり泣けないわ」

「……うん」

この子を返さないと、スタッフ達が戻れないわけで。そして彼らを早く返さないと、他の病気の子たちの看護に差し障る。

まあルーフェイアは素直だから何を言うでもなくて、そのまま従ってくれたけど。

「あなた達もありがとう。仕事のほう、お願いね」

「了解です」

悲しみはまだ抱えたまま、スタッフ達が顔を上げる。

「助かるわ。さ、ルーフェイア、いきましょ」

スタッフ達の間を通過して、まず2人で墓地を出る。こうしないと、スタッフ達が出ない。

いろいろと面倒だと思うけど、これがシューマーだった。

——上手く、行かかしら？

とてもじゃないけど、このままの状態でルーフェイアに引き継がせられない。先代からだいぶゴタゴタあったけど、逃げ出したり潜られたりそもそも分からなかったりで、なかなか全部は片付かないけどそろそろ、手段を選んでられないだろう。

サリーアが居るから、その分だけ気は楽だけど、足が不自由な彼女に片っ端から負わせるわけにも行かないし。

まだ泣いてるルーフェイアを抱えるようにして、ため息つきたい悩みに知らん顔しながら、あたしは部屋へと戻った。

Episode : 170

R u f e i r

「――よ」

「イマド」

食堂で独りで遅い朝食を食べてたあたしに、イマドが声をかけてきた。

「けっこう長かったな」

「うん……」

あたし自身、こんなにかかるなんて思ってた。なかった。

「しかし、施設だ実家だって、マジ忙しいなお前」

「忙しいっていうか……予定してなかったし」

だいいち廃棄施設だなんて、この大陸に「ある」ことしか知らなかった。

「いつ戻ったんだ？ 今朝か？」

「ううん、夕べ。でも疲れて、すぐ寝ちゃって」

ただ疲れの原因は、精神的なものかなと思う。南大陸の実家と学院は何度も行き来してるけど、こんなに疲れたのは初めてだ。

そしてイマドに話そうかどうか、迷う。

グレイシアのことは、あくまでもシュマー内部の話だ。部外者は知らないほうがいい。

けど……誰にも言えないのは辛かった。誰かに聞いて欲しい。甘えだと思う。自分のことなんだから、自分で何とかして当たり

前だ。

でも、やはり辛かった。

「どした？」

あたしが黙っちゃったせいだろう、イマドが訊いてくる。

「うん、何でも……」

「んなワケねーだろ。つか、聞こえてるっての」

「あ……」

彼に隠し事が出来ないの、忘れてた。

それでもこうやって、中身は知らないフリをしてくれるんだから、どこまで優しいんだろう？

「聞くぞ。どーせ誰にも言わねーし」

「……うん」

イマドが居てくれてよかった、そう思いながら話し出す。

「最初に、出かけたでしょ？」

「ああ、あのいきなりタシユア先輩とどっか行ったやつ。っても2度目も、先輩と一緒にじゃなかったっけか？」

「うん、そうなんだけど……」

けど続きを言おうとして、イマドに遮られた。

「場所変えつか。なんか話がシビアっぽいし」

「あ、うん」

急いで残りを食べて立ち上がる。

Episode : 171

「えっと……どこ……」

「お前の部屋でもいいけど、俺ら上級隊じゃねーから教官うるせーしな。訓練施設の例の場所でも行くか」

「そうだね」

前に飛竜に襲われてシーモアたちと仲直りした、あの砂浜。あそこなら確かに、誰かに聞かれたりしないだろう。

2人で校舎を出て、塀の破れ目から施設へ入る。

「変わって、ないね……」

久々に来た小さな砂浜は、あの時とまったく同じだった。

あたしはこの訓練施設は、殆ど使ってない。学院へ来てかなり早い時期に使うのを禁止されてしまって、ずっと訓練島のほうへ行ってるから、こっちは滅多に来なかった。

だからその先の秘密の砂浜なんて、もっと行く機会が無い。

——何年、過ぎたんだろう？

前に来たときのことを思い出す。あの頃はまだ学院に来てすぐで、クラスの人などもぜんぜん上手くやれなくて……。

すごく遠く感じる。ほんの3年前のことなのに、どこか遠くの世界のことみたいだ。

イマドが砂浜に座り込んで、あたしも隣に腰を下ろした。

「で、どーした」

「うん……」

さっきの続きを話し出す。

廃棄されたシュマーの施設がこの大陸にあったこと、こつそりそこが今も使われていたこと、使い道がとんでもない実験のためだったこと……。

半分聞き終わって、イマドがため息をついた。

「——なんかムチャクチャ話がハードだな」

「……うん」

出来たらこんなこと、知らないままで居たかった。でももし知らないままでいたら、あたしきつと何かとんでもない思い違いをして育ったと思う。

それを言つと、イマドが少し笑った。

「なんで、笑うの……？」

「いや、昔ならそれでお前、目いっぱいメゲてオワリだったじゃん」
ヒドいことを言われる。

しかも否定できないから、かなり辛い。

「そりゃ、確かにそうだけど……」

「いいじゃねーか、そんだけ変わったんだから」
あっさりイマドが言った。

「昔だったらマジ、お前泣いてるだけだし」

「——ヒドい」

これも事実だけど、面と向かって言われるのはなんかイヤだ。
だいいち今だって、本当はちょっと油断したら泣きそうなのを、
我慢してるのに。

Episode:172

そんなあたしを見て、イマドが笑い出した。

「悪い悪い、けど事実だろ」

「そうだけど……」

反論できないのが悔しい。

「で、そのあとどうなったんだ？」

「それが……」

水を向けられて、続きを話し出す。

今度は涙を止められなかった。グレイシアのことを思うと、どうしても泣いてしまう。

「全部お前の複製で、しかもみんな死んでるとか、きつついな……」
さすがのイマドもそんなことを言う。

「それでも、1人だけ……生きてただけ……」
何とか水槽の中から助け出したこと。かなり厳しい状態だったこと。でも少し元気になったこと。なのに最期、あつという間に逝ってしまったこと。

言えたのはそこまでだった。あとはもう、言葉が出てこない。
ただただ涙がこぼれる。

どうしてグレイシアは、あんな目に遭わなきゃいけなかったんだろ？ あの子の何が悪かったんだろ？

あの時からずっと考えてる。けど、答えは出ない。
そしてたぶん……死ぬまで答えは出ないんだろ？

あたしが落ち着くまで、イマドは何も言わずに傍に居てくれた。

それが凄くありがたい。

砂浜に波が寄せては返す。小さな貝のカケラが、ところどころに落ちてる。

——あの子が見たがってた光景。
なのになんかこれだけのことさえ、叶わなかった。
思えば思うほど、気持ちが沈んでく。

「……その辺にしとけよ。そのグレイシアって子、泣くぞ？」
「え？」

意味が分からなくて戸惑う。

「だって、グレイシアは……」
「いやまあ、確かに死んじまったけど。んでも、お前がそーやってたら、その子が今度泣かねえか？」
「あ……」

優しかったグレイシア。

もしあの子が今のあたしを見たら、絶対に心配する。そうして最後は、泣き出してしまっただろう。

ただでさえ辛い目に遭ってばかりだったあの子に、そんな思いはさせたくない。

死んでしまったから思うわけが無い、そう言う人も居るだろうけど、あたしはそうは思えなかった。ただの感傷かもしれないけど、きつとどこかに居ると思う。

Episode : 173

日差しに煌く、碧い海。

寒い季節だから夏ほど冴えてないけど、でもあたしとグレイシアの瞳と、同じ色だ。

——そして、母さんと姉さんとも。

また気持ち沈む。

「今度はどーした」

うつむいたあたしに、軽くイマドが訊いてきた。

気を遣ってもらってばかりだな、と思う。深刻な顔されたらあたしが余計に滅入るの知ってて、いつもイマドは軽く振舞ってくれる。

まあもしかしたら、単に性格なのかもしれないけど……。それでもイマドが隣に居てくれるのは、本当にありがたかった。

「その顔だと、まだなんかあるんだろ？」

「うん……」

ずっと引っかかってた、もうひとつのことを話す。

「母さん達まで、造られたって……」

「なんだそりゃ」

あまりにももっともな言葉が、イマドの口から飛び出した。

「えっと、だからね……」

細かいことは省いて、大体のところを説明する。

「よーするに、お前のお袋も従姉も、その死んだ子とおんなじよう

な目に遭ったってことか？」

「同じかどうかは分からないけど……でも、普通に生まれたのと違うって……」

ため息が出る。何でこんなに次々、聞きたくもない話が出てきたんだろう？

「んでもお前のお袋とか、別にどこもヘンじゃねーじゃんか。いや、あの人格ヘンだけど」

「それ言わないで……」

母さんの性格は、あたしも否定できない。というか、否定できる人なんて居ないと思う。

「あー悪い悪い。けどよ、お前のお袋、自分で考えて普通に好きにやってんじゃん。何か問題あんのか？」

「ない、かも……」

言動が他人をとことん振り回すっていう問題はあるけど、そもそも何もやれないとか、そういうことはない。むしろ決断力や判断力は、母さんは高いほうだ。

その点は姉さんも似てて、普通の人よりよっぽど優秀だと思う。

「んじゃ、どーでもいいんじゃない？」

「そう、かな」

「そだろ。てーかお前が気にしたって、あの人たちが変わるわけねー」

それもそうだ。

人に何を言われたって平然としてやりたいことをやってる母さんが、他人に何か思われたくらいじゃ、変わるわけが無い。それどころか、面白がって余計に好き勝手やって、その相手を振り回すだろ

う。

どうも、あたしの考えすぎだったみたいだ。

お知らせ

自サイトにて、期間限定でSFを公開中です。よかったら下のリンクからどうぞ

またこれとは別に、異世界トリップの連載も始めました。
こちらはなろう内に掲載です。よろしく願います

あとがき

新作にお付き合いくださって、ありがとうございます♪
でも実は、テーマが難しいのでいちばん書きたくなかった話の一つ、
だったりします（涙）

【夜8時過ぎ】の更新です、たぶん。よろしければお付き合い下さい。
い。

感想・評価歓迎です。お気軽にどうぞ

Episode : 174

それでも気は晴れない。もう少し何か、もしかしたら、そればかりが頭の中を巡る。

こんなんじゃないいけない、そう分かっててもまだ、考えてしまう。

「あんま考えすぎんな。ってもまあ、まだムリか」

「うん、ごめん……」

だんだん落ち着いてくのもしれないけど、時間がかかりそうだ。

なんだか寂しくて辛くて、ベルデナードのスラムのときみたいに、イマドに身体を寄せる。

ちょっとびっくりしたみたいだけど、イマドは動かなかった。

——広がる、安心感。

たったこれだけなのに、どうしてこんなにほっとできるんだろう？
イマドに寄りかかったまま、海を眺める。高く上がった日の光が
当たって、身体が暖まってくる。

今、生きてるあたし。

こうしてひとつひとつ感じながら生きていたら、グレイシアは喜んでくれるんだろうか？

「……あのな」

「え？」

続けてイマドが何か言おうとしたとき、素っ頓狂な声が響いた。

「ほらー！ やっぱりいた！」

ミルの声が響いて、ちょっと嫌な気分になる。せつかく、イマド

と2人だったのに……。

「ほんとだ、よく分かったね……って、ミル、ダメじゃん！」
ナティエスの声が続いた。
さらにシーモアの声。

「イマド居るなら、別に探さなくていいんだっての。なに考えてんだい、あんたは」

「えー？ ミルちゃんせつかく当てたのにー」
聞いているだけで頭が痛くなってくる。ミルってば、ほんとになに考えてるんだらう？

「ゴメンね、ルーフエ。ミルが秘密の場所行ったらしいっていうから、てつきり独りで行ったと思って……」

ミルは相変わらず知らん顔だけど、ナティエスが必死な顔で謝ってくれた。

それを見て思う。

あたしは、独りじゃない。

そのとき、ふ……と何かが通り過ぎた。

驚いて辺りを見回す。

「どした？」

「ううん、何でも……」

あたし、イマド、シーモア、ナティエス、ミル。やっぱりその5人しかない。

でも、確かに感じた。あの気配は、グレイシアだ。
陽炎のように揺れる金髪が、微笑んだ気がした。

きつと思ひ込みで感傷だと思うけど……今は信じていたい。

「んじゃあたしら、帰るよ。ジャマだろ」

「あ、ううん、その……お昼、みんな……ダメ？」

あたしの言葉に、みんなが驚いたふうに顔を見合わせた。

Episode : 175

「あ、ゴメン……」

慌てて謝る。きつとあんまりにも唐突だったから、みんな呆れたんだろう。

と、シーモアが笑った。

「違うって。あんたから誘うなんて初めてだから、みんなびっくりしただけだよ」

「え、そうだっけ……？」

あたし、そこまで引っ込み思案だっただろうか？

「やだルーフエ、自覚なかったんだ？」

「そりゃルーフエだもん、あるわけないと思うー」

みんな言いたい放題だ。

でも、これでいいのかな、と思った。

生まれ方も生まれた場所も、育ち方も瞳の色も髪の色も性格も、何もかもが違うけど、生きてることは一緒だ。

きつと問題なのは、生まれ方じゃなくて「生き方」なんだろう。

もちろんあたしたちはまだ子供で、独りでなんでも出来るわけじゃなくて、だから思い通りにならなかったりするけど……それでも、決められることはある

それをひとつひとつ、頑張ってしっかり選べばいいんだと思う。

まあ、あとで後悔する事も多いけど……。

それでも何も考えないで「何となく」よりは、ずっといいはずだ。

「んじゃ行くか。つか腹減ったし」

「またイマド言ってるー」

みんなが一斉に笑う。

「しゃーねーだろ、コイツに付き合っつて、俺まだ昼飯食ってねーっ
ての」

「ごめん……」

そういえばあたしは遅い朝食だったけど、イマドはふつうに食べてるはずだ。なのにお昼過ぎてるんだから、お腹がすくだろう。

「でもさ、今から行っつて残ってるかな？」

「なんかあるだろ。早く行こうぜ」

もうすっかり気持ちさがご飯に行っつてしまったみたいで、イマドが立ち上がっつてズボンの砂をはたく。

「おら、行くぞ」

「うん」

あたしも立ち上がる。

何も変わっつてない。何も解決してない。それどころか、この先もずっつと解決なんてしないだろう。

ただそれでも、否応なしに夜が来て朝が来る。

そうして寝て起きて食べて、気づけば日が過ぎてる。

けっつして忘れてるわけじゃないけど、そうやって生きていくんだと思う。

——一緒に、生きよう。

代わりにじゃなくて、その分をでもなくて、一緒に。胸が痛くて重いけど、それでも一緒に。

「何してんだ？」

「うっん、なんでもない」

碧い海の隅で、グレイシアが少しだけ、笑った気がした。

お知らせ

自サイトにて、期間限定でSFを公開中です。よかったら下のリンクからどうぞ

またこれとは別に、異世界トリップの連載も始めました。

こちらはなろう内に掲載です。よろしく願います

あとがき

最期までお付き合いくださって、本当にありがとうございました
本気で難しかったです。キツかったです。いろいろありましたし（涙）

暖かくなった季節と共に、皆さんのところも少しずつ上向くことを願います。そして私自身も。

明日からは新連載に移ります。久々に、みんな揃って暴れ回りの予定

【夜8時過ぎ】の更新です、たぶん。よろしければお付き合い下さい。

感想・評価歓迎です。お気軽にどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3458o/>

拙き者へ ルーフェイア・シリーズ15

2011年4月18日23時36分発行